九州産業大学国際文化学部紀要　第36号　23－84（2007）

アイルランド演劇を掘り起こす(4)
――ジェラルド・マクナマラ5作品とレノックス・ロビンソン初期3作品

河　野　賢　司

今回掘り起こしてみたのは，アイルランドの北（ベルファースト）と南（コーク）出身の2人の劇作家――ジェラルド・マクナマラとレノックス・ロビンソン――で，主として彼らの1910年前後の時期に焦点をあててみた。世紀転換期以降，首都ダブリンのアビー劇場を中心にアイルランド文藝復興運動が華やかに展開されたのはよく知られており，作家・作品研究も盛んであるが，同じ時期にベルファーストにおいては地元の劇団組織「アルスター文芸劇場」がマクナマラの個性的な諷刺喜劇を生み出していたことや，アビー劇場の運営に携わる前のコーク時代に創作されたロビンソンの初期作品にアイルランド農村社会の伝統的特質が浮き彫りにされていることなどは，寡聞ながら，余り言及されてこなかったように思われる[1]。拙論がこの点で新しい視座を提供できれば幸いである。

（Ⅰ）ジェラルド・マクナマラの演劇

(1)　ジェラルド・マクナマラの略伝

ジェラルド・マクナマラ（Gerald MacNamara, 1865-1938）は，1865[2]年8月27日ベルファースト市内北部のノース・クィーン通り（North Queen Street）で，プロテスタントの父親，カトリックの母親のもとに[3]，本名ハリー・モロウ（Harry C. Morrow）として生まれた。親はダウン州コウマー（Comber, Co. Down）出身の知的な家系だったという。ペン・ネーム兼芸名として用いられた＜マクナマラ＞は母親の旧姓である[4]。舞台衣装や舞台デザインなどで演劇製作に関わった2兄弟（フレッドとジャック）や『パンチ』誌にも載る有名な挿絵画家となった別の兄弟（ジョージ），さらにエドウィン，ノーマンという兄弟もいて，少なくとも6人兄弟の大家族だったことが推測される。彼の伝記的事実はあまり分かっていないが，塗装・室内装飾・リフォーム業を行なう同族会社――生家に近接するクリフトン通りのオレンジ会館に近接していた――の社長をマクナマラは務めるかたわら，喜劇の登場人物役の個性的俳優としても優れた実績を残し，アルスター文芸劇場に11編ほどの戯曲を書いている。1938年1月11日，ベルファーストで死去（享年72歳）。『スザン[5]と君主たち』（*Suzanne and the Sovereigns*, 1907），『沼地にかかる霞（かすみ）』（*The Mist That Does Be on the Bog*,

1909)，そして『常若の国(ティル・ナ・ノウグ)のトンプソン』(*Thompson in Tir-na-nOg*, 1912) などがマクナマラの代表作とされる。拙論では，まずアルスター文芸劇場の特徴と変遷を簡単に辿ったのち，上演記録の判明しているマクナマラ9作品[6]のうち，テキストが入手可能な5作品について詳細な梗概と論評を提示したい。

(2) アルスター文芸劇場について

アルスター文芸劇場 (Ulster Literary Theatre, 1902-1934) は，「プロテスタント・ナショナリスト協会」の2人のメンバー，ブルマー・ホブソン (Bulmer Hobson, 1883-1969) とデイヴィッド・パークヒル (David Parkhill, n.d.[7]) [劇作家としてのペン・ネームはルーイス・パーセル (Lewis Purcell)] によって1902年に結成された。設立当初の理念は，ウルフ・トウンやユナイテッド・アイリッシュメンの思想や原則を普及させることを目標としており，政治的情宣 (プロパガンダ) 手段として演劇活動を位置づけていた。ホブソンやパークヒルをこうした活動に駆り立てたのは，イェイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) やムーア (George Moore, 1852-1933)，マーティン (Edward Martyn, 1859-1923) らがダブリンで創始したアイルランド文芸劇場 (Irish Literary Theatre) に強く触発されたためである。

運動を展開するにあたって，ホブソンたちはまず，ダブリンのキャムデン通りのホールでナショナル・シアター・カンパニーの劇団員たちと会って自らの運動計画を説明し，モイラ・クィン (Maire Quinn) やダドリー・ディッグズ (Dudley Digges) は即座に称賛の意を示してベルファースト公演への出演を申し出た[8]。しかしながら，会見に応じたイェイツは「傲慢でよそよそしく」，彼からはなんの激励も受けなかったという。憤慨したホブソンは当初オリジナル劇の執筆と上演を目指したが，実際にはその決意は腰砕けに終わり，イェイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』(*Cathleen Ni Houlihan*, 1902) とジェイムズ・カズンズ (James Cousins, 1873-1956) の『レイシング・ラグ』(*The Racing Lug*, 1902) の2作品を1902年11月に聖メアリー小会堂 (St Mary's Minor Hall, Belfast) で旗揚げ公演した。背景の道具立ての搬入を会堂管理人から拒否されたため，背景をカーテンで覆うという急場しのぎのセットで対応したが，これが却って斬新な効果をもたらしたらしい。この上演の際に，イェイツから正式な上演許可は取りつけず，モード・ゴン (Maud Gonne, 1866-1953) の一存で認可されたようである。

1904年初めの第2回公演も，同じく『キャスリーン・ニ・フーリハン』の再演とエイ・イー (AE; George William Russell, 1867-1935) の『デアドラ』(*Deidre*, 1902) だった。観客の入りは疎らで，芝居の評判も悪かった。「ベルファースト市民の9割は

この婦人（キャスリーン・ニ・フーリハン）の名前を聞いたことなどなく，どうでも良かったのだ。実際，観客の中には，この婦人が登場するまでは芝居は＜うまく＞運んでいたのに，と語る者もいた」とマクナマラは記している。このとき「アイルランド文芸劇場アルスター支部」と勝手に僭称したが，御本家・アイルランド文芸劇場の秘書ジョージ・ロバーツ[9]（George Roberts, 1873-1953）からの抗議と上演料の請求を受けて，「アルスター文芸劇場」に戻した経緯がある。

アルスター文芸劇場がその名のとおりにアルスター色の濃い活動を展開するのは，創設者二人のオリジナル劇，すなわちホブソンの『愛蘭土（バンバ）のブライアン』（*Brian of Banba*[10]）とパーセルの『改革者たち』（*The Reformers*）を1904年12月８日に上演し，それと並行して文芸誌『ウラー』（*Uladh*）［Ulsterのアイルランド語表記］の刊行（４号で終刊）を開始してからである。11月刊行の創刊号は，ダブリンに匹敵するようなアイルランド思想・芸術の城砦をアルスターに築くことや，ダブリンのアイルランド国民劇場の＜詩的な＞舞台とは違った＜諷刺的な＞演劇を上演することを宣言し，偏見と無知，不信の洞穴でまどろんでいる北アイルランドの英雄たちを甦らせる希望を表明している。

この新しい文芸活動には，小説家フォレスト・リード（Forrest Reid, 1875-1947），ジャーナリストのジェイムズ・ウィンダー・グッド（James Windor Good），詩人ジョウゼフ・キャンベル（Joseph Campbell, 1879-1944），劇作家ラザフォード・メイン（Rutherford Mayne, 1878-1967），そしてジェラルド・マクナマラといった多士済々（せいせい）な文士が関わり，1915年には「アルスター劇場」（Ulster Theatre）と簡潔に名称変更して，北アイルランドの人々の生活を彼ら独自の声で描く50篇をこえる芝居を上演し，イギリスやアメリカにも巡業した。

しかしながら，30年をこえる演劇活動が1934年に幕を降ろしたのは，アルスター劇場が慢性的な財政危機にあったためである。公的助成を得られず，富裕な谷町（パトロン）にも恵まれず，活動拠点となる自前の常設劇場を持たなかった（‘houselessness[11]’）ために，公演収入は著しく限定され，舞台稽古の不足はプロの俳優陣の育成を妨げることとなった。そのため，活動は「素人の域から脱し得なかった[12]」面もあるだろう。ただ，「劇作家がアルスター劇場の弱点だった。こんにち［＝1935年頃］に至るまで，名声ある唯一の劇作家はセイント・ジョン・アーヴィン氏だけであり，しかもそれは，見込みがあると思われた多数の劇作家が30年前にはいたにも関わらず，である[13]」とする（フェィ兄弟の弟）W.Gフェィ（W.G. Fay, 1872-1947）の総括は不正確なものと言わざるをえない。アーヴィン（St. John Ervine, 1883-1971）以外にも，メインやマクナマラは卓越した劇作家として数編の優れた作品を残しているからである。彼らを支えるべ

き財政的基盤の脆弱さこそ問題とされるべきであろう。次の章からは具体的にマクナマラ作品を紹介していこう。

(3) ジェラルド・マクナマラの演劇作品

	邦題（拙訳）	原　題	初演日	初演会場
①	**『スザンと君主たち』**	*Suzanne and the Sovereigns*	1907.12.16	Exhibition Hall, Belfast
②	**『沼地にかかる霞』**	*The Mist That Does Be on the Bog*	1909.11.26	Abbey Theatre, Dublin
③	**『常若の国のトンプソン』**	*Thompson in Tir-na-nOg*	1912.12.9	Grand Opera House, Belfast
④	『先祖返り』	*The Throwbacks*	1917.n.d.	Grand Opera House, Belfast
⑤	『誠意』	*Sincerity*	1918.n.d.	Gaiety Theatre, Dublin
⑥	『フィー，フォー，ファム』	*Fee, Faw, Fum*	1923.n.d.	Grand Opera House, Belfast
⑦	**『降伏拒否』**	*No Surrender*	1929.1.23	Grand Opera House, Belfast
⑧	**『誰が語るのを恐れるだろうか？』**	*Who Fears to Speak?*	1929.1.24	Grand Opera House, Belfast
⑨	『陸地のトンプソン』	*Thompson on Terra Firma*	1934.n.d.	Grand Opera House, Belfast

（邦題の**太字**は本稿で扱う５作品）

①『スザンと君主たち』（*Suzanne and the Sovereigns*, 1907）　５幕の狂想劇

1907年12月26日，ベルファーストのエグズィビション・ホール[14]（Exhibition Hall）にて初演。もともと1900年にモロウ家の３兄弟――ジョージ，ノーマン，ハリー――によって聖スティーヴンの日（12月26日）に自宅で上演する扮装笑劇として書かれたものを，ルーイス・パーセルとマクナマラが共同で５幕劇に仕立て，マクナマラの担当は前半部分（第１幕，第２幕と第３幕の１場）で，残りの後半部分はルーイス・パーセルの執筆だという[15]。

第１幕　オランダ，アムステルダム市庁舎（Stadhuis）（＝王宮）の謁見室（Audience Chamber）。執事のピート（Piete[16]）が家具を磨きながら，ユダヤ人訛りで独り言――今日はベルファーストからオレンジ団（Orange Order）の代表団が君主に謁見予定だが，ストと暴動の街への訪問要請でなければよいが――を呟く。宮廷画家のヴィルヘルム・ヴァン・トオティル（Wilhelm Van Tootil）が登場し，描きかけの肖像画を手元の写真を見ながら描く作業を続ける。ヴァン・トオティルの説明によれば，半年前，オレンジ公がズイダー・ゼー（Zuyder Zee）の土手を散策中に遊覧馬車に乗った美女と出会い，王の投げキッスに答えて投げ返したのがこの写真であり，後を追いかけたが，他の乗客から物乞いと間違われて小銭を投げられてしまい，追跡を断念。その後，旅行代理店クックをはじめ四方八方に手を尽くしたが，その美女の消息はつかめなかった，という。写真を肖像画として描き直すうちにヴァン・トオティル自身も国王以上にこの女性に惚れ込んでしまったが，国王に知られると投獄の恐れがある，と涙ぐんで退場。

雷鳴のような太鼓の音が響き渡り，３人のオレンジ団員――団長(Master)，マッキャン(McCann)，ジョウゼフ卿 (Sir Joseph) ――が登場。国王と間違われたピートは，国王を呼びに下がる。肖像画に布をかぶせにきたヴァン・トオティルも国王やショムベルグ (Schomberg, [Frederick Herman, duke of], 1615-90) と間違えられるが，無視して退場。正しい目的地にいるのか不安になった一行は地図を広げて，たしかにここが「ダム」(the Dam[17]) であると確認する。

ウィリアム王が登場し，王座に就く。ジョウゼフ卿が挨拶を切り出すが，団長やマッキャンもしきりに口を挟む。目下のところベルファーストはストや暴動で治安が乱れており，イングランド王ジェイムズの宗教や政治には賛同できないため，アルスター・ユニオニスト協会はウィリアム王にこそアルスター王として即位してほしいと，無修正の全会一致で決議した旨を伝える。ウィリアム王はこれを聞いて謝辞を述べるが，「で，アルスターはどこにあるのか？」との問いに一同は驚きと不快感を隠せない。アイルランド北部地方と知ったウィリアム王は，現在の所領オランダを捨ててアイルランドの一地方に移る訳にはいかない，と提案を拒否する。ジェイムズ王と戦って勝利すればイングランド王の道も開かれるし，白い駿馬も奉納できると一同は食い下がるが，ウィリアム王はもはや相手にしない。

ところが，肖像画を眺めていたマッキャンが，そこに描かれた女性が団長の娘スーズィ＝アナ(Susie-Anna)であることに気がつく。ウィリアム王は肖像画と団長を見比べて，「母親似に違いない」と言いながらも，愛しい彼女に会わせてほしい，と懇願する。すると団長は，ジェイムズ王と戦うことを条件に娘を与えると言い，他ならぬジェイムズ王もまったく同じような経緯で彼女にひと目惚れしてしまい，求愛を続けていることを知らせる。これを聞いたウィリアム王は３時間後の午後４時の船便でアイルランド渡航を決断，一同は感謝して謁見室を後にする。ウィリアム王はピートに旅支度を命じる。

やりとりを立ち聞きしていたヴァン・トオティルが登場。肖像画を描いたから写真の方を自分に与えてほしい，と願い出て，自分もまたこの女性を愛していると告白する。ウィリアム王ははずした手袋でヴァン・トオティルを叩き，画家はパレット・ナイフを取り出して対抗する。そして，いったん逃げ込んだ舞台袖で，ある瓶から睡眠薬のようなものを写真にふりかけて，王に返す。王は取り戻した写真にキスし，やがてよろめいて床に倒れる。ヴァン・トオティルは写真を奪い返し，トランプのハートの女王(クイーン)を代わりに置いて，立ち去る。「国王が目覚めるまでに３時間が経過したと想像すべし」の紙が降りてくる。目覚めた王は写真が奪われているのに気づくが，無事に残された肖像画を胸に押しつけ，生乾きで濡れた絵の具が付着して顔の部分が無くなってしまい，絵を放り投げる。荷物を抱えたピートが登場し，船が出てしまったことを伝える。幕。

第２幕　アイルランド北西部にあるデリー市の城壁の内部。深夜午前０時の衛兵交替が行なわれ，衛兵隊長が陣頭指揮をとって退場。任務を終える第１の衛兵フランシスコ・マッキャン(Francisco[Francey]McCann)とこれから任務に就くアンディ (Andy) が『ハムレット』の冒頭場面のように挨拶を交わす。前者は「シャンキル通りシェィクスピア協会」(Shankill Road Shakespearian Society)の会員，後者は「サンディ街悲劇(セスピアン)クラブ」(Sandy Row Thespian Club) の元会員で，ともに素人芝居の経験があるらしい。立去り際にフランシスコは上手奥に向かって誰何する。現れたのは団長のウィリアム・ジョン (William John) で，アムス

テルダム港でウィリアム王とともに乗船の約束だったが，王が現れなかったので案じている。娘のスザンは安全な「向こうの塔」にかくまっているらしい。

城門をノックする音が響き，疲れた旅人と名乗る，聞き覚えのある声がする。門を開けると，画家ヴァン・トオティルが登場。ジョンと同じ船で密航したのち，はるばるキャリック港から徒歩で辿り着いたのだと言う。彼は愛しいスザンのためなら命も惜しくはない，と訴え，フランシスコとジョンは面倒を起こしそうな彼を地下牢へと連行する。

城壁の上にジェイムズ王が，片手を伸ばして，さながらハムレット先王の亡霊のように登場する。ジェイムズ王は，ウィリアム王と誤解したアンディに城門を開けさせ，入城することに成功し，スザンの居場所はデリー総督のランディ（Robert Lundy, ? - ca.1717）だけが知っていることをまんまと聞き出す。しかし，ジェイムズ王が胸の星章をはずして褒美として授けるにいたって，アンディは彼がウィリアム王ではないことをようやく確信する。すると，ジェイムズ王は分厚いサンドウィッチをアンディに手渡す。彼は2ヶ月もろくに食事をしていない[18]ので貪りつく。大事な要件があり，国家存亡の危機である，とランディ総督に伝えれば，さらにもう一つサンドウィッチを与えるとの条件を受け入れて，アンディは総督宅を訪ね，指示どおりの任務を果たす。

ジェイムズ王の伝令と知った総督はすぐさま王の御前に駆けつける。王は「裏切り者」として悪評判のこの総督をしばらくからかったあと，スザンが塔の中に匿われていることを白状させるものの，スザンはウィリアム王を恋慕しており，ウィリアム王到着まで匿うことを名誉にかけて約束した，と総督は断言する。しかしサンドウィッチを差し出されるや，その誓いを破ると言い出し，かぶりつく。それが最後のサンドウィッチであることをアンディに聞かれてしまうと，「死人に口なし」（“Dead men tell no lies.”）の暗示で王はこの衛兵の殺害を命じる。総督は塔の話を持ち出し，アンディが塔を振り返った瞬間に背中を突き刺して殺し，なおもサンドウィッチをうまそうに貪る。ティルコンネル（Patrick Tyrconnell, 1630-91）将軍と会う約束で時間にゆとりがないジェイムズ王は，スザンを手に入れる段取りを総督に依頼し，褒美に大佐昇格を請合う。城門を出た後，1シリングの小銭を求めるジェイムズ王に，手持ちのなかった総督は，死体となって横たわるアンディのポケットから金を盗み，王に手渡す。王は，彼の将軍昇格を請合って，退場。

場面は真っ暗になり，やがて明るくなって夜明けを暗示する。衛兵フランシスコがアンディの死体を発見し，総督の仕業だとすぐに理解して，デリー市民を呼び寄せる。フランシスコは群集の喝采や野次を受けつつ，総督糾弾のアジ演説——城壁の外には本物の狼がいるが，城壁の中には羊の皮をかぶった狼がいて，ソーダ・パンと引き換えに市民を売り飛ばしている，総督は市に忠誠を尽くす義務がありながら果たしていない——を叫び，死体付近にある十字架模様のゴム靴の足跡こそは総督が犯人である決定的証拠だと訴える。

一方，総督は自宅の窓から，反論の演説を行なう。曰く，イングランド人の誇りはフェア・プレイ精神であり，自分は殺人も贅沢暮らしもしていない，この3週間に食べたのは古靴（an old top boot）だけで，スパイク（spur）しか残っていない，と抗弁する。

市民の中からスミスという男が，総督の自宅退去と火あぶり刑を提案し，ダフという別の男がこれを支持す

る。フランシスコはこの動議に賛成と反対の意思表示を市民たちに求め，全員が賛成の声を挙げる。

総督は自宅から引きずり出されるが，意外にも泰然とした様子で，自分を火あぶりにはできない，と居直る。その根拠は，自分は焼死保険に加入しており，火あぶりという悪意ある傷害があれば保険会社が犯人相手に訴訟を起こすだろう，という根拠薄弱なものであった。市民たちは総督を取り囲み，総督のダミー人形が城外へ放り出される。幕。

第3幕　野営(キャンプ)の焚き火(ファイア)の周りに兵士たちが寝そべり，ケリー大佐[19] (Colonel Kelly) が泣きながら家族からの手紙を読んでいる。ティルコンネル将軍が登場。娘サリー (Sally) が麻疹(はしか)にかかったぐらいで泣いている大佐を叱咤激励し，将軍警備役なのにだらけている兵士たちを起立させる。将軍はかつてフランス戦線で所属したアイルランド旅団の武勇とワインや女たち (アイルランド，フランス，とりわけスペイン女性) を懐かしく回想する。

物音がして，城壁から放り出されたランディ総督が軍曹に捕らえられて連れて来られる。将軍は即刻の射殺を命じるが，総督はジェイムズ王との面会と公正な裁きを嘆願する。ケリーもいささか無造作すぎる措置だと批判すると，将軍はケリーが民兵にすぎないと繰り返すので，憤慨したケリーは剣を抜き，将軍も応じて剣を合わせる。(まるで『森の中の子どもたち[20]』[*Babes in the Wood*] の一場面のようだ，と総督。) しかし，将軍は総督の射殺を優先して，決闘を後回しにしようとする。

ジェイムズ王が登場。デリーから脱走したスパイを現行犯で (red-handed) 逮捕した，との将軍の事情説明に，総督の手は赤く (red-handed) はなく黒いと否定し，公正な裁きを経ずに処刑を急いだティルコンネル将軍を伍長降格，代わってランディを約束どおり，将軍に昇格させると宣言し，月曜までの滞在先ブンクラナ (Buncrana) へと向かい，退場。

ティルコンネルとランディの立場は逆転し，ランディ新将軍はティルコンネルに射撃区域に行くように命じる。葛藤の末，ティルコンネルは射殺を名誉ある死として受け入れる覚悟を示す。するとランディは射殺よりも嫌なものをケリーに考えさせ，「家族宿舎 (married quarters) に石炭を運ぶこと」をケリーは思いつき，嫌がるティルコンネルがその労役を実行するように兵士たちに命じる。

次にランディはケリーに対して，「決死隊員」(“forlorn hope”) としての重大任務を命じる。それは，3人の兵士からなる軍を率いてデリーの城門に赴き，第1の笛を合図に城門を突き破り，第2の笛で徒弟少年たち (apprentice boys) を一人残らず銃殺し，第3の笛で「騒擾取締法[21]」(riot act) を読み上げて人通りを空にする，そして第4の笛で「向こうの塔」に行ってスザンを確保して連行する，という手順であった。

陸軍急信部隊 (A.D.C.＝Army Despatch Corps) の者が，総司令官宛ての特派文書を携えて登場。思わず伸ばしたティルコンネルの手を叩いて，ランディが受取り，読み上げる。それはオレンジ公の軍艦がロッホ港に入港し，もはや撤退しか助かる見込みはないことを知らせる文面であった。ランディは先の決死作戦の撤回をケリーに伝える。

銃撃音が聞こえてくる。四方を敵軍に囲まれたことをケリーが報告し，ランディは撤退を指示する。ジェイムズ王が引き返してきて，撤退命令を出す臆病なランディを将軍からスパイに降格させる。何をスパイするの

か，というランディの問いに王が困惑していると，数日中にキャリックファーガス上陸見込みのウィリアム王の監視業務をケリーが提案し，受け入れられる。ランディ以外の者は退場。

城壁に梯子がかけられ，地下牢を脱出したヴァン・トオティルが現れ，自由の身を欣喜して煙草を一服する。彼は噂に聞くランディ総督との出会いを喜び，煙草を持った両手を伸ばして握手を求めるので，総督は怯える。張りぼて人形になり火薬を詰められる年中行事の主であるランディは火が苦手であると悟って，ヴァン・トオティルは煙草を消す。彼は，自分はウィリアム王の宮廷画家であるが，愛する女性スザンをめぐって王と敵対していることを明かす。一方のランディもウィリアム王上陸監視の任務を任されたことを伝え，いっしょに監視行動をしないかと画家を誘う。ヴァン・トオティルは承諾し，二人は揃って出発する。幕。

第4幕　キャリックファーガス港の桟橋 (landing stage)。暗闇の中，ランプを下げ望遠鏡で覗きながら水兵がウィリアム王の船舶の到着を待っている。3人の兵士も配置されている。ランディとヴァン・トオティルは樽の背後に蹲(うずくま)って隠れている。

兵士が水兵に，デリーが昨日（テキストでは6月25日）解放されたものの，歓喜の演説や宴に沸くなか，ジェイムズ王がこっそり侵入してスザンを拉致し，ダブリンへ向かったという最新情報を伝える。ヴァン・トオティルが呻き声をあげる。兵士と水兵は気味悪がり，以前サッカーの試合で人を殺したことがある水兵にきっと遅まきながら亡霊がとりついたのだと兵士は推測し，これから夜中に亡霊に悩まされるだろうが，馴れてしまえば逆に幽霊が現れないと寝つけなくなるだろう，と語る。スザンはジェイムズ王に気があって自分の意志で駆け落ちしたのだろう，と兵士が私見を述べると，また（ヴァン・トオティルの）呻き声がする。亡霊は話しかけられないと自分からは喋れないものだから，亡霊に話しかけるように兵士が水兵に促すが，彼は怖くてできない。

遠くから鐘の音と歌声が聞こえ，ウィリアム王の船が到着する。ギンクル（Ginkle, [Godard van Reede, Baron van], 1630-1703）とショムベルグ，続いてウィリアム王が上陸する。王はいったん食堂 (refreshment room) に入ったのち，閲兵式に臨み，兵士を鼓舞する。『デリー歩哨』紙（*The Derry Sentinel*）が王に届けられ，「デリー解放，ジェイムズ王とスザンの婚礼が臨時司教座聖堂で挙行見込み」との新聞記事にウィリアム王は呻き声をあげ，ヴァン・トオティルも同様に呻き声をもらす。王は自分以外の誰が呻き声をあげたのか，側近二人や兵士たち，水兵たちに問いただす。

ショムベルグが隠れていたヴァン・トオティルとランディを発見する。心からスザンを愛していると泣き叫ぶヴァン・トオティルを，王は連行して檻に閉じ込めるように命じる。一方，ランディは見張り役をしていた裏切りの事実を認めるものの，体に火薬がいっぱいあることから，戦勝記念の花火として使うことになり，ダブリンまでの道案内役を果たすために，王の剣先にキスして宣誓の言葉を復唱させられる。

第1幕で王のアイルランド来訪を要請した3人のオレンジ団員――ジョウゼフ卿，団長，デン[22] (Dem) ――が息を切らして駆けつける。馬車の車軸が壊れて遅刻しかかったのだった。すでに新聞報道と同じ内容ではあるが，デリーからの急信を彼らは王に届ける。3人はランディ総督の存在に気がつき，反逆者に対する厳格な処罰を王に求める。ダブリンで火刑に処す，と王も応じ，ジェイムズ王より一刻も早くダブリン入りするた

めに，出発を命じる。兵士たちは王に万歳三唱し，ランディの先導で一行は出立する。救世軍の音楽。幕。

第5幕　ボイン川近くの宿屋兼居酒屋「白馬亭」。酒とトランプに興じる兵士たち。ボインの戦いはほぼ終り，審判員はまだどちらの陣営が勝利したか，決定を下していないものの，外来のウィリアム王はまるで生え抜きの北アイルランド人であるかのように「名誉ある政体」（“glorious constitution”）について演説をした，と第1の兵士が宿屋の主人に教える。ご本人はたいした「体質」（constitution）を持ってはいないが，との主人の駄洒落に，たしかに戦闘中，王はずっと咳をしていた，と兵士も応じる。

それまで同僚の勧める酒も断り，ノートに書き物をしていた第2の兵士・マコーミック上等兵（Private McCormick）が，戦場を抜け出して想を練っていた詩をようやく書き終え，あわせて作曲もしたと言って，みずから歌って披露する。歌詞は「7月1日の悲惨な戦闘で多くの兵士が地に倒れた。ジェイムズ王は塹壕線に退却用野営テントを築いたが，ウィリアム王は澪杭(みおぐい)壁を打ち込んですべて火達磨(だるま)にした」という内容で，おおいに兵士たちの喝采を浴びる。

ノックがあり，「6マイルと1ヤード」（約10km）という中途半端な距離を歩いて喉が渇き，飲み代(しろ)はちゃんと持ち合わせている，と答えたランディが中に通される。兵士は<裏切り者>ランディに冷淡な態度を示し，ランディはそのレッテルは猟官運動の政治家の党標語(スローガン)にすぎない，と反論するが，この日，戦場でジェイムズ軍の間にいたことを指摘されると，『デリー歩哨』紙の特派員だったから，と下手な言い訳をする。

ケリー大佐と団長が登場。団長は，一人娘スザンを警護する約束を破りジェイムズ王に彼女を差し出したことを非難し，ランディを反逆罪でウィリアム王のもとへ連行すると憤慨して言い渡す。ケリー大佐は，スパイとして派遣されていながらジェイムズ王に寝返ってその道案内役を務めたことに対して，脱走罪でジェイムズ王のもとへ連行する，と言明する。二人はほぼ同文（国王の名前だけが異なる）の逮捕状を同時に読み上げる。鳥ならぬ身ゆえ同時に2ヶ所へは行けない，と嘯いていたランディだが，一転して，アイルランドのために殉死する，と殊勝にも語り，いったん上手へ退場。

頭と顔半分を包帯で隠し，吊り包帯に眼帯で変装したランディが登場。ケリーと団長に対して頷きや筆談で，負傷した戦地レポーターだと偽って，宿屋を出て行く。

まもなく二人はこのレポーターがランディだったことに気づくが，すでに逃走しており，ドアは鍵がかかっている。ノックがあり，マッキャンが到着。キーはドアの内側にささったままと分かり，宿屋の主人に開けてもらう。

マッキャンは，ボインの戦いがウィリアム王の勝利だったことを伝える。審判員のスコアは304対291と僅差（13点差）の結果[23]で，白馬でなく茶馬で川を渡ったルール違反でウィリアム王も15点減点だったが，ジェイムズ王はまず敗走行為で50点減点，敗走時のスピード違反で19点減点，そして道路状態悪化による敗走不能での15点減点が致命的失点となったという。兵士たちは乾杯する。

ウィリアム王，続いてジェイムズ王が兵士たちとともに登場。先ほど逃走したランディが今度は大きな口ひげをつけた変装で，懲りずに登場。二人の王は戦場での互いの健闘と称え合い，今後の友好関係を誓うが，やはり戦闘の目的であったスザンを失ったことでジェイムズ王は失望を隠せない。なにしろ，なくしたのが「た

んなる王冠や国家，王国，帝国だったら，落ち着いて敗北を眺めることも出来ようが，いとしのスザンをなくしてしまったのだ」(50) から。

檻に閉じ込められたはずのヴァン・トオティルが，やつれて，鉄鎖を引きずりながら登場。頭脳的脱走を自慢するが，どうやら単に鍵のかかっていない窓から抜け出したらしい。スザンをめぐるボインの戦いはすでに終わった，とのマッキャンの説明に，自分は銃剣による下劣な戦いではなく，残酷な絶望を敵に回す魂の戦いに参加してきた，とヴァン・トオティルは訴える。そしてこれまで１枚の写真をたよりに何百とスザンの肖像画を描いてきたが，死ぬ前に一度だけ実物の彼女を見ながら肖像画を描きたい，とウィリアム王に直訴する。王は，その肖像画を自分に提供することを条件にこれを認め，兵士の先導でヴァン・トオティルはスザンのもとへ向かう。その途中，ランディに歩み寄り，彼の付け髭を剝がして，わざと挨拶して出て行く。

変装がばれたランディはショムベルグと団長に引っ張られて，二人の王のもとへ連行される。ランディは，オレンジと緑，両方の色合いの美しさが分かる審美眼を持ったがために，双方から裏切り者呼ばわりされ，誤解されてきた，と自己弁明に努め，慈悲を乞うが，両国王の尋問に対しいずれも言い逃れしかできず，ジェイムズ王は彼の身柄をウィリアム王に引渡し，予定通りに戦勝祝賀の花火として打ち上げることをウィリアム王は断言し，気絶しそうになったランディは気付け薬（ブランディ）を求める。

ウィリアム王は団長に娘スザンを御前に呼び寄せるように命じる。しかし団長は，取り乱した様子で戻ってきて，病気や死よりも悪い知らせ——スザンが画家ヴァン・トオティルと駆け落ちしたこと——を伝える。今度はジェイムズ王がウィリアム王に同情の言葉をかけ，両者の絆はいっそう深まる。しかし，戦闘の目的であったスザンを失ったいま，ウィリアム王は関心のないアイルランドの王位を譲り，代わりにイングランドを統治すると申し出る。しかし，ジェイムズ王も，もうごたごたは沢山，としてこの申し出を固辞する。

ウィリアム王は善後策を練り，ショムベルグにアイルランド王位を打診するが，彼は即答で拒否する。ギンクルも同様である。ティルコンネル将軍は，多忙とゲール語習得には高齢であることを理由に断り，ケリー大佐もゲール語は初級本の知識しかないから，と遠慮する。兵士一同にアイルランド国王志願者を募っても，誰も返事をしない。挙句の果てにウィリアム王は，火刑を撤回する条件でランディにアイルランド王位を提案するが，彼は火刑の方を選び，自縄自縛にあったウィリアム王を痛罵して，復讐を果たした，と快哉を叫ぶ。

ウィリアム王は誰も仲間がおらず自分は天涯孤独だ，と言って泣き出し，ジェイムズ王は躊躇ののち，彼の手を握る。「妖精」が登場し，背後から両国王の頭上にオリーブの小枝を掲げ，舞台前方に出て「皆様方，よい新年（おとし）をお迎えください，よろしければ明晩もお越しください」と告げる。終り。

アイルランド史において重要な転換点となるボインの戦いの両雄，ウィリアム３世とジェイムズ２世の対立が，たんなる恋の鞘当てに起因するもので，統治領土としてのアイルランドはどちらも政治的関心の外にあり，部下の将軍や兵卒，果ては死刑囚にいたるまで，アイルランド王位を望まない，というこの芝居は，プロテスタント，カトリック双方に対する痛烈な諷刺となっている。同時に，両国王が和解し，勝利者

のシンボルであるオリーブの枝が両者の頭上に掲げられる結末は，二つの宗派や陣営の平和共存という，きわめて楽観的ではあるが望ましい未来像を提示するものとして，支持できる大団円だろうと思う。

初演時のプログラムは，ウィリアム３世が颯爽と白馬に跨る勇姿ではなく，幼児用の木製揺り馬に乗っているイラストを掲げたために観客から抗議を受けたそうだが，作品そのものの歴史的正確さへの批判を受け流すために，プログラムには次のような断り書きが添えられていたという。

「観客の皆さんのなかで（この芝居の）ある場面や出来事を歴史的事実にまったく基づかないとして退けようというご意向の方々は，マコーレー，レッキー，フロイド，リーランドといった人気作家の作品に加えて，以下の典籍を綿密に研究・照合されるまでは，判断をお控え下さいますようにお願いいたします。」

そして参考典籍として挙げられた長い文献リストには，２つ折版（フォリオ）の『アイルランド下院議事録　1613年〜1800年』19巻，ハウエルの『国事法裁判』15巻，ケイン著『アイルランドにおけるウィリアムとジェイムズの戦争の歴史』などの浩瀚かつ専門的な文献が並んでいる。

無論，これもまた芝居同様に，手の込んだ冗談ではあるのだが，仮にも歴史を持ち出してこの芝居を批判するつもりなら，必要とされる深い学問的裏付けを提示すべきだというマクナマラの主張がこめられている。

予想される批判に対してこういう形で予防線も張ってあり，もともと荒唐無稽なバーレスクを生真面目に論じても意味がないかもしれないが，念のために史実に反する事柄を以下に指摘しておこう。

冒頭において，オレンジ公ウィリアム３世を新しい統治者として迎えるために，ベルファーストからオレンジ団の代表団がオランダに陳情に訪れる。しかし，オレンジ団は1690年のボインの戦いに勝利したウィリアム３世の栄誉を称えるべく，1795年９月21日，アーマー州ロッホゴルのダイアモンドの戦いで勝利したオレンジ・ボーイズたちが，ジェイムズ・スロウンの旅籠に集まって正式に結成したのが起源とされている[24]。つまり，オレンジ団は1690年には存在していなかった組織なのであり，この設定は時代錯誤である。さらにまた，武力干渉をウィリアム３世に要請したのは「トーリー・ホイッグ両党の７人の指導的な議員たち[25]」であり，これに応えてプロテスタント十字軍を派兵したウィリアム３世は，イギリス南西部のトーベイ港から上陸してロンドンに入城，この際にジェイムズ王がフランスへ亡命したために，妻メアリー２世と共同統治の王座につき，いわゆる「名誉革命」が成就することになる。従って，この辺りの史実が戯曲ではごちゃ混ぜになっている感は否めない。

標題の美女スザンは結局，肖像画以外には舞台には登場しない。二人の国王の心を弄んだ形のこのつれない女性が宮廷画家と駆け落ちしたのは，画家の誠意や情熱が通じたのか，国王との結婚がよほど嫌だったのか，たんなる気紛れなのかは謎のままである。話の展開からすると，写真写りがよいだけで実物はそれほどの美女ではない，という落ちも途中では想像されたが，マクナマラはそこまでの笑劇化は避けたようだ。

ちなみに「スザン」という名前はヘブライ語で「百合の花」を意味し，百合はウィリアム３世ゆかりの花である。７月12日の記念パレードでは，鼓手隊の大太鼓（Lambeg drum）にはオレンジ公ウィリアムを象徴するオレンジ色の百合の花束を結ぶことが多い[26]。ウィリアム３世が求愛する女性の名前としては，これにまさるものはないだろう。

②『沼地にかかる霞』（*The Mist That Does Be on the Bog*[27], 1909）

1909年11月26日，ダブリンのアビー劇場にて初演。

アイルランド西部のコネマラの農家が舞台。炉辺で繕い物をする老婆ブリジット・クィン（Bridget Quinn）は，農作業もせずに別室で昼寝をしている夫のマイケル（Michael Quinn）の怠惰に不満を並べ，「貸家―家具付き」（“To let－furnished”）の紙を窓に貼るように命じる。都会の上流階級の人々が自動車に乗って地方の農家に投宿するのが昨今の流行，との情報をダブリン帰りのドーラン神父から得ていたからである。

さっそく自動車の警笛が鳴る。驚きの声をあげる夫を，リスヴァーナ技術学校主任（Technical School at Lisvarna）ともあろう者が科学時代の音を怖がってどうするの，とブリジットはからかうが，のどかな好天ならいざ知らず，黒雲が山頂にかかり白霞が海から迫る不気味な荒天のおりに警笛を聞けば誰しも驚くのは無理もない，と夫は言い訳する。

グラディス（Gladys[28] Magill）とスィスィ（Cissie[29] Dodd）姉妹が戸口に現れる。スィスィは早速この農家の佇まいや夫婦の「詩的なことば」（poetic language）に惚れ込むが，グラディスは慎重に料金交渉に入り，１週間滞在で10シリング（＝半ポンド）で折り合う。滞在中はこの老夫婦は親族の家に移って農家を明け渡すといい，二人は退場。

自動車を運転してきたグラディスの夫フレッド（Fred Magil [*sic*]）が遅れて登場。彼ら３人はみなダブリンの俳優で，新作の稽古のために舞台衣装や化粧箱の荷物を携行している。グラディスとスィスィは「アイルランドの新しい運動」に共感して生の農民劇の雰囲気を味わえるのを喜んでいるが，粋な軍人役で喝采を浴びたことのあるフレッドは「放浪者[30]」（tramp）の野暮ったい衣装に気乗りせず，この農家を「豚小屋」（pig-sty）と呼んで，一服しに別室へ下がる。

一方，女性２人は旅の疲れも感じずに早速に，衣装（ハンカチやエプロン）をつけて，グラディス作『いったい何の騒ぎだ？[31]』（*What's All the Stir About ?*）の稽古に取りかかる。戻ってきたフレッドは，「本調子でない（I don't feel up to the mark）から，ちょっと付近をドライブしてくる」と観客もいない真昼間の

稽古を嫌がり，２週間のレンタ・カーの旅行に出た２日目にこんな「掘っ立て小屋」(shanty) に落ち着くのはもったいない，と不満を洩らすが，妻と義妹の懇願に屈し，衣装替えに別室に向かう。

グラディスとスィスィは，独特なアイルランド英語の芝居の一節を二人でしばらく演じる。すると戸口から，本物の「放浪者」が近づいてくるのを発見する。放浪者の生の語り口が聞けると喜ぶグラディスに，スィスィは思いがけない提案――たまたま衣装を身に付けているのだから，<農場小屋に住む日雇い農夫> (cotter folk) になりすまして，この放浪者に応対する――を持ちかける。グラディスも遊び心をそそられてこれに応じ，別室のフレッドにもその旨を知らせる。

放浪者の男クラレンス (Clarence St. John) が登場。アイルランド訛りで客人を迎えて気配りを示す二人の女性に，彼は脇台詞で「これは嬉しい。１時間で芝居が書けそうだ」とこっそり洩らしたあと，同様のアイルランド訛りで挨拶の会話が続く。しかし，バリーナの市 (Ballina fair) から来たのか，とのグラディスの問いかけに，ラスマインズ[32] (Rathmines) という (ダブリン市南部の) 地名を放浪者は挙げ，「富と権力を求める競争のあまり，もめごとに溢れ，聖なる宗教が忘れられかけた，安らぎのない大都会の近郊」と説明する。独特のアイルランド英語表現の台詞を繰り出し続けるのに困難を感じてきたグラディスは，放浪者の接待をスィスィに任せて，別室から出てきた夫フレッドと奥で打ち合わせる。

勝手の分からぬ他人の農家で探し出すのに手間取ったものの，スィスィは放浪者にミルクを差し出す。いにしえの吟遊詩人が果てたのち，その魂を西部の放浪者に委ねたと聞くから，あなたは詩人ですか，とスィスィは尋ねる。すると放浪者は，あなたの美しき顔と優雅な仕種という魅力こそが私のことばをオシーンの奏でるハープの調べのように甘美にするのです，とスィスィを口説きにかかる。返答に窮してスィスィもグラディスに交替を訴える。

囲炉裏端に近すぎると体に障るのでは，と声をかけるグラディスに，灰色の靄の立ち込める沼地(the bogs, when the grey mists was on them [63]) を渡ってきて濡れているので大丈夫です，と放浪者が応じると，暇を持て余してゴルフの素振りをしていたフレッドは，いまや霧はすっかり晴れて太陽が降り注ぎ，リプトン卿 (Sir Thomas Lipton, 1850-1931) は船遊び中，と茶々を入れる。リプトン卿の頭髪１本が１ポンドのソヴリン金貨 (ほどの金持ち) との噂ですな，と浮浪者が返すと，金の玉座のエドワード王 (King Edward VII, 1841-1972；在位1901-10) と同じく禿頭だが，湯水のように蕩尽できる大金持ちであるのは確か，とフレッドは切り返す。グラディスに叱られたフレッドは，バンゴーで開催されたアルスター・ヨットレース (Ulster regatta) で卿に紹介されて握手したことがあり，とてもいい人物だ，と訂正し，グラディスに促されて，ともに退場する。

一人残された浮浪者は，スィスィ (彼女のことを芝居の登場人物名の「モイラ」(Moira) だと浮浪者は思い込んでいる) に一目惚れしてしまい，正直に正体を明かして結婚を申し込もう，と独白する。

スィスィが登場。食事を勧める彼女に，自分は妻子はおらず独り身であること，困惑の表情を浮かべているのは，きょう我が身の葬儀を出したため，と謎めいた答えを放浪者は返す。彼はモイラ (＝スィスィ) の純朴な瞳に映る，貧苦に耐え神を信じる素朴な暮らしの純粋さを理解するためには，ラスマインズの贅沢三昧を享

楽していた古い自分を葬り去り，田舎農夫にならねばならないことを悟ったのだとして，偽の頬髭を引き剝がし，本名クラレンス・セイント・ジョンを明かして，以下のように事情を説明する。

クラレンスは実はダブリン在住の民衆演劇の劇作家で，プロットには問題がないが，地方色を戯曲にうまく取り込めないでいた。そこで取材目的で田舎にやってきたものの，都会人の服装では信頼を得られないと考え，放浪者に変装して現れたのだという。

これを聞いてスィスィは，自分も身を偽っており，名前はモイラでない，と泣きながら打ち明け(本名がスィスィと知って，ミュージカルの登場人物の名前だとクラレンスは落胆する)，舞台衣装のエプロンとネッカチーフを外して，都会風の服装を示し，経緯を説明する。スィスィがベルファースト出身だと告白した時のクラレンスの幻滅と衝撃は大きく，彼女はむっとして，これでおあいこ（we are quits）で，あなたはどうせ田舎娘しか愛せないのしょう，と突き放す。

グラディスとフレッドが登場。[以下，削除されたタイプ原稿では，スィスィが放浪者の正体を二人に明かし，3人は自己紹介し，舞台衣装や化粧を落としに夫妻が退場する場面がある。] クラレンスが頭を抱え込んで事態を把握しようとしていると，農家のあるじマイケルが再び登場し，暖房用の泥炭を置いて無言で立ち去る。彼も役者仲間なのか，とのクラレンスの問いに，スィスィは悪戯(いたずら)心から，自分の父親だと答える。自分が愛しているのは田舎娘でなく君だ，とクラレンスはスィスィに求愛するが，放浪者の変装姿のままでの告白は信じられないと言う彼女の反論に，着替えに別室に退場。

マイケルが再び登場し，意味不明の電報「リスヴァ―ナ到着，6時に郵便列車で帰宅―モイラ」が届いたことを伝える。マイケルには10年前に渡米した娘モイラがいて，帰国を事前に知らせる手紙が郵便事故かなにかで未着なのだろうという推測がなされる。フレッドは気転を利かせて，20マイル離れたリスヴァーナ駅にモイラを迎えに妻と自動車で出かける。スィスィはモイラ帰郷の一報をブリジットに知らせに走る。

マイケルは10年ぶりに再会する娘モイラの幼いころを思い起こして感慨にふける。正装に着替えたクラレンスは，マイケルはスィスィの父親だと騙されているため，モイラへの感慨を役者の舞台稽古だと思い込んで話しかけ，かみあわない会話にマイケルは苛立ちを募らせる。おまけに，娘さんとの結婚を認めてほしい，とクラレンスが切り出し，役者の付け髭と邪推したマイケルの頬髭を無理矢理に引き剝がそうとするにいたって，激昂したマイケルはクラレンスの喉首をつかんでテーブルに押し倒す。

妻ブリジットが登場し，夫をクラレンスから引き離す。夫から事情を聞いて，クラレンスを気の毒な精神異常者だと誤解してミルクを勧めるが，クラレンスはこの闖入者もまた農民の衣装をつけた役者なのか，それとも本物の農民なのか，当惑し，思わず「あんたは本物か」とブリジットに訊いてしまう。するとそれまで同情を見せていた彼女は，これを侮辱発言と受け止め，狂人は家には入れない，としてクラレンスを引きずり出そうとする。このとき，スィスィが戻り，クラレンスが結婚の許しをスィスィの父親（と騙された）マイケルに求めたのが騒動の原因だとわかって，大笑いする。自動車の警笛が鳴り，ブリジットとマイケルは娘を出迎えに飛び出す。スィスィの言葉は嘘で，マイケルはこの農家の持ち主と聞かされて，クラレンスは卒倒する。幕。

よくできた喜劇であるのみならず，当時の文芸復興運動を痛烈に諷刺した作品である。シング（John Millington Synge, 1871-1909）の顰に倣って[33]，西部の農民の話し言葉を修得に訪れた劇作家クラレンスは，服装や髭といった外見はもちろん，言葉遣いも見事に装って，コネマラの農家を訪れる。そこでは彼が理想とする純朴な田舎娘モイラ（＝スィスィ）と出会い，都会を捨てて田舎での質素な新生活を決意する。しかしながら，実は彼女もまた，農民演劇の情緒に憧れる都会女性であることがわかる。在郷人（びと）を装う都会人の鉢合わせという皮肉な設定は，カントリー・ブームの薄っぺらさを見せつけている。スィスィがクラレンスの求愛を受け入れて，安直にめでたし，めでたしと終わらない結末が秀逸である。宿の主人の娘を迎えに自動車を走らせるフレッドの親切心や，大きな荷物を抱えて帰国しているだろう娘のために，自分は自動車に乗らず空きスペースを確保しておく方がよいと判断するスィスィの賢明な気配りは，＜田舎人＝親切，都会人＝冷淡＞という偏見を覆すもので，劇全体から漂う性善説的な雰囲気は，読んでいて好感を覚える。

テキストの編纂者ダナハーの指摘によれば[34]，この作品の原型は1908年にアビー劇場にマクナマラが送付した２幕劇『８月のある日』（*An August Day*）だろうと目されている。劇評家ホロウェイ（Joseph Holloway, 1861-1944）が同年４月16日にこの原稿を借りて読み，18日に返却している。シングはこの劇の上演には断固反対しており，おそらくかなりの程度，シング諷刺を緩和して書き直したのが，この『沼地にかかる霞（かすみ）』ではないだろうか，とダナハーは推察している。シングの年譜によれば，彼はこの年の４月30日から腹部手術のために１ヵ月余り入院しており，５月５日には手術不能な腫瘍が見つかっている。体調が極めて思わしくなく，余命１年を切った時期のシングには，マクナマラの諷刺は単に苛立たしいものにしか感じられなかっただろう。

③『常若の国（ティル・ナ・ノウグ）のトンプソン』（*Thompson in Tir-na-nOg*, 1912）

1912年12月９日，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス[35]にて初演。

舞台は常若の国（ティル・ナ・ノウグ）にある上王（High King）の私有地。舞台中央に座っている王は，母語であるゲール語が話せなくなり，代わりに「新しい奇妙な言葉」（＝英語）を話さねばならなくなった異常事態に困惑し，一過性の邪悪な呪文をかけられたのだろうか，と自問している。

フィン（Finn [mac Cumhail]）が登場し，頭を垂れて英語で王に挨拶をする。（フィンも罹ったか，と王は傍白。）フィンもまた，ゲール語を失い奇妙な響きの「野蛮な言葉」を話す病気に罹った，と打ち明け，どうもダーナ族の［愛と若さと美貌の神］アンガス（Angus of the Danaan people）の使う黒魔術のような体感がある，と憶測する。

当のアンガスが登場し，彼もまた王やフィン――アードグラス[36]（Ardglass）近辺の支配者――に向かって英語で挨拶を述べたのち，案の定，これは彼自身のかけた呪文のせいであることを認め，この言語は東海の彼方のイングランド人が使用する＜英語＞であると説明する。肉体を赤白青の3色[37]に塗る慣習のあった蛮族だと王は怒り，近親者の人肉を喰う人喰い人種だった，とフィンも付け足す。アンガスは今朝早く，エリン（＝アイルランド）から来た，見慣れない若者に会い，名前はトンプソン（Thompson）だった，と告げる。（この瞬間に雷鳴が轟き，稲妻が光る。）庭で飼っている知識の鳥たちに餌を与えていたとき，奇妙な衣服に奇妙な風貌のこの見知らぬ男を見つけ，近づいてゲール語で「ようこそ」（“Cead mille failte”[38]）と話しかけたところ，男は喜んではいたが，返事は「犬の鳴き声」のような響きで意味不明の英語だった。なんとか会話をしたいと思ったアンガスは，昔取った杵柄の呪文で，この男にゲール語を話すまじないをかけようとしたが，言語能力は確かに付与されたはずだが，本人にゲール語を話す意思がないために，まったくの失敗に終わってしまった。そこでこんどは英語を話すまじないを自分自身にかけて，常若（ティル・ナ・ノウグ）の国の様子や国王に引き合わせ歓迎したい旨を英語で伝えたところ，「精神病院だ！」と叫んでトンプソンは逃げ出した。そこで，アンガスはさらに一計を案じて，みんなが英語を話せば彼も安心できるだろうという配慮から，常若（ティル・ナ・ノウグ）の国の全住民に英語を話すまじないをかけた次第である，と事態の経緯を説明する。国王はアンガスのこの奇妙な措置を智慧のある行いとみなす。

コナン[39]（Conan Macmorna）とクーフリン（Cuchulain）が登場。ゲール語が喋れなくなった人々の苦難をコナンは震えながら報告し，寡黙の武将クーフリンは，剣こそがわが言葉なり，と気丈に振舞う。王は事情を手短に二人に説明し，フィンとアンガスを連れて，トンプソンの捜索に出かける。

常若（ティル・ナ・ノウグ）の国に来たからにはトンプソンは大きな戦功を挙げた勇猛な戦士に違いない，とコナンが持ち上げると，クーフリンはコナンが常若（ティル・ナ・ノウグ）の国にいる資格を問題視し，「後ろにいる奴の方がもっと危ないぞ」と騙して背後を振り向かせた隙にリアガン[40]（Liagan）の首を刎ねるというずるい反則をしたコナンを非難し，一撃（with one great blow）で3人の王子の首を刎ねたというフィンの弟子にあるまじき情けなさだと責める。コナンは，フィンの話は法螺話（a blow）であり，浅瀬（フォード）における戦いではクーフリンの方こそ臆病にもファーディア[41]（Ferdia）から逃げ出した，と言い返す。クーフリンはこの挑発に憤激して，コナンを威嚇する。

コナハトのメイヴ女王（Queen Maev of Connacht）とグラーニア[42]（Grania）が登場。クーフリンはメイヴに浅瀬防衛戦の事実関係の確認を求め，メイヴは「哀しいことに」その通りだとクーフリンの言い分を支持し，「下賤な第3サイクル（説話群）の登場人物」コナンを侮辱する。これを聞いて，コナンと同じサイクルに属するグラーニアは，物語（偉大な行為の記録）の数は少ないけれども，第3サイクルは少なくとも実話ですわ，と反論する。神の血筋をひくことを誇りとするメイヴは，グラーニアの発言に苛立ち，彼女を罵る。

国王とアンガス，フィンが戻って来る。国王は，安らぎと愛と喜びの国に口論は相応しくないとたしなめ，メイヴとグラーニアはそれぞれ謝罪する。トンプソン捜索が無駄足に終わったことを国王がクーフリンに伝えるやいなや，戸外で大歓声と哄笑がして，興奮した様子で当のトンプソンが入ってくる。どうやら，リアの4人の子どもたち（children of Lir）が，奇怪な服装のトンプソンの姿に，悪気はないのだが，「あのおっち

ゃんを見て」と囃したてたらしい。

引き返そうとするトンプソンを王は呼び止めて来訪歓迎の意を告げ，現在地はダウン州もしくはアーマー州と推測するトンプソンに，ここは常若の国で，自分はその国王であると告げる。(ここでもトンプソンは「思ったとおり，精神病院だ」と言う。) トンプソンは，昨日の正午，スカーヴァ[43] (Scarva) の戦いに出かけたのが生まれ故郷の最後の記憶だと語り，やはりこの男は名誉の戦死を遂げた戦士だと納得した一同は，トンプソンにお辞儀をし，国王は常若の国の住民の紹介を始める。

最初に紹介されたメイヴは，自分こそが勇気や名声，権力，優秀さを最も備えた存在，すなわち「最良」の者である，と自負して憚らないので，トンプソンは閉口気味に，こういう所（＝精神病院）では女性（患者）が最悪だな，と傍白する。

次のコナンもトンプソンの握手を傲慢に無視して，「マクモーナの血筋を引く者」(of the MacMornas) と名乗る。でしゃばらずにお辞儀だけをするグラーニャを見て，トンプソンは好印象を抱き，彼女は正常だと判断する。「女神ダーナの民の種族」と切り出すアンガスは「重症患者」と判断され，美と陽気さを愉しみ，美しい衣装を愛し，魔術に長け，俗事を忘れさせる竪琴の調べを奏でることができた民である，と自慢話が続くので，さきほど，ゲール語を話させる催眠術は私にかけられませんでしたがね，とトンプソンは嫌味を言って，アンガスに渋面を作らせる。

「偉大なフィン」の紹介を笑顔で受けた後，「三十六計逃げるに如かず」と立ち去りかけるトンプソンをクーフリンが押し留め，エリン (アイルランド) での自分の武勲の評判を知りたがるが，トンプソンには彼の名前の発音を聞き分けるのも難しいくらい初耳である。しかし，アルスター最高の戦士団である赤枝騎士団員 (of the Red Branch) であるとクーフリンが語ると，異国で同郷アルスター人に出会えた嬉しさでトンプソンは興奮し，彼にうちとけた態度を示す。しかし，出身地スカーヴァが鉄道の「北部本線」(on the Great Northern) 沿線[44]であるとのトンプソンの説明に，「かつて俺は北部本線だった[真意＝かつて俺は偉大な北部人だった]」(Once I was the Great Northern.) とクーフリンは真顔でトンデモ発言をし，やっぱりこいつもおかしいのか，とトンプソンは気落ちする。戦いの狂躁に駆られ一騎当千で雄叫びをあげてアルスターのために戦った昔日をクーフリンが熱狂的に物語り始めると，トンプソンはこの機に乗じて，アルスターを支持する軍隊風の号令をかけて，まんまとこの場から退く。

常若の国の面々はその後ろ姿を見送り，王の周りに集まる。王はトンプソンの不快な挙動から常若の国住民としての資格の適性に疑問を表明し，フィアナ騎士団の試験[45]に合格したはずがない，と断言するコナンをはじめ，クーフリン，メイヴ，グラーニアも異口同音に，彼が戦士とは思えない旨の発言をする。彼の不適格性を証明する方法を問う王に，アンガスは，グラーニアの甘い言葉で自白を引き出しては，と提案し，グラーニアも二つ返事で引き受ける。もし，トンプソンが適格者と判断できるなら犬の鳴き声を3回，不適格者との判断なら猫の鳴き声を3回あげて合図を送ることに取り決めて，彼女以外の者は退場。

「ボイン川」を口笛で吹きながら，トンプソンが戻って来る。彼はバーで蜂蜜酒 (mead) を1杯飲んできたのだが，なにもかも無料の常若の国ではホステス嬢が代金を受け取らないため，お代わりをつい遠慮してし

まった，と打ち明ける。グラーニアは秋波を送りつつ，夕べ，サファイアのような瞳を輝かせ，焔のように佇む英雄の姿を夢で見たの，と言って近づき，頭を彼の胸に凭せかけて，「それは他でもないあなた，最愛のトンプソン，心願（my heart's desire）のアンディよ」と甘く迫っていく。

二人は切り株に腰を降ろし，グラーニアはトンプソンの戦死の様子を尋ねる。（銃器の火薬で）「吹き飛ばされた」（blew up）という言葉を，彼女は（突然の暴風などで）「吹き飛ばされた」と誤解し，発砲して人を殺す「銃」（gun）の存在すら知らないために，この娘もおかしいのか，とトンプソンは脇台詞をもらす。こののち，グラーニアの問いかけに答える形で，トンプソンは常若の国に来る前のいきさつについて以下のように吐露する――スカーヴァで毎年７月13日に催される戦いには各地から見物客が押し寄せ，デリーやベルファーストからは特別臨時列車も編成され，新聞紙上でも好意的に「野外劇」（pageant）と紹介されるようになった。昨年からウィリアム王の将軍役の一人に昇格し，戦場に行こうと近道をして牧草地の傍の水路沿いに上っていたとき，手にしていた銃が暴発した。一日中そこで倒れていて，夜になって迷子のままさまよっているうちに眠り込み，朝起きてみたが，いまだにどこにいるのか分からない…。

勝敗の帰趨を問うグラーニアに，もちろんウィリアム陣営だ，と答えたトンプソンは，なぜなら本当の戦いではなく，模擬戦（sham fight）・まねごと（make believe）であるから，と補足する。さらに日曜日にポータダウンで＜ハイバーニアンズ＞（The Hibernians）と喧嘩した，との発言から二人の会話はますます混線する。この単語はグラーニアにとっては「ヒベルニアの民」すなわち「古代アイルランド人」全般を表わすが，トンプソンはここでは，プロテスタントの彼とは敵対関係にある「カトリック系アイリッシュ」，あるいはエディンバラに本拠を持つサッカー・チーム「ヒバーニアン」（1875年創立）の選手やサポーターの意味で理解しているからである。

トンプソンは宗派が異なるからグラーニアとは結婚できない[46]，と告げ，＜ハイバーニアンズ＞を敵に回して戦った，と繰り返すので，確信を深めたグラーニアは猫の泣き声を３回あげる。

見守っていた一同が登場し，上王はクーフリンとコナンにトンプソンの身柄を確保させ，フィンに告訴状――常若の国不法侵入罪――を読み上げさせ，古代ブレホン法[47]（Brehon Laws）に則った裁判を開始する。

最初の証人として立ったメイヴ王女は，トンプソンは英語を話しているからアイルランド人ではない，と証言する。（メイヴも英語を話しているとのトンプソンの反論には，一時的な魔法のせいだ，と彼女は弁明する。）続いてコナンとクーフリンは，アイルランド語が話せるか，祖国を誇りに思っているか，トンプソンに問いただすが，自分には誰一人弁護人がいない，と彼は裁判の不公平に怒りを表明する。

クーフリンは，アイルランド人であるなら当然持つべき歴史的知識について被告人尋問を執拗に浴びせる。その過程で，＜オランダのウィリアム王が1690年７月12日にボイン川を白馬に乗って渡り，イングランド王ジェイムズを打破した＞という基本的事実は説明できても，なぜアイルランド人がイングランド王に即位したオランダ人のウィリアム王を歓迎したのか，というクーフリンの素朴な疑問には明確な返事ができない。自治を要求する＜ハイバーニアンズ＞への対抗措置である，との反論は，ふたたびこの用語の多義性による誤解から，トンプソンがハイバーニアン（つまりアイルランド人）ではない，と受け止められてしまう。

他の者たちもトンプソンに，「ボヴ・ザ・レッド[48]」(Bov the Red)，「フィアナ騎士団」(the Fiana)，「浅瀬(フォード)におけるクーフリンとファーディアの戦い」，「ダグザ[49]の物語」(the story of Dagda)，「ニーシ[50]とデアドラの恋物語」(the romance of Naisi and Deirdre) について矢継ぎ早に尋問し，トンプソンがアイルランド神話に関して全く無知であり，ウィリアム王の他には処刑されたチャールズ王 (Charles Ⅰ, 1600-49) や改宗したヘンリー8世 (Henry VIII, 1491-1547) などもっぱら英国史の知識しか持ち合わせていないことを露呈させる。

再びクーフリンが尋問に立ち，今度はトンプソン自身の武勲について問いただす。しかし，彼の職業は漂白業[51] (bleacher) であり，戦ったことのある相手は警官隊[52] (peelers) で，警官隊というのは治安活動に任務にあたる屈強な連中だと答えたため，上王は警官隊をフィアナ騎士団に匹敵する存在と類推し，騎士団相手に戦うとは言語道断であり，裁判打ち切りを宣言する。判決は死刑であるが，常若の国(ティル・ナ・ノウグ)と死は相容れないため，焚刑(ふんけい)を言い渡す。(まるで火炙りは死刑でないかのように。)

トンプソンは無実の弁明に努め，妻に先立たれて子沢山なうえ，生命保険にも未加入であること，今後は自分も子どもたちにも家で飼っているオウム (「ドリーの丘[53]」['Dolly's Brae'] しか歌えない) にもゲール語を勉強させる，と助命を必死になって嘆願するが，聞き入れられず，連れ出される。「降参しないぞ」の叫び声がして，舞台袖で炎が上がる。

トンプソンは灰も残さず常若の国(ティル・ナ・ノウグ)を後にした，とフィンは上王に報告する。雷鳴が轟く。上王はアンガスに早く英語の呪文を解き，ゲール語を取り戻すように命じる。酒盃を手に王が唱える「乾杯」の音頭は，ようやくゲール語の<健康 (を祝して) (スローンチェ)> (SLANTE!) に戻る。幕。

○常若の国(ティル・ナ・ノウグ)と神話世界の住人たち

常若の国(ティル・ナ・ノウグ)は，「ダーナ神族によって建てられた地下の王国[54]」であり，ギリシャ神話の「エーリュシオン」(Elysium(イリジアム))，わが国の浦島伝説における海底の竜宮城のような想像上の土地で，フィンの息子オシーンがここで300年[55]にわたって美女ニアヴと楽しく過ごしたあと，故郷に帰ると，(玉手箱を開けてはならない，ではなく)地面の土に触れてはならないという忠告を破ったため，みるまに老人になってしまう。言い換えれば，常若の国(ティル・ナ・ノウグ)はケルト人の描いた異界[56]，架空・虚構の死後世界であり，そうした神話世界に相応しく，古代ケルトの英雄たち7人が住民として登場する。しかし，マクナマラはこの幻想境にまったくの異分子である現代人トンプソンを送り込む。彼は初演当時の20世紀初期を生き，事故で爆死しただけのふつうの人間である。こうして，英雄時代の大昔と20世紀が合体し，空想上の人物・神と現実の人間 (の亡霊？) とが遭遇することになり，異次元の時間と異次元のリアリティが混合し，荒唐無稽ともいえる物語が展開していく。

しかも，この常若の国(ティル・ナ・ノウグ)の住人たちのなかにもサイクル (説話群) の混線という捩じ

れ現象が起きている。メイヴ王女が初登場する際に，第3サイクルのコナンを侮辱し，同じ第3サイクルのグラーニアが反撃する場面がある。

初期アイルランドの説話群の分類によれば[57]，ダーナ神族などを扱う＜神話・伝説群＞（＝第1サイクル），「キリスト生誕前後の時代に起きた出来事を伝えたものとされる[58]」＜アルスター説話群＞（＝第2サイクル），「3世紀初頭，コルマク・マク・アルト王の時代が背景[59]」の＜フィーニアン説話群＞（＝第3サイクル）のほか，＜王の説話群＞，＜冒険譚＞，＜航海譚＞，＜夢・幻の物語＞があるとされる。

メイヴ王女とクーフリンは第2の＜アルスター説話群＞に属し，フィンやグラーニア，コナンは第3の＜フィーニアン説話群＞に属する登場人物である。したがって，本来，共存するはずのない人物たちが，説話群の壁を越境して一同に集うというオール・スター・キャストが配されていることになる。自分たちの属する第3サイクルは少なくとも実話である，とグラーニアが反論するのは，＜アルスター説話群＞が「長い間…キリスト教伝来以前のアイルランド文化を忠実に写したものと信じられていた」が，「近年になって…現実と神話の要素がないまぜになったものであることが明らかにされた[60]」ことと照合する。

○アイルランド語と民族のアイデンティティ

この戯曲のプロットで鍵となる設定のひとつは，神話世界の英雄たちが本来母語として話していたはずのゲール語を失い，英語しか話せなくなる呪いをかけられる点である。もちろん，初演の20世紀初頭において，アイルランド人（とりわけ北部の人々）が英語を話すのは自明な現象であった。19世紀半ばの大飢饉による大幅な人口流出，英語のみによる公教育制度の導入によって，アイルランド語人口は減少の一途をたどり，アイルランドの英語化はほぼ実質的に完了していたのが初演のころの実情である。したがって，現在2006年のアイルランド人の大多数がそうであるように，当時のアイルランド人はおそらくほとんどが，神話世界の物語をゲール語の原典ではなく，英訳で読んでいたはずである。すなわち，フィンやアンガスが英語を喋るのは，現代アイルランドの一般読者の立場から言えば，ごく当たり前の話であって，なんの違和感もない。＜英語を話す古代の英雄たち＞という設定は，その意味では実態に即した設定なのである。だからこそ，英語しか話せないことで古代の英雄たちがみせる当惑や苛立ちは，現代の観客・読者にとって滑稽味を増すのである。

もちろん，ゲール語（のみ）を話していた古代の英雄たちにしてみれば，ゲール語を話すことがゲール人の証であり，言語と民族のアイデンティティは密接不可分な関係にある。トンプソンは英語を話すからアイルランド人ではない，とメイヴ王女が断言し，同様にクーフリンがアイルランド語能力の有無をトンプソンに問いただすのも，

民族は同一言語共同体という暗黙の前提があるからである。

これに対してアメリカの政治学者コナー（Walker Connor）は，言語（および人種，宗教など）は単に「ネーション」を象徴するものとして，ナショナリストたちが政治利用しているにすぎないとして，以下のように指摘しているという――＜たとえばアイルランドでは19世紀以後言語的に「イギリス化」し，ゲール語は事実上使われなくなっていったにもかかわらず，そのナショナルな意識はむしろ高まっていった。そこではゲール語は，「アイリッシュ・ネーション」を象徴するものとして用いられたのであり，実際にアイルランド人集団の内部でコミュニケーション手段として用いられたわけではない。そこで言語をネーションの象徴に押しあげているものは，メンバーの心理や意識にほかならない。[61]＞

アイルランド西部などの「ゲールタハト」（ゲール語使用地域）住民の存在を考慮から外した，いささか荒っぽい総括ではあるけれども，日常的には使用[62]しない言語をアイルランド人性の拠り所に求めた人々や時代があったという指摘は間違ってはいない。メイヴ王女やクーフリンの台詞にうかがえる素朴な＜言語＝民族＞観念がもはや通用しなくなっていた20世紀初頭においては，民族的アイデンティティの象徴としてアイルランド語を過大に理想化していた側面があり，だからこそ，アイルランド人なのにどうしてアイルランド語が話せないのか，という愚直なまでに率直な疑念は，ナショナリストならずとも，初演当時の観客には頂門の一針として響いたに違いない。

さらに言えば，英語しか話せない呪いをかけた張本人が，英雄のひとりアンガスである点も見逃せない。彼はトンプソンと意思疎通を図るために自分に英語の呪（まじな）いをかけ，逃走したトンプソンが困らないようにとの寛大な配慮から，常若の国（ティル・ナ・ノウグ）のすべての者に英語の呪いをかけたのだと釈明する。つまり，いわば身内の不手際が招いた大失態であり，たった一人の異人への便宜供与のために大多数に不利益をもたらす軽率な行為だったと言える。

さて，＜呪いによってゲール語を奪われ，英語を課される＞というマクナマラの戯曲の設定は，＜呪いによって英語を奪われ，アイルランド語を課される＞という設定を持つ，ダクラス・ハイド（Douglas Hyde, 1860-1949）の戯曲『泡の破裂』（*Pleusgadh na Bulgóide, or The Bursting of the Bubble*, 1903）の対極にあることは注目に値する。すでに別の拙論[63]で指摘したように，ハイドは母語略奪の意趣返しとしてトリニティ大学の曲学阿世の教授たちにアイルランド語の呪いをかけた訳だが，古代ケルトの上王や武将たちに英語の呪いをかけさせたマクナマラは，彼が意図していたか否かはさておき，結果的には神話の偉人たちの権威失墜を引き起こしてしまっている。

さらに興味深いことは，この戯曲はゲール語推進団体「ゲイリック・リーグ」の要

請で3幕劇として書き上げられたものの，当然「ゲールの英雄たちを虚仮にしている」として拒絶され，1幕物として書き直されたという経緯がある[64]。ベルファーストにあった「ゲイリック・リーグ」支部の名称が「常若の国（ティル・ナ・ノウグ）」だったのも皮肉な巡り合わせである。

○初演時の時代背景

初演は1912年12月9日。アイルランド自治に反対するユニオニストたちの不満が高まりを見せていた時期である。わずか3ヶ月前の9月28日（アルスター・デイ）には自治反対の＜厳粛同盟＞（Solemm League and Covenant）に47万1414人分もの署名が集められた。この芝居が「反オレンジ的」すなわち「反ユニオニスト的」であるとの噂を聞きつけた一部の観客のなかには，ポケットをナットやボルトで膨らませ，いざとなれば舞台めがけて凶器と化す金属部品の一斉射撃を辞さない連中も陣取っており，劇団関係者は不安に駆られたらしい。しかし蓋を—幕を—開けてみると，それは杞憂に終わった。観客はこの45分[65]の芝居を大いに楽しみ，客席は笑い声にあふれた。

予想に反して観客が騒ぎ立てなかったのは，すでに1908年にメインの『のらくら者』（*The Drone*）が上演されており，こうした風刺的芝居を受け入れる下地が北アイルランドの観客の間に出来ていたのだとする指摘や，マクナマラがユニオニストとナショナリストの双方に公平な目配りをしたとする説や，戯曲に込められた微妙な意味合いが観客には気づかれないで済んだからだとする説など様々に論じられている。実際，この戯曲はなにを狙いとしているのか，諷刺の鉾先が向けられているのは政治的にどちらの陣営であるのか，一概に断言できない微妙さを含んでいる。いわば＜騙し絵＞のように，見方次第で，二つの異なる絵柄が強調されて浮き上がってくるのである。

○マーク・トウェインの小説との比較

この戯曲に着想を与えた可能性のある作品は，アメリカの作家マーク・トゥウェイン（Mark Twain, 1935-1910）の長編小説『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1889）である。トゥウェイン自身は1度しかアイルランドを訪れた[66]ことはないが，この小説は1889年12月にロンドンで英国版が刊行されているから，当時23歳の青年マクナマラがこの小説を読んだことは十分に考えられる。

『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』では，トゥウェインと思しき語り手（M.T.）がイングランドの城を訪ねた折に，ハンク・モーガン（Hank Morgan）なるアメリカ人と出会い，6世紀（528年）にタイム・トラヴェルした不思議な話を聞かされる。話し疲れたハンクが手渡し，語り手が徹夜で読み耽った回想録の原稿がこの小説の本体を占め，原稿を返しに語り手がハンクの部屋に行くと彼はまもなく亡くな

ったというあとがきで閉じる構造をとっている。

もちろん内容的にはマクナマラの戯曲とは異なっている。マクナマラのトンプソンは最後には火刑に処されてしまうが，ハンクは月食の知識を用いて火炙りの刑を免れている。上王から好感を抱かれることなく終わったトンプソンに対し，ハンクはアーサー王の首相に就任して近代文明を導入し，その後，王とともに様々な道中を体験している。火刑後のトンプソンの顛末は『常若の国のトンプソン』の結末では曖昧であるが，ハンクの場合は，魔法使いマーリン（Merlin）の呪文で眠り続けてもとの19世紀に戻って来る設定になっている。

それでも，「奇蹟や魔法を信じる無知蒙昧な人間どもの中へ，十九世紀の進歩した科学文明の粋を身につけたアメリカ人を登場させ[67]」て，「六世紀と“進歩”の十九世紀の平均的人間（群）像の衝突」を作り出し，「時間空間における場ちがいがもたらす滑稽さ[68]」を現出させている点は，非常に『常若の国のトンプソン』に着想が類似することは指摘できるであろう。マクナマラの自伝や書簡集があれば確認できるのだが，影響関係の立証はいまのところ困難である。

○文藝復興詩劇への風刺

ケルト神話の英雄たちを数多く登場させるこの作品は，アイルランド文藝運動における古代復帰の傾向を諷刺するものでもある。1900年９月19日にアリス・ミリガン（Alice Milligan, 1866-1953）の『フィアナ族の最後の偉業』（*The Last Feast of the Fianna*），翌20日にはマーティンの『メイヴ』（*Maeve*），1901年10月21日にはイェイツとムーアの合作『ディアムードとグラーニア』（*Diarmuid and Grania*），1902年４月２日にはA.E.の『デアドラ』，1904年12月27日にはイェイツの『バーリャの浜辺で』（*On Baile's Strand*），1906年11月24日にもイェイツの『デアドラ』，1908年３月19日（1910年２月10日再演）にはイェイツの『緑の兜』（*The Green Helmet*），1910年１月13日にはシングの『悲しみのデアドラ』（*Deidre of the Sorrows*），1911年２月16日にはイェイツの『心願の国』（*The Land of Heart's Desire*）といった具合に神話劇が目白押しで，20世紀初めの10年余りは古代回帰，神話復興がひとつの特徴であったといえ，とくにイェイツ作品『バーリャの浜辺で』においてはクーフリンとその息子，『デアドラ』ではニーシ，デアドラ夫妻，『緑の兜』ではクーフリンが登場し，荘重な詩劇の形で神話の英雄像は確立されていたはずである。『常若の国のトンプソン』において，マクナマラがとりわけクーフリンそのものを戯画化して描いているとは言えないにしても，自らの武勲を自慢して陶酔する場面は，やや英雄らしからぬ彼の不遜さを観客に印象づける狙いがあっただろう。むしろ，クーフリンは全体的には質実剛健な言動をとっているにも関わらず，現代人トンプソンとの絡みが文脈の意味を一変させる――

「かつて俺は偉大な北部人だった」というクーフリンの台詞を「かつて俺は＜北部本線＞だった」（若い頃あるいは前世は，人間でなく鉄道の車両だった）と響かせるのが好例である――ことで，クーフリンを妄言（ぼう）を吐き散らす精神錯乱者にも見えるように貶めるというマクナマラの諧謔技法の犠牲者になっている，と言ったほうが適確かもしれない。（このあたりは，ワープロの誤変換によってとんでもない同音異義語が表示されるのに似ている。）少なくとも，イェイツが描いたような悲劇的中心人物から，茶番劇の登場人物の一人にクーフリンを格落ちさせたことは確かであろう。

後述するように，この作品には実は続編『陸地（テラ・ファーマ）のトンプソン』（*Thompson on Terra Firma*, 1934）というマクナマラの遺作がある。メインの記述[69]によれば，常若（ティル・ナ・ノウグ）の国から無事に帰還したトンプソンは，待ち受ける家族や妻（本篇では，先立たれたと発言しているのだが）が驚いたことには，熱烈なゲール語学習者・研究者かつ極端なナショナリストに変貌してしまっているが，偶然に「頭部に一撃」を受けて正気を取り戻し，以後は家族みな幸せに暮しました，という大団円の結末を迎えるらしい。残念ながら原稿は散逸しており，プロットのこれ以上の詳細は分からない。同様に，次の④～⑥の作品のテキストも現時点では入手できない。

④『**先祖返り**』（*The Throwbacks*）　3幕の空想劇

初演は1917年，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス。

⑤『**誠意**』（*Sincerity*）　不詳

初演は1918年，ダブリンのゲイアティ劇場。

⑥『**フィー，フォー，ファム**』（*Fee, Faw, Fum*）　不詳

初演は1923年，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス。

⑦『**降伏拒否**』（*No Surrender*）　序幕付き3幕

初演は1929年1月23日，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス。標題は，①『スザンと君主たち』の第2幕に描かれた「デリーの攻囲戦」のさなか，市民たちとともに篭城する（ロンドン）デリー総督ジョージ・ウォーカー[70]（George Walker, 1618-90）が城内から叫んだと言われる「降参するものか！」という強い意思表示のスローガンで，こんにちでもユニオニストたちが士気を鼓舞する常套句[71]である。

舞台は全幕を通して，ベルファーストにある「オレンジ会並びにヒベルニア会古代遺物博物館」（Orange and Hibernian Museum of Antiquities）の玄関ホール。時代は1990年7月。

序幕　7月10日の夕方。この博物館の館長で，北アイルランド主席霊媒師[72]でもあるマクラム教授(Professor McCrum）がウィリアム３世の霊との会話を試みている。教授は「新改革派心霊主義オレンジ会」(New Reformed Spiritualistic Orange Order)の創設者であり，カーソン卿(Lord Carson, [Edward], 1854-1935))やデリー総督ランディ（Governor Lundy of Derry）との交信には成功したらしいが，ウィリアム３世との交信の念願は10年来果たせずにいる。ところがこの日ようやく亡き国王とつながり，教授が感動していると，館長補佐で館長に恋心を抱いているミス・トンプソン（Miss Thompson）が現れて，会話の邪魔になる。

教授はウィリアム３世の霊に対して，明日11日の晩の交霊会に現身(うつしみ)となって（in the *flesh*）現れるのみならず，翌12日の集会――昔とすっかり様変わりして，太鼓や行進はなく，オラトリオで祝う――においてもメッセージを寄せてくれる約束を交わすが，国王はオレンジ会もヒベルニア会も好きではなく，ただの一人でもこの古い組織の会員が残っていればアルスターには行かない，とのこと。この最後の生き残りは実はミス・トンプソンの祖父であり，これを聞いて彼女は悲しむが，７月12日にウィリアム３世直々のお出ましをとりつけた教授は，人生でもっとも誇らしい日だと感激する。幕。

第１幕　７月11日の午後。アメリカ人観光客らしいミス・スミス（Miss Jane Smith）が偶然にこの博物館に足を運び，ミス・トンプソンに矢継ぎ早に質問をする。この博物館の敷地にはもともとオレンジ会館が立っていたが，繁栄したオレンジ会はギャラハー煙草工場跡地――工場は禁煙主義者によって壊滅した――に新会館を建設して移転したこと，1965年の国会制定法により噛み煙草と喫煙はアルスターで廃止され，信仰宗教調査によると，いまやアルスターの90％の人々が心霊主義者であり，かつてのようなプロテスタントとカトリックの軋轢はすっかり解消されていること，この博物館の趣旨は，現世代に過去の荒唐無稽さを明示し，アルスターにユーモアのセンスを涵養することにある，とミス・トンプソンは解説する。彼女は館長執筆の案内パンフレットを２ペンスで勧め，壁にかかる旗幟(まし)に描かれた白馬に跨る人物は＜栄光に溢れ敬虔で不朽の記憶の信仰擁護者＞であるウィリアム３世――ミス・スミスが誤解するような征服王ウィリアム（William the Conqueror, ca.1027-87）ではなく――であると教える。

教授がミス・トンプソンを呼ぶ声が繰り返され，現れた教授は彼女が来館者に応対中であるのを見て，終り次第館長室に来るように言って，退場。教授は「アルスターにおける智慧の星気霊能者の総代」(Chief Buddhi-Astralagist of Ulster）であり，ウィリアム３世と交信（３世はただ「コツコツ」と音を立てるだけだが）できるのみならず，明日正午には現身(うつしみ)の姿で呼び寄せることができるのだ，と教授を絶賛して，退場。

残ったミス・スミスは自分の祖父の肖像画がありはしないかと思って，画廊の方に向かい，声をかけた「フォレスター会員」の服装の人物が展示物の蠟人形だと悟って恥ずかしがる。[ここでミス・スミスはいったん画廊に入るものと思われる。]

ミス・トンプソンの祖父ウィリアム・トンプソン老人（Old William Thompson）――明日なんと113歳の誕生日を迎える――が「ボイン川」をいきなり歌い始めるので，ミス・トンプソンが慌てて戻ってきて，祖父をたしなめ，16時までに交霊会案内状の発送を命じる教授のもとへ，再び退場。[画廊から戻ったらしい] ミス・スミスがトンプソン老人に気づき，「展示番号１：最後のオレンジ会員」の掲示を読むや，これも蠟人形

かと思ったこの老人が「降伏拒否！」と突然叫ぶので，ミス・スミスは仰天して椅子に倒れこみ，助けを呼ぶ。

教授がかけつけ，ミス・トンプソンも水を持って登場。老人は彼女の祖父で生身の人間であり，一方の蠟人形は先週他界した「最後のヒベルニア会員」を模したもので，その葬儀に参列した教授は，彼の棺台（bier）——ミス・スミスは同音の「ビール」（beer）と勘違いする——に，「悪意がないことを示すために」オレンジ会の旗をかぶせたのだと言う。教授とミス・スミスは簡単に挨拶を交わし，教授は歴代のオレンジ会「首領」たちの展示案内を申し出て，二人は退場。

トンプソン老人が再び「ボイン川」を歌い出す。北アイルランド首相のトーマス・ブラビングトン卿（Sir Thomas Blabington）が登場し，党派的な歌を歌うと鉱山送りの刑になるぞ，とたしなめるが，同行の西ベルファースト選出国会議員で野党党首ダン・オローク卿（Sir Dan[iel] O'Rorke）は，現代ではもうこの歌も煽情的でない，と擁護する。教授が接待中とミス・トンプソンから聞いて，しばらく雑談して待っているうちに，教授とミス・スミスが戻る。教授はミス・スミスに首相と野党党首を引き合わせる。

北アイルランド6州は「ちっぽけ」（Dinkey）だけども，文藝に卓越した古代ギリシャも小国だった，とミス・スミスが当地の第一印象を述べると，聖書の十戒を厳守する点では古代ギリシャ人も我々には及ばないし，西はデリーから東はニューリーまで，国境地帯に沿って「超大運河」（Super-Grand Canal）が来月には完成予定であり，これで南のアイルランド自由国と完全に切り離され，もはや陸続きでなくなったアルスター地方は「聖人の島」と呼ぶのが適切である，とトーマス首相は説明して，教授と連れ立って退場。

ミス・スミスは残ったダン党首を相手にアルスターの政治状況について尋ねる。（大飢饉時代のような）食糧不足の問題は解消済みで，いまや国民の食糧として肉食を政府が認めるか否かで，「菜食主義者」党と「牛肉主義者」党とに政党が二分され，現在はトーマス率いる「菜食主義者」政党が政権を握っている，とダン党首は答える。ベルファーストに到着後，警官の姿を1人しか見ない理由を訊かれたダン党首は，各州2名の合計12名しか当地には警察官がいないこと，本来各州1名でもよいのだろうが話し相手が必要だから2名にしてある，と治安の良さを誇る。ミス・スミスの曽祖父はアルスターの巡査時代に功績を挙げ，米国へ移住したとのこと。[ここで二人はいったん退場するらしい。]

舞台袖でトンプソン老人が「一歩も引かぬぞ」と呟く声がする。場面はトーマス首相と教授の二人に移る。ウィリアム3世を招霊できれば政権与党の追い風になると期待するトーマス首相は，その前提条件である「最後のオレンジ会員」トンプソン老人の死亡の可能性を探るべく，老人に健康状態の質問——心臓病，脂肪変性，坐骨神経痛，腰痛，神経衰弱，喘息，皮膚病，呼吸疾患などの有無——を浴びせるが，老人はまったく元気そのもので，まるで長寿の「賢者の石」を持っているかのようである。

ダン党首とミス・スミスが登場。教授は交霊会に彼女を誘うが，ミス・スミスは勝手がわからぬ不安もあってためらう。霊的存在は「マナ」と呼ばれる，人間の「自我」すなわち不死の存在物である，といった教授の講釈や説得にほだされて，ミス・スミスは参加を承諾する。教授は霊媒師の名声をかけて，今晩，ウィリアム3世をこの部屋に呼び寄せるつもりであるが，それには一つ障害があり，トンプソン老人が死んでいなくなる

か，彼が教授の創設した新しいオレンジ会に入会し，古いオレンジ会を脱退しなければ，ウィリアム３世は現れないのだ，と打ち明ける。するとミス・スミスは「慈悲深いピストル」で老人を撃ち殺すわ，と叫ぶので，一同は愕然とする。気まずい雰囲気から，ミス・スミスは暇乞いをはじめ，交霊会開始時刻の20時きっかりに——現在は17時すぎ——再訪することを約束して，ダン党首の勧める専用航空機による北アイルランド上空周遊の誘いに応じて，退場。教授と首相は去っていくミス・スミスを互いに褒め，首相は「彼女ならきっとやってくれるだろう」と口走る。

唯一の係累である祖父トンプソン老人に（夏風邪をひかぬよう）布をかぶせてあげているミス・トンプソンに，教授は交霊会の段取りについて説明する。招待客は「名誉首領」ほか選りすぐりの９名で，うち２名は非会員のダン党首（若い頃は「ヒベルニア会員」）とミス・スミス，招待客には合言葉として「サルサパリラ[73]」（“Sarsaparilla”）を伝えてある，と告げる。教授はさらにミス・スミスに存命の親戚の有無について尋ね，祖父のほかに，もしかすると30年前に18歳でオーストラリアへ移住した兄が生きているかも知れない，謎めいたメモ「バンブーザ島（Bambooza Island）に漂着——アンドゥルー・トンプソン（Andrew Thompson），ベルファースト」を詰めたレモネード瓶が浜辺に打ち上げられたから，と語る。

教授は「風の便り」という記事をミス・スミスに示す。それにはバンブーザ島の百万長者にして「古代オレンジ会」首領のアンドゥルー・トンプソン氏が北アイルランドを訪問して「古代オレンジ会」同志たちとの面識を新たにする意向，と記されていた。教授は交霊会に必要な品物——木槌，証書，縄梯子など——の手配をミス・トンプソンが既に手際よく済ませていることを確認する。ドアに４度連打があり，最初の招待客の到着を知って，教授は退場。

［**第２幕**　テキストには第２幕の指示が欠落しているが，７月11日夕方と設定されている第２幕には，おおよそこのあたりから入るものと推測される。］

以下，ノックする者にミス・スミスが合言葉を確認のうえ，招き入れる。最初に到着したのは「名誉首領」であるトーマス首相，続いてファッション担当大臣（Minister for Fashions）のディヴィス公爵夫人（The Duchess; Lady Divis）と保健娯楽担当大臣（Minister for Hygenic Amusements）のレイディ・ハリー（Lady Harry Hogan）のペアが到着し，昨夜はナイト・クラブを梯子して男女３対３で豪遊し，午前１時からはトランプのババ抜きで賭け遊びに興じた，などとレイディ・ハリーはおしゃべりする。さらにスィーフォード侯爵夫妻（Marquis and Marchioness of Seaford ），ミルタウン子爵（Viscount Milltown），最後にダン党首——彼は合言葉を間違えてウィリアム３世に敵対した名将「サースフィールド」（“Sarsfield”, [Patrick], ca. 1655-1693）をうっかり名乗り，訂正する——とミス・スミスが到着する。

ベルが鳴り，「名誉首領」トーマス卿が登場し，木槌で３度叩いて開会を宣言する。非会員のダン党首は「臨時会員」扱いで参加を承認するものとし，動物虐待防止協会の圧力で野蛮な生贄の山羊の儀式は1975年に廃止されたこと，今年1990年７月12日はボインの戦勝300周年記念日であるのみならず，奇妙な巡り合わせで，ローマ法王ピウス18世の99歳の誕生日でもあり，過去は水に流して法王に祝意をオレンジ会として表明したいと提案する。カトリック系のダン党首もこの提案を受け入れ，議事はいったん閉会となる。

ベルが鳴ってマクラム教授が登場。トーマス卿と司会を交代する。教授はスーパーのウルワースで販売されている安物のプランシェット板ではとうてい不可能な交霊をおこない，これまでにジョージ3世(George III, 1738-1820)，ナポレオン（Napoleon I, 1769-1821)，ミカドと交霊し，あらたにウィリアム3世との交信にも成功したことを披露する。しかしながら，プランシェット板の調子が悪いので，部品のバネと小輪のスペアをミス・トンプソンに持ってこさせて修理する。招霊には参加者の側でもウィリアム3世の姿――ただし，乗馬像から白馬を取り除く――を意識を集中して思い浮かべる努力が必要であると訴えたのち，照明を消させ，「霊(スピリッツ)はいますか？」と呼びかける。しかし，ダン党首が「酒(スピリッツ)の匂いがする」とからかうので，教授は照明を点けて，つまらない冗談だと叱る。再度照明が消され，コツコツという音に加えて蹄の音も聞こえるので，白馬を思い浮かべた邪念の参加者のせいだ，と不満をもらす。やがて緑の光が見え，コツコツ音にサイレン音もまじり，ウィリアム3世がフランス語で罵詈雑言を飛ばしている，として教授は怯えて照明をまたつける。実は教授が怯えたのは，その霊がウィリアム3世ではなく，敵将ジェイムズ2世だったからだ，と明かし，他の参加者にせがまれて，再度照明を消す。

長く早いコツコツ音が響き，教授はバリーミナ訛りの女性の霊で，ミス・スミスの曾祖母だと名乗っている，と伝える。次にようやくウィリアム3世との交霊が叶うが，やはり例の条件――トンプソン老人が死ぬか，新オレンジ会に移籍するか――が満たされない限り，この席には現れない，と告げる。そこで教授は，ミス・トンプソンに祖父を呼びにやらせる。せっかちなミス・スミスが拳銃を振り回し，これで決着をつける，と言い出すので，トーマス首相は彼女から拳銃を取り上げる。

再び照明が消されると，緑色の光と馬の蹄音がして，拳銃が暴発する。照明がつき，連れられてきたトンプソン老人に対してミス・スミスは100ポンドの報奨金を提示して，新オレンジ会への宗旨替えを促し，教授も博物館展示品ではなく雑用係としての正規採用を，公爵夫人は博物館終身理事職の斡旋を，トーマス首相は市庁舎前の大理石像の建立を申し出るが，トンプソン老人は断固「降伏拒否！」の姿勢を崩さない。

ウィリアム3世招霊計画はもはや実現不可能と教授は断念し，他の参加者も諦めたり腹を立てるが，ミス・スミスだけは老人のなかに，信念を決して曲げない不撓不屈の精神を感じて感銘を洩らす。そのとき，なにやら破壊音がする。ダン党首が言うには，トンプソン老人が首の骨を折ったらしい。教授をのぞく一同は駆け出し，やがてまた戻って来る。教授は照明を消させ，「トンプソン老人が無事当地（天国）到着」，「朕，ウィリアム3世は，明日正午ベルファースト到着予定」と王自らが語ったと告げる。万歳の声が起こり，幕。

第3幕　7月12日正午すぎ。1時が近づくというのにウィリアム3世が現れる気配はいっこうになく，朝食が早かった公爵夫人は，首相との会食予定も失念して，食事に行きたい，と不満をもらす。首相はオランダ王ウィリアム3世をもてなすために，現地シーダム（Schiedam）産の強いジンを1本だけ――晩餐後に3本あける兵(つわもの)はいても昼間から3本あける蟒蛇(うわばみ)はいないだろうから――首相特権で税官吏に取り寄せさせたと，レイディ・ハリーに語る。航空機の一群が近づいてくるが，市内を回遊しているオレンジ会本部（G.L.: Grand Lodge）の航空隊で，時刻はすでに1時10分である。

ミス・スミスはウィリアム3世出現の可能性を信じてはおらず，自分はただ「前兆を信じる者」(Prognos-

titarian）であるとレイディ・ハリーに話すと，彼女はそれをなにかの宗教信者と誤解し，かつては，祈りの言葉を唱えなかっただけでフォールズ通りを銃で追い回されるような偏狭な宗教の時代があったけれども，いまでは他人の宗教に誰も干渉しないし，金さえあれば称号が自動的に手に入り，猫も杓子も貴族の肩書きを持っている，と答える。

教授が登場し，昨日死んだトンプソン老人の模造人形（実はずっと以前に製作済み）を運び入れ，レイディ・ハリーに手伝って貰って台に設置する。

再び上空に航空機が１機飛来し，落下傘で降下する人物を公爵夫人やミス・スミスがはっきりと目撃し，トーマス首相はウィリアム３世の到着と確信して一同に整列を呼びかけるが，これもまた人違いで，巡回サーカスの先乗り代理人にすぎなかった。天候が悪化してにわか雨が降りはじめ，集会に詰めかけた大勢の参加者への対応に苦慮する首相に，国王自らの「お言葉」，正確には「コツコツ音」で約束されたのだからウィリアム３世は必ず現れる，と教授は固い信念を表明するものの，首相やレイディ・ハリーはなかば諦めて昼食に出かけようとする。

シンバル音とともに，ようやくウィリアム３世が登場。トンプソン老人の模造人形を見て，死亡情報は偽りだったのかと早合点するが，人形だとすぐに気づく。教授は深く感動してウィリアム３世に挨拶するが，国王は彼が交信相手の教授だとは最初のうちは信じない。やがて納得した国王は，教授がロンドンから特注した雲のようにふかふかした王座にすっかり満足し，教授の紹介で「ベルファーストの名士たち」（第２幕の交霊会出席者と同じ顔触れ）と謁見する。爵位のないミス・スミスには「レイディ」の称号を臨時に付与し，いまでも英国王であるのなら，臣民にオランダ産のジン（“Schnaps”）をふるまい，壮麗な市庁舎――地下道経由で入構できるのを知らない彼は入れなかったが――のあるベルファーストに居を構えたい，と語る。上下院を代表してトーマス首相が国王に挨拶し，霊媒師の教授からは正午に御＜降霊＞（*descend*）と聞かされていたので出迎え態勢に不備があったと詫びる。すると国王は，自分は300年前の上陸地キャリックファーガスの地下岩塩坑を通って「煉獄」（*Purgatorio*）から＜昇霊＞して来た（I come *oop*.）のだと答えるので，一同は驚く。煉獄を信じない者は煉獄にいる彼のために祈らず，信じる者はいい気味だと嘲っていたはずだと国王は拗ねるが，トンプソン老人が死んだいま，自分は煉獄から解放され，望めば天国にも入れるのだ，と気を取り直す。

国王陛下は皇后を同伴されているか，と公爵夫人が尋ねると，死後，后とは会っておらず所在も不明だと国王は答え，煉獄にいなければおそらく天国でしょうから，交霊してお招きしましょう，と教授が提案する。首相が午餐会へと国王をいざなうが，岩塩坑を抜けたせいでやたらに喉が渇くと訴える国王に，首相が準備したシーダム酒を勧めると，国王は喜色満面で，教授を誘って別室へと退場。公爵夫人もお相伴に預かりたがるが，午餐会を辞退された手前，首相は（禁酒主義でもあり）同席できず，また飲酒を「冒瀆」（“lese majeste”）とみなし，酒の匂いに吐き気を催すダン党首も，夫人の飲酒に反対する。

ウィリアム３世の月旦評が始まる。国王然としない，気楽な態度にレイディ・ハリーは好感を表明するが，ダン党首，さらにトーマス首相は，教授ばかりに肩入れして，国家の要職にある自分たち政治家への敬意に欠

けるとして，国王を批判的にとらえる。レイディ・ハリーと公爵夫人はコーヒーを飲みにいったん退場するが，国王が教授に酒を勧めて二人で盛んに飲んでいるので，一瓶が空になりそうよ，とレイディ・ハリーが知らせにくる。ダン党首は教授の深酒を止めさせるために駆け出す。

市庁舎でウィリアム３世の到着を待ちかねているだろう市民たちに経過報告をするために，首相が退場しようとすると，ミス・トンプソンが登場。兄アンドゥルーからの電報とおぼしき文面――「大西洋―飛行機で２時30分着―昼食準備せよ―1690年を忘れるな―ブルーズ，頑張れ―降伏拒否―アンドゥルー」を首相に示し，バンブーザ島の「古代オレンジ会」首領の兄は，スカーヴァの戦いで亡くなった同名の曽祖父アンドゥルー・トンプソンに良く似ていて，ウィリアム３世以上に「オレンジ的」で厳格な宗教観・政治観を持つ危険な存在であると警告する。

ミイラ捕りがミイラになって，40年来の禁酒を破ったダン党首が，シーダム酒の注文先を尋ねに戻ってくる。ダンがアル中になったとオレンジ会名誉首領に救援要請しよう，と言って首相は退場。

ウィリアム３世はじめ，酒席の面々が登場。ダン党首はオランダで人生を終えたいと願うほどシーダム酒の虜になっている。ウィリアム３世は，南部のアイルランド自由国が南太平洋のフレンドリー諸島（1970年に独立し，現在はトンガ王国を形成）と交戦状態にあることを知り，戦争は負けてもひどいが，勝てばいっそうひどい事態になるから，北アイルランドは中立政策を維持するのが賢明だと説く。

戸外で楽隊の音と歓声がする。教授に促されて，ウィリアム３世は市民に向かって短いスピーチ――かつて余は「市民的自由と宗教的自由」という言葉を創作したが，皆さん方は他者の宗教上の信念を尊重し，寛容に扱っているだろうか？余は午後４時に市庁舎に赴き，「追憶の庭」を公式に開園する予定である――を行なう。歴史的名演説レコード集を持つ教授は，ダンケアン[74]（Duncairn）とデヴリン（[Joseph] Devlin, 1871-1934）の演説が最高です，と触れると，煉獄で両者に会ったことを思い出したウィリアム３世は，快活で誰にも愛想の良いデヴリンは２週間で煉獄から抜け出したが，ダンケアンはいまでも煉獄にいるだろう，と答える。

教授がレコードを取りに行った間，ウィリアム３世は博物館の展示を見て回る。「ボインの戦い」を描いた旗幟を眺めて，自分は白馬でなく栗毛の馬に乗っていたこと，ウィリアム３世の軍隊はオランダ人，デンマーク人，プロイセン人，新教徒（ユグノー）のフランス人，イングランド人から構成されており，北アイルランドのエニスキリング連隊は確かに友軍ではあったが，軍服が緑色だったグリーン近衛隊をフォレスター会かヒベルニア会と勘違いして自軍に攻め込み，ションベルク公を誤爆して殺してしまうなどの混乱状態を招いており，ボイン戦役は実際には「戦い」ではなく「暴動」だった，と振り返る。

教授がレコードを運び入れる。ウィリアム３世はデヴリンが物真似を得意にしていたエメット（Robert Emmet, 1778-1803）の被告席演説や，エドワード卿（Lord [Edward] Fitzgerald, 1763-98）とハーヴィ・ダフ[75]（Harvey Duff），ウルフ・トウン（[Theobald] Wolfe Tone, 1763-98）にダニー・マン[76]（Danny Mann）といったアイルランド人＜愛国者たち＞の演説を聞きたがるが，もちろん蓄音機発明以前の人物のレコードはない。

正面のドアが壊される音が響き，アンドゥルー・トンプソンが登場。招待状も定期券も名刺も持ち合わせていないアンドゥルーは，この博物館の他界した管理人の孫息子であり，スカーヴァで戦死した人物[77]の曾孫である旨の自己紹介をする。

ウィリアム３世が来訪中のため博物館は本日閉館であると聞いたアンドゥルーは，「ペパーの幽霊[78]」(Pepper's ghost)のような奇術だと思って大笑いするが，やがて姿を現したウィリアム３世を見るや，感嘆して自分の経歴を縷々国王に述べはじめる。18歳のときに父親の祝福とオレンジの懸章とフォックスの『殉教者集』[79]を持って祖国を後にしたことから始まる彼の「人間蓄音機」のような長広舌に痺れを切らす国王や教授はなんどか割って入るが，アンドゥルーはそれを遮って，以下のような経歴と帰国理由を述べる。すなわち，彼は漂着した島の無知で迷信深い半裸族の人々に，たった独りでオレンジ会の信仰を注ぎ込み，いまでは各種の鼓笛隊も結成されるほど徹底したオレンジ会化がなされている，そして様々な信仰や階級が錯綜している北アイルランドの混乱状態を是正して，単一の王冠と国旗と憲法と真の信仰を実現するために，バンブーザ島の全住民を北アイルランドに移住させることも計画している，というのである。

各自の信仰に誠実で，かつ隣人愛を抱いているならば，ユダヤ教であれ，「真の信仰」ではないだろうか，とウィリアム３世は宗教に寛容な姿勢を示すが，アンドゥルーは相手にしない。このままではアンドゥルーに洗脳されて改宗させられかねないと危惧したウィリアム３世は，煉獄に戻ることを決意する。

アンドゥルーは息子たちのなかから末っ子のアルバート(Albert)だけを連れて来ており，ウィリアム３世に引き合わせる。彼は小さな黒人少年で，ミス・スミスに名前を聞かれて「バリーキルベッグ[80]」(Ballykilbeg)と少年は返事する。疲労気味のウィリアム３世は教授に依頼して，煉獄宛てにプランシェット板で帰還の伝言——「ベッドをよく乾かしておくように—今夜帰宅予定」——を送信させる。アンドゥルーがまたぞろ国王に話しかけようとするが，照明が消える。国王は退場。暗転。幕

1929年の時点から1990年の世界を描いた未来演劇，「バック・トゥ・ザ・フューチャー」ものである。そのほとんどは実現されなかった，予測外れの見本市の観を呈している。しかし，さらに10年先との設定であれば，ある程度までは実現の目途がついている事柄もある。たとえば，北アイルランド紛争は1998年に包括和平合意に達し，自治政府再開をめざして協議が進められている。禁煙法に関しては，2004年３月にはアイルランド共和国ではパブや全職場内禁煙が国家レベルで施行されたし，英国も2008年を目途に同様の措置をとる政策を発表している[81]。

しかしながら，実現しなかった夢物語の大法螺の方がはるかに興味深い。国境に運河を掘って，北アイルランドを文字通り物理的に南から分断する大構想や，宗派抗争がなくなったために二大政党は「菜食党」と「肉食党」という食事嗜好だけを対立イデオロギーとする時代を迎えていること，オレンジ会の信条を洗脳された南国の島民たちの大規模集団移民計画などは，マクナマラの旺盛な想像力無くしては発想できな

い物語だろう。プロテスタント，カトリック，どちらの宗派色の組織にも嫌悪を示すウィリアム３世の態度には，宗派対立の解消を願うマクナマラの真骨頂が発揮されている。

⑧『誰が語るのを恐れるだろうか？』（*Who Fears to Speak?*）　１幕

初演は1929年１月24日，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス。標題は1900年[82]に出版されたイングラム[83]（John Kells Ingram, 1823-1907）の詩「死者の追憶」（“The Memory of the Dead”）の冒頭行「誰が（17）98年について語るのを恐れるだろうか？」（“Who Fears to Speak of Ninety-Eight?”）に由来する。

1797年盛夏，ベルファーストの酒場の二階。革命家たち「ユナイテッド・アイリッシュメン」の溜り場であるが，当局の嫌疑をおそれて「酔いどれ倶楽部」（“Muddlers’ Club’）と称している。

パリで修業した30歳の画家[84]ニューウェル（John　Newell）が，テーブルの上に立たせた美人女給ベラ（Bella）をモデルにしてデッサンをしている。彼女は「自由の女神」役だが，色褪せた緑のテーブルクロスを巻きつけ，頭には赤のハンカチ，松明代わりに毛はたき（feather duster）を高く掲げている。

太鼓の音が聞こえ，ベラの言葉では＜ヨーズ＞（Yeos），つまり王立アントリム州義勇騎兵団[85]（Royal Antrim Yeomanry）の行軍らしい。続いて，禁止されているフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の演奏も遠くから聞こえてくる。ある盲目のカトリックの老人が「ラ・マルセイエーズ」を笛で吹いただけで，ヨーズは鞭打ちの罰を老人に与えたが，＜礼拝堂通いの若者＞（Meeting-house boys），すなわちクェイカー教徒たちから兵舎攻撃の報復を受けたことがある，とベラは説明する。＜トマス・ペイン（Tom Paine, 1737-1809）の弟子＞を自任する無神論者ニューウェルには，なぜクェイカー教徒たちがカトリックの肩を持って報復するのか分からないと疑問を投げるが，とにかく＜教会堂の若者＞（Chapel boys），すなわち英国国教会信者（アングリカンズ）と，＜キング・サーモン＞（Blackmouths），すなわち長老派信者（プレスビテリアンズ）たち――ともにプロテスタント――の愚かさが原因なのよ，とベラは結論づける。

「ラ・マルセイエーズ」の楽隊が接近し，ベラは窓辺に駆け寄り，ニューウェルにも見物を勧めるが，本国バスティーユ陥落の現場でもそれほど大騒ぎはしなかった，と彼は無視する。しかし，銃声が２，３発轟くや，ニューウェルは暴発の流れ弾を恐れてベラを窓辺から下がらせようとするが，ベラは応じず，揉み合いになる。

50歳すぎの農夫サム（Sam Dodd），続いて40歳の編集者ジョウ（Joe Neill）が登場。揉み合いの二人を誤解して，ジョウは「色事師」（my gay Lothario[86]）と呼びかけるが，ベラはみずから率先して釈明し，自分は新しく店に雇われた女給だと答える。すでに相当きこしめしているジョウはラム酒を注文してサムに咎められるが，それでもこっそりベラにワインを注文する。

テーブルの中央についたサムは，緑と白の花形記章（コケイド）（cockade）を取り出して襟につけ，ジョウとニューウ

ェルもそれに倣う。サムはジョウに「ユナイテッド・アイリッシュメン」宣言文を朗誦させ，全員起立して右手を挙げ，着席する。サムが封筒を取り出し，いきなり秘密事項の議事に入ろうとするので，新入会員（「市民番号13」）のニューウェルは戸締りを心配するが，我々は「酔いどれ倶楽部」に屯(たむろ)する，たんなる博打打(ばくちうち)や飲兵衛と見なされているから，万事正々堂々と（above board）こなせば安全至極だ，とサムは重ねて太鼓判を押す。

だが，その言葉とうらはらに，ドアの外で激しい物音がすると，3人は立ち上がりピストルをドアに向けて構える。物音は，ベラが酒瓶やグラスを載せたお盆をひっくり返しただけだったが，銃口を向けられたベラは「射撃場だと知っていればこんな仕事は引き受けなかったわ」とこぼす。膝を痛めたらしいベラに，パリの国立美術学校(エコル・デ・ボザール)で芸術解剖を学んだというニューウェル，骨接ぎの心得があるというジョウはともに介抱を申し出るが，サムは押し留め，ベラを下がらせる。

国家の一大事を議論する重要な秘密会議の席で女給ごときに現を抜かす二人をサムが咎めていると，給仕支度を整え直したベラがお盆を持って再び登場。髪には3人と同じ花形記章(コケイド)を挿しており，いま流行りだからだ，と言って退場。サムはベラがスパイではないかと疑う。

サムは議題に戻り，ナパー・タンディ[87]（James Napper Tandy, 1740-1803）がフランスから帰国した朗報を告げる。祝杯をあげるジョウに，「ナパー・タンディって誰？」とニューウェルは素朴に尋ね，ジョウは酒を喉に詰まらせる。アイルランド人ともあろう者が，世界一有名な秘密結社「ユナイテッド・アイリッシュメン」の指導者の名前も知らないのか，とサムは呆れかえるが，ニューウェルはフランス暮らしが長かったと言い訳し，タンディはフランス軍の将軍でフランス人名を名乗り，変装名人だったので止むを得ない，とサムも諦める。しかし，敵将サー少佐（Major Sirr）のことも知らないニューウェルに，サー少佐はダブリン城の諜報部長だったが，将校や司祭，労働者，教授，豚取引人に扮したタンディに話しかけられても気づかなかった，という逸話があると教え，あるときタンディが電柱に変装したら学生が気づかずに彼の張りぼてを引っ掛けたほどだ，とジョウがジョークを飛ばす。

このナパー・タンディの首に1,000ギニーの懸賞金が懸けられていると聞いたニューウェルも，彼には20フラン貸しがあるから良かった，とジョークを飛ばすが，サムはこの話を真に受け，誰も本物のナパー・タンディを知らないから，首実検の役を引き受けるように依頼し，3人はこの指導者の無事の帰国を祈念して乾杯する。

21歳のカトリック信者で裕福な青年チャールズ（Charles O'Hanlon）がアーマーから大急ぎで駆け込んでくる。指導者到着までは開封厳禁の封書をサムの手から奪って胸に押し当て，ナポレオン率いる仏軍によるアイルランド解放を夢見て彼は期待をふくらませる。

ベラが蠟燭を持って，仏軍進撃の歌を歌いながら，登場。サムは立ち聞きしていたに違いないベラを（裏切りの妖婦）デリラ（Delilah）呼ばわりし，民衆の敵・カースルレイ卿の手先のスパイであると即断するが，ベラはかつてカースルレイ卿の洗濯女だっただけで，実は自分もまた「ユナイテッド・アイリッシュメン」の一員だと告白する。信じないサムは合言葉を矢継ぎ早に浴びせるが，ベラはいずれもきちんと答え，逆にベラが

「堅物さん」(Mr. Sobersides) のサムに別の合言葉を唱和させ，抱きついてキスをする。「酔いどれ倶楽部」が「ユナイテッド・アイリッシュメン」であることをどうやって知ったのか，というサムの問いに，町の半分が知っている事実よ，とあっさり答えてベラは退場。

同様に立ち去ろうとするニューウェルを引き止めて，チャールズは思いもよらない提案を一同に切り出す。今晩彼の父親と会食したカースルレイ卿をこの場に招き，助力を請うという提案である。反革命側の立場にはあるが，アイルランドに心底からの関心を示し，生命を投げ出す覚悟だと卿みずからの口から聞いた，とチャールズは主張するが，印刷所で卿から鞭打ちされたジョウや，聖書のエサウのように生得権まで売り飛ばしかねない輩だと決め付けるサムは無論，反対する。しかし，チャールズの考えは，文藝に秀でた文化人倶楽部と称するこの「酔いどれ倶楽部」にアイルランド総督カースルレイ卿を招いて雑談させ，本当に非政治的組織であると思い込ませれば，以後当局から嫌疑を受ける心配はいっさいなくなる，というものであった。サムはこの大胆な計画に賛同する。

さっそく部屋をいかにも文人倶楽部らしく見せるために，チャールズはワインの手配をベラに，ドミノの準備をニューウェルに，トランプ遊びの演技をサムに，プロテスタントの歌「リリバレロ」('Lillibullero')や「プロテスタント・ボーイズ」('The Protestant Boys') を歌うことをジョウに命じて，退場。生まれて初めてトランプ札を手にするサムは，「暗黒の君」(＝悪魔) の考案したゲームだ，と愚痴をこぼす。

カースルレイ卿，続いてチャールズが登場。カースルレイ卿は文人の集いに感嘆する。酔っ払って欠伸をするジョウを，ベルファーストを「北のアテネ」と名付けた詩人だとチャールズは紹介し，謹厳実直なサムがトランプに興じているのは彼の牧師が大逆罪で先週絞首刑になり，とがめだてする者がいないからだ，と釈明する。今宵不在の倶楽部員たちはバスティーユ陥落をよそで祝賀しているのだな，と卿がおもむろに水を向けると，チャールズはここぞとばかりに，われわれは政治に関心がありません，と断言。しかし酔って仏軍進軍の歌を歌いだすジョウを彼は叱り飛ばす。

「いがぐり頭」(croppy) で頬髭を生やしたニューウェルを目に留めた卿は，チャールズに呼び寄せさせる。彼のスケッチブックに描かれた「自由の女神」を見て，政府が西インド諸島への旅費を無償支給してくれる(＝国外追放処分)だろう，と声をかける。卿がフランス語でニューウェルと話すのを耳にしたジョウは，当倶楽部では外国語禁止だが，フランス語だけは例外，ちび伍長ボナパルト万歳，と叫ぶ。この男は言葉をすこし慎まないと，ユーモアを解さぬ治安判事に絞首刑を言い渡されかねない，と卿は忠告して，チャールズの見送りも断って，退場。

計画は無残な大失敗に終わり，チャールズがジョウを罵倒すると，卿が突然また戻ってきて，チャールズの自宅に今夜逗留する予定は取りやめにした旨を父親に伝えるように言って，退場。

ニューウェルは，この計画自体がチャールズの手の込んだ策略ではないかと疑り，卿から通報報奨金を受け取りにいくがいい，と侮辱する。チャールズははずした手袋でニューウェルの顔を叩き，腕組みして待ち受けるが，相手は無視する。憤然となったチャールズはこの場での決闘を挑み，照明不足を解消するためにベラに蠟燭を持って来させる。ピストルを点検し，部屋の中央で両者背中合わせに立ち，4歩歩いて振り返って撃

つ，という段取りまでとり決める。

カウントが2（歩）まで行った時，ドアの外に隠れていたベラが割って入り，蠟燭の火を消して，決闘を阻止する。

ドアにノックがあり，ニューウェルはベラに閂（かんぬき）をかけさせるが，再度ノックがあり，「ナパー・タンディ」と名乗る声がする。歓声が発せられるが，サムは用心のためにニューウェルにフランス語で話しかけさせ，声色（こわいろ）から本物の「ナパー・タンディ」であるか，判断させる。（会ったはずもないのだが）ニューウェルは本物だと請け合い，ベラはドアを開ける。だが，入ってきたのは剣とランプを手にした英国人制服の男で，それを見たチャールズは「サー少佐！」と叫び，ニューウェルはベラの背後に縮こまる。立ち向かうチャールズに，その男は「大逆罪で全員逮捕する」と言い放ちながらも，帽子や鬘，付け鼻，黒コートを脱いだ下には緑のコートが見え，この男はやはりナパー・タンディであったことが判明する。チャールズとニューウェルは互いに，「裏切り者」「意気地なし」と罵り，サムはベラを「裏切りのユダ」と呼ぶが，実はベラはナパー・タンディの実娘キャスリーン（Kathleen）であった。彼女は父にウェックスフォード（Wexford）行きを提案し，外で待たせてある駅馬車（post chaise）で娘とともに出発する。「サー少佐」への見事な変装ぶりを称賛するチャールズに，カースルレイ卿の変装の方はどうだったかね？と訊きながら…。おもわず感嘆の言葉を洩らすサム。幕。

変装名人の指導者ナパー・タンディは，現在で言えば「怪人20面相」のような義人的英雄だろうか。1798年の「ユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起」前夜の活動家たちの様子が講談風に活写されて痛快である。アルスター文芸劇場の創設時の理念が，ウルフ・トウンや「ユナイテッド・アイリッシュメン」の主義主張を広く知らしめることにあったことを想起すれば，ナパー・タンディが無条件に賛美されていることも頷けるだろう。

⑨『陸地（テラ・ファーマ）のトンプソン』（*Thompson on Terra Firma*）

初演は1934年，ベルファースト，グランド・オペラ・ハウス。内容に関しては既述の③を参照。

(4) マクナマラ演劇のまとめ

マクナマラがその演劇作品で果たしたことは，プロテスタントとカトリックの対立・反目への痛烈な諧謔である。17世紀の歴史劇『スザンと君主たち』では両宗派の英雄ウィリアム3世とジェイムズ2世のボイン決戦がそもそも一目惚れの色恋沙汰に由来し，最後にはふたりとも意中の女性を第三者に略奪され，敗北者同士が慰めあうという冴えない首尾に終わる。一方，近未来劇『降伏拒否』では，すでにプロテスタ

ントとカトリックの対立はすっかり解消している。ただし，党派心に拘(こだわ)る最後の老兵の存命中は，ウィリアム3世を現世に招致することはできず，老兵の不慮の事故死でようやく招致が実現するや，党派心に拘る別の人物が国外から戻ってきて，閉口したウィリアム3世が煉獄へ逃げ帰るという結末で，頑迷固陋なプロテスタントへの諷刺とともに，おそらくはイェイツを念頭に置いたと推測される，死者の霊魂と交信するオカルト神秘主義への諷刺が顕著である。時空間を混線させた『常若の国(ティル・ナ・ノウグ)のトンプソン』は，ユニオニストのトンプソンの無知や偏狭さを炙り出すと同時に，アイルランド神話崇拝解体の試みでもある。同時に言語ナショナリズムの陥穽や限界についても問題提起されている。『沼地にかかる靄』にも，方言や地方色を表層的に重視する風潮（プロヴィンシャリズム）に傾倒していた文藝運動への揶揄が込められている。1798年の反英独立運動前夜に取材する『誰が語るのを恐れるだろうか』は，一種の講談を思わせる佳作で，変装名人のタンディの快挙を手放しで称賛している。総じて，マクナマラ演劇には，宗派抗争は思い切り笑い飛ばしてみせるのが最善の解決策といったシュールな大胆不敵さが感じられ，彼の作風に「フラン・オブライエン(Flann O'Brien, 1911-66）を髣髴とさせる茶目っ気の（puckish）ユーモアやバーレスク愛好」を読み込む指摘[88]があることも頷ける。散逸原稿の発掘とともに，本論で扱ったマクナマラ演劇が再評価されることを期待したい。

（II）レノックス・ロビンソンの演劇

(1) レノックス・ロビンソンの略歴

アイルランド南部コーク州[89]出身の劇作家（エズミ・スチュワート・）レノックス・ロビンソン（Esmé Stuart Lennox Robinson, 1886-1958）については，筆者はすでにその問題作『失われた指導者』（*The Lost Leader*, 1918）を詳細に論じたことがあり，略歴についてもそこで紙幅を割いた[90]ので，ここでは割愛する。マクナマラとは20歳ほど年齢差があるが，ロビンソンもマクナマラと同じ72歳で亡くなっている。今回取り上げるのはロビンソンがアビー劇場の支配人に就任する前のコーク時代の初期3作品――1幕劇『クランシーの家名』（*The Clancy Name*），2幕劇『岐路』（*The Cross-roads*），1幕劇[91]『彼の人生の教訓』（*The Lesson of His Life*, 1909）――である。

(2) レノックス・ロビンソンの初期演劇作品

	邦題（拙訳）	原　題	初演日	初演会場
①	『クランシーの家名』	*The Clancy Name*	1908.10. 8	Abbey Theatre, Dublin
②	『岐路』	*The Cross-roads*	1909. 4 . 1	Abbey Theatre, Dublin
③	『彼の人生の教訓』	*The Lesson of His Life*	1909.12. 2	Dun Theatre, Cork

①『クランシーの家名』（*The Clancy Name*）　1幕

1908年10月8日[92]，ダブリンのアビー劇場にて初演。なお，以下に掲げる粗筋は1909年9月30日にアビー劇場で再演された改訂版に基づくもので，初演版では結末部分において，夫人の葛藤する内面をもっと長く描いていたという。両方を観た劇作家フィッツモーリス（George Fitzmaurice, 1877-1963）は，紋切り型で円滑な改訂版よりも初演の方が良かったと述べている[93]そうだが，テキストは改訂版しか入手できないので，拙論での比較検討はかなわない。

アイルランドの農家クランシー[94]家の居間。午後2時過ぎ。この家の一人息子ジョン（John Clancy）が落胆した様子で座っている。ドアをノックして，隣人のスピレイン夫人（Mrs. Bridget Spillane）とユージン・ロウチ（Eugene Roche）が入ってくる。二人はクランシー夫人（Mrs. Sarah Clancy）への貸し付け金を，今日午後3時に返して貰えると夫人から聞いて訪ねて来たのだが，バンドン（Bandon）の銀行からまだ夫人は戻っていない。好天なのにジャガイモ植えもしないで家にいるジョンをスピレイン夫人が諌めると，彼は昨日，一昨日とジャガイモ植えの仕事はした，と弁明する。出産間近の牛（springers）が1頭18ポンドの高値で売れたことを知って二人は羨ましがるが，ジョンは平然としている。余り農作業向きではなかった夫ジェイムズ（James Clancy）の死後，クランシー夫人は女手一つで農場を立派に切り盛りし，その美田は教区の評判となっている。買ったばかりの羊2頭を行方不明にした挙句に警察に捜索願を出したパット（Pat Nyhan）とは比べ物にならない，とユージンが言うと，ひねもす新聞を読むのが日課で，ジェイムズ・パワー（James Power）殺人事件の犯人をいまだに検挙できずにいる警察の無能さをスピレイン夫人は嘲笑し，彼女が犯人と疑っているベンジャミン（Benjamin Brien）が，カンティヨン巡査部長（Sergeant Cantillon）の妻の兄弟だから，警察は本件を積極的に捜査していないのだ，と噂する。これを聞いたジョンは声を荒げて怒りだし，家の外へ出る。ベンジャミンは素面のときは物静かな男だが，とユージンが異論を唱えると，ベンジャミンが犯人だとは断言していない，と逃げを打ちつつも，酔ったらなにをしでかすやら，とスピレイン夫人はやはりベンジャミンへの不信を隠さない。

表のジョンが母親の帰宅を知らせる。クランシー夫人がフード付き黒い外套姿に，荷物一杯の籠を下げて登場。途中まで出迎えに来なかった息子の思慮のなさに小言を言い，バンドンの市場の様子をおしゃべりしなが

ら，来客との本題に入る。

いまから5年前，リスリー（Lislee）の銀行が倒産し，預金全額を失ったジェイムズ・クランシーは失意と病弱が重なって他界し，夫人には多額の負債だけが残された。農地を売却して弁済にあてることもできただろうが，夫人は近所のスピレイン夫人とユージンから借金する道を選び，刻苦奮励して地道に働き，ようやく一括完済の日を迎えたのである。まずスピレイン夫人に元本100ポンドに5年分の利息25ポンド（銀行融資より割高な5％の年利で借りていた）の合計125ポンド，ユージンには元本200ポンドに同利息50ポンドの合計250ポンド。総額締めて375ポンドを耳を揃えて差し出し，長年の借金を払い終わってすっきりとしたクランシー夫人には，一人息子ジョンの結婚が最後の願いであるが，クランシー家に誇りを抱く彼女は，嫁の候補として良家の子女に固執する考えを示す。

話題はジェイムズ・パワー殺人事件に転じ，スピレイン夫人はまたさきほどの自説を述べようとするが，ユージンが黙らせる。クランシー夫人は，殺人の大罪を犯した犯人はきっといまごろ良心の呵責に苦しんでおり，心の平安を得るために自首すべきだ，我が子を殺した女が犯行後2年も経って出頭した例もある，と語る。

スピレイン夫人はキルミーン（Kilmeen）に住む姪っ子（彼女の兄トムの娘）ジュリア（Julia Tobin）をジョンのお嫁に迎えたらどうだろうか，と縁談をもちかける。（ジョンは姿を消す。）しかし，クランシー夫人は，自分が嫁いだ時の持参金220ポンドと比べて，ジュリアの見込み持参金が100ポンドと少ないことを理由に難色を示す。スピレイン夫人は腹を立て，他にも求婚者はいるから早めに見合いを，と席を立つ。クランシー夫人は日曜日に息子をジュリアに会わせましょう，と取り成し，スピレイン夫人とユージンは退出する。

ジョンが家に戻ってくるが，晴れて一家の借金を清算できたというのに，浮かない様子である。牝牛は1時間前に無事に出産したというし，息子の悩みの原因はクランシー夫人には思い当たらない。夫人はさきほどのジュリアとの見合い話をジョンに持ちかけるが，彼は言下に拒絶する。他に好きな娘がいる訳でもないなら，なぜ拒否するのかと，問い詰める母親に，しばらくためらったのち，彼は恐ろしい事実――ジェイムズ・パワー殺しの犯人は自分であること――を告白する。故意の殺意はなかったものの，馬をめぐる口論から棒で彼の額を殴りつけてしまい，死体は沼地の穴のなかにある，という息子の説明に，最初はただ動転していた夫人は，人殺しの息子を持つ羽目になった我が身の不幸を嘆き，近所に顔向けができないほどクランシーの家名に傷がついた，と呆然とする。さらに，ジョンが自首する覚悟であると語ると，この5年必死に働いて家名を守ってきたのに，自首などされたら，みな司祭職の父方の3兄弟やダブリンの紳士に嫁いだジョンの伯母さん（つまり自分の姉妹または義理の姉妹），そして近所のみんなから尊敬されてきた夫人自身にとって，まったくの恥さらしになる，ジョンは警察の捜査対象でもなく，この事件の迷宮入りは必至，自首したところでいまさら被害者が生き返る訳でもなく，＜人殺しジョンの母親＞と後ろ指を指され，不名誉な出廷尋問や家宅捜索を受けるくらいなら自分は死んだほうがましだ，と泣きじゃくる。

ジョンはその様子を見て，自首は断念すると答える。しかし，被害者の血塗れの顔を脳裏から消し去るためには，どこか遠い土地へ行きたい，と訴える。訳もなく姿を消せば却って怪しまれるだけだ，と反論する夫人

の鞄をつかんで，ジョンは逃走資金を得ようとするが，いましがた巨額の借金を返済したばかりの夫人の鞄には，無論びた一文も残ってはいない。ジョンは無一文でもかまわないから逃走しようとし，最後に＜可哀想に＞の優しいひと言を母親に乞うが，夫人は＜恥さらし＞を繰り返し，ジョンも逆上して＜あんたこそ恥さらしだ＞と言い返す。

このとき，帰ったはずのスピレイン夫人の人影が窓に映り，驚いた母と子は少し身を離して口をつぐむ。スピレイン夫人が登場。（ジョンは入れ違いに退場。）＜恥さらし＞という言葉が聞こえたというスピレイン夫人に対して，ジェリー（Jerry Brien）の子羊がうちの土地に迷い込んでくることが＜恥さらし＞なのだ，と言い繕う。スピレイン夫人がわざわざ戻ってきたのは，自分には子どもがおらず，ジュリアをたいそう気に入っているから，ジュリアの持参金に自分も30ポンド上乗せしてあげたいという提案を伝えるためだった。急場をしのぎ，拍子抜けしたクランシー夫人は椅子に座り込み，朝からなにも食事をしていないせいだと弁明しつつ，元気を奮い起こして，スピレイン夫人のささやかな申し出に感謝する。たしかに結婚して身を固めれば，息子も（自首などという）軽はずみな真似はしないだろうし，と反芻するクランシー夫人。

戸外で車の音がする。スピレイン夫人が実況中継風に伝えるところによれば，彼女とユージンを迎えにきたユージンの兄パッツイ（Patsy）の軽馬車（trap）だが，御者の兄はひどく酔っ払っており，牝馬は激しく跳ね回っている。しかも道路の真中には遊びに夢中になって馬車の接近に気づかない子どもがいる，そこへある男が駆け寄ってその子を溝へ突き飛ばして救助に成功したものの，当人は逃げずに道路に突っ立ったまま。そして馬車にはねられ，人々が倒れた男の周りに集まっているという。

クランシー夫人とスピレイン夫人は戸口に出る。はねられた男を人々がこの家の方に連れてくる様子に気づいて，両夫人は受け入れ態勢を整えるべく部屋を片付け始める。

ジェリーとマイケル（Michael Dempsey）が，埃まみれで生気のないジョンを運び入れる。ユージンとメアリー［Mary Brien］（救出された子どもジェロウム［Jeroume］の母親）も登場。大丈夫ですから，とジェリーは，クランシー夫人を動転させないように嘘をつくが，夫人は気丈にも息子の事故の経緯を尋ねる。目撃者のジェリーとマイケルは，スピレイン夫人の台詞と同様の経過を説明し，馬車は9mも離れていたのにジョンは逃げようとはせず，「半ば呆然と」「しかも笑みのようなものを浮かべて」突っ立っており，牝馬にはねられた後，車輪で胸部を轢かれたのだという。

男たちはジョンの喉にウィスキーを流し込む。効き目がないと思われたが，やがてジョンの唇が動き出す。クランシー夫人は即座に，正気を失って譫言（うわごと）を口走っているだけだから真に受けないようにと，皆に釘を刺す。ジョンの洩らす「警察に行く」は，飲酒運転のパッツイの義務を意味するものと誤解され，撲殺したパワーの「額の血」を思い浮べて怯える叫びは，ジョン自身の流す額の血を拭いてくれ，という意思表示だと夫人は取り繕う。やがてジョンの口には泡が浮かび，完全に息を引き取ったことを夫人は確認する。

マーオニー神父（Father Mahony）が到着。ジョンの体を検分して，彼も死亡を確認する。メアリーは嗚咽し，男たちも低い叫びを洩らして見交わす。ひとりクランシー夫人は，もう二度と息子は言葉を発さないか，と念を押す。一人息子さんの死去でクランシーの家名は途絶えることになるが，我が身を投げ出して幼児

の生命を救ったジョン・クランシーは後世において，一族でもっとも偉大な名前として称えられるだろう，と神父は慰めの言葉をかける。夫人はお礼を述べ，自分も息子もクランシーの家名を汚さなかったことを神に感謝します，と語る。神父はジョンの魂に祈りを捧げるように促し，一同は跪く。幕。

もともとはロビンソンの姉が書いた物語が下敷きになっているとはいえ，緊密な構成の１幕劇に仕立て上げて深刻な問題提起を行なっている点は，ロビンソンの劇作家としての優れた資質を垣間見せる処女作である。謹厳実直なクランシー夫人には，「殺人者の母」という屈辱は耐えられなかった。彼女は自首を決断したジョンを翻意させ，何食わぬ顔でそのまま生きていく道を選ばせる。しかし，ジョンは幼児ジェロウムの生命を救い，かつ自分の生命を（おそらく意図的に）途絶させることで，犯した殺人を贖罪する。臨終の息子を前にして，クランシー夫人が気にかけるのは息子が殺人を告白することのみであり，彼女には瀕死の息子の容態を心配し，苦痛を和らげるような優しい声をかける余裕すらない。殺人の事実ともども一人息子がこのまま死んでしまうことが，夫人の最後の祈りになってしまう恐ろしさ。「家名」とは，そこまでして守るに値するものなのだろうか。自首を制止した自分の態度が，息子を自死へと追い込んだことを直感しているはずのクランシー夫人にとって，果たして息子の生命よりほかに守るべきものはあっただろうか。偽りの美談と引き換えに，彼女はかけがえのない財産を失ってしまったのに気がつかないのだろうか。家柄の名誉の維持，伝統的威厳への固執，世間体への過敏な考慮――ロビンソンはこうした保守的価値観に大きな疑問をこの処女作で突きつけている。

②『**岐路**』（*The Cross-Roads*[95], 1909）　序幕付きの２幕

1909年４月１日，ダブリンのアビー劇場にて初演。３月24日初演予定だったが，この日シングが亡くなったので，１週間延期された。序幕をカットした改訂版による再演が1910年２月３日。ヒロインのエレンを演じたのは，セアラ・オールグッド（Sarah Allgood, 1883-1950）――シングの恋人モリー（Molly Allgood, 1887-1952）の姉――で，初演当時は26歳。実際にはコークではなくダブリン南の海辺の町ブレイ（Bray）で執筆されたが，数週間の滞在にすぎず1908年10月にはコークに戻っており，「コーク時代」の作品と見なすことにする。当初の標題は*Cross Ways*で，先に第２幕を書き，最後に序幕を付け足したのだという[96]。

序幕　ダブリンの愛蘭（エリン）弁論部[97]（Erin Debating Society）の委員会室。毎週月曜開催の定例弁論会開始予定の午後８時半を迎えたものの，あいにく土砂降りの夜とあって，隣室の弁論会場には人影はない。実は先週

も7，8人しか聴衆は集まらず，今晩の会の中止をオライリー（James O'Reilly）は提案するが，原稿チェックに余念のない弁士のブレイク（Henry Blake）は上の空である。弁論部発足時の2年前と比べれば，2週間費やした原稿準備が3時間でできるほど文章作成の技術は向上した，と振り返るオライリーに，週刊文藝雑誌『グラニュアイル[98]』（*Grannuaile*）誌に投稿が採用される秘訣をドイル（Sidney Doyle）は尋ねる。アイルランド語論文が掲載されることが多いのは，論文審査にあたっている編集補佐ブラウン（the sub—Browne）の意向が反映されているにすぎず，既刊号（バック・ナンバー）を十分に検討して編集長の好みを知ることが大事だな，とオライリーは指南する。弁論会の常連の詩人ブライアン・コナー（Brian Connor）はまだ顔を見せておらず，昼間彼が不機嫌そうに書店で働いている姿を見かけたというドイルは，ブライアンが好意を寄せながらも相手にして貰えない女性エレン（Ellen McCarthy）に，次回の弁士役をお願いしてはどうだろうか，と発案する。みんなの人気者の彼女が「女性と新生アイルランド」の演題で弁論を行なえば，盛会まちがいなしだ，とオライリーも賛成する。

オライリーとドイルのやりとりから分かることは，このエレンはコーク州出身の無知な田舎娘だったが，3年前に弁論部部長フィッツギボン（Fitzgibbon）氏の夫人の召使として雇われたのち，彼女の才能を見抜いた氏が書店助手に配置換えし，弁論会にも誘うようになって知的に成長を遂げたのだという。議論に明け暮れて実際行動を伴わない自分たちと違って，純粋な愛国心にあふれるエレンは，必要とあらば自己を犠牲にしても，祖国のために大仕事をするような女性だ，とドイルは畏敬の念をこめて語る。

それまで会話の外にいたブレイクが口をはさみ，エレンの性格には偏った面があり，空想や感情よりも事実一辺倒の性格で，まるでゆっくりと餓死の道を進む子どものように，性質の一面を故意に殺しているような印象がある，と感想を述べる。いずれエレンはブライアンと結婚するだろうと推測するオライリーに，フィッツギボン氏が与える安月給では所帯を持つのはずっと先の話だ，とドイルは反論する。

ドアが開き，噂の二人，エレンとブライアンが登場。歓迎の挨拶が交わされ，エレンは中止になって聞き逃すことになったブレイクの弁論について話題を向ける。仲間のオライリーやドイルが面白がって説明するところによれば，出自や地位や経済力などとは無関係に，「天与の伴侶」（natural mates）と呼ぶべき存在に気がついたらかならず結婚すべきだ，というのがブレイクの主張で，その気づきが正しいか否かの客観的検証が困難であることが難点だと彼らは言う。たしかに出自や身分よりも愛情が最優先される，とブライアンは意見を述べるが，家族や国家などの第三者のために結婚することこそもっとも崇高だと，エレンは反論する。当のブレイクは，世俗的利益と引き換えに自然を売り飛ばして踏みにじるべきではない，夜の山頂に佇む者を包み込む風のように，その「伴侶」との出会いは霊的に実感できる，と譲らない。自然の掟に従わなければ災いを招くと考えるのは時代錯誤の原始人の発想だわ，とエレンが突き放すと，ブレイクはある知人のエピソードを物語る——裕福な良家の子女と婚約していたその男は，貧民街の堕落した別の女性こそが自分にとっての「伴侶」であると直感した。そこでブレイクは繰り返し，その「伴侶」との結婚を男に勧めたが，世間体や家族，将来生まれる子どものことを考慮して，男はやはりそのお嬢さんと結婚し，いまでは後悔の念で心身ともに衰弱している…。これこそ自然に逆らった災い（祟り）だと言い残して，ブレイクは立ち去る。

ドイルは，彼の話に出てきた男は，ブレイクの実兄だとエレンに教える。いまから奴は雨の中，外套も着ずに街頭を彷徨して，薄明りの夢に包まれて「伴侶」を捜し歩くのだろうね，とドイルたちは冗談を言って笑うが，ブライアンひとりは真面目な表情で，ブレイクの考えをエレンが本当に信じていないのか，と念を押す。まったく荒唐無稽だとエレンは繰り返すものの，できれば彼の弁論を聞いておきたかった，なぜなら明日には，実家のコーク州バリガーティーン (Ballygurteen) に帰省し，もうダブリンには二度と戻らないつもりだから，と思いもよらない発言をする。

仰天する3人の男たちにエレンは事情を説明する。実家の母親からの手紙で，妹のケイト (Kate) が家を出て婦人服仕立ての修業を望んでおり，彼女の代わりにバターや鶏の家業を切り盛りしてほしいとのこと。自分は3年前に上京してすでに機会に恵まれたから，今度は妹が当然希望を叶えられるべき。早速雇い主のフィッツギボン氏に相談すると，折り良く氏の姪御さんが英国からやってきたので，仕事を引き継いでもらうことになった。上京当初，ダブリンは国の中心，ナショナリズムの中心で，アイルランドのためにもっとも貢献できる場所だと思っていたが，それは間違いであることに気づき，ダブリンにはもうウンザリしている。むしろ実家のバリガーティーンの方がナショナリズムの中心だから自分は里帰りするのだ…。

酪農に従事するエレンを想像して冷笑するオライリーに，アイルランド問題を毎週論議しながら日頃はアメリカ製のブーツ販売を生業とする矛盾，唯一知っているアイルランド語の文字で署名して恰好をつけた投稿論文，10年前ならボーア戦争で（オランダ系移民の）ボーア人を支援してオランダ産チーズばかり食べていただろう，流行かぶれの政治意識をエレンは揶揄するものの，言い過ぎたと後悔して，都会暮らしはいろいろ勉強になって感謝しているが，所詮自分は乳搾り自慢の百姓娘にすぎず，ダブリンにいても役に立てない，とエレンは卑下して弁明する。

じきに今度は田舎暮らしにも飽きて，燦然と輝くグラフトン通り (Grafton Street) を懐かしむだろう，となおも引きとめようとするドイルに，グラフトン通りより故郷の丘の道，リフィー川より故郷のアーギディーン川 (Argideen)，ダブリンの立派な建物より実家の農家（コテッジ）の方が気に入っている，とエレンは受け流す。次回の弁士役の打診を考えていたことをオライリーから聞かされると，だったら早く出発しなくちゃ，と笑って答え，この弁論会で学んだことを生かして故郷で頑張りたい，と抱負を語る。分野は違ってもアイルランドのためにお互いに献身しよう，故郷で弁論部を創設してはどうか，とオライリーは彼女に励ましのエールを贈る。多忙な農作業でそれは無理だろうけれど，最新式農法で故郷が全国的に有名になるかもね，とエレンは応じる。明朝始発列車の旅の荷造りをするために暇乞いするエレンを，灯かりを持って先導するドイル，オライリー，ブライアン（彼はエレンを自宅まで送り届ける）は戸口まで見送りに行く。立去り際にエレンは，想い出の残る弁論部室を見回して，またこの部屋を見ることがあるかしら，と一抹のせつない後悔のこもる声で呟き，一同退場する。幕。

第1幕　8ヵ月後。エレンの母親マカーシー夫人 (Mrs. McCarthy) の農家。夫人はテーブルでアイロンがけをしながら，久しぶりに訪ねてきた客人のデズモンド夫人 (Mrs. Desmond) とお喋りをしている。婦人服仕立て修業に出たケイトと入れ替わりにエレンが帰省したと聞いたデズモンド夫人は，彼女の娘メアリーが

家を離れて以来，家事に忙しい，とこぼし，里帰りしたエレンは立派で教養もあると誉めそやす。上京中に送ってきた長い便りを読み聞かせて貰ったことがあるためだが，マカーシー夫人自身も，弁論部やその議論を綴ったエレンの手紙はよく理解できなかったらしい。3年ぶりに里帰りした娘は嬉しそうで，我が家に帰りつくや否や，すぐ普段着に着替えをして雌鶏の餌やりを始めたという。日曜日には，近所の自惚れ屋のマギー（Maggie Culinane）を都会仕込みの洒落たファッションで顔色なからしめる，と思いきや，<郷に入りては郷に従え>で自分はダブリンの猿真似はしない，と言って，母親が15年来着古した外套を羽織って礼拝に出かけ，驚くほどの衛生観念で実家の床を掃除して磨きあげ，鶏の新しい飼育方法——これまで屋内で放し飼いだった鶏を屋外の金網の檻に閉じ込める方式で，先週は8ダース（96個）もの産卵があり，現金収入が増えたという——や新しい餌の遣り方を実行してご近所にも宣伝し，盥（たらい）では満足せずに，バンドンから取り寄せた浴槽を自室に設置して，浴槽専用部屋＝「浴室」を作った，と夫人は驚きをこめて伝える。

デズモンド夫人は話題を，エレンの縁談の成り行きに切り替えるが，マカーシー夫人は不興顔である。エレンの婿にと考えている農夫トム・デンプスィー（Tom Dempsey）は，20ポンドという多額の持参金に誘惑されて，身持ちの悪いジュリア・ニーハン（Julia Nyhan）を結婚相手に選ぶ方向に気持ちが傾いているからである。マカーシー夫人は，たしかに金は大事だがすべてではない，良妻賢母こそ男たちの成功の秘訣（the making）だ，として，一介の労働者だったパトリック（Patrick Deasy）という男が結婚のたびに<あげまん>妻の尽力によって出世街道を邁進した事実を引き合いに出して，やりくり上手のエレンならば1年で20ポンドの貯蓄を残せることがトムや彼の父親マイク（Mike Dempsey）には愚かにも分かっていない，毎日のようにダブリンの若者たちからエレン宛てに写真入の手紙が届いており，縁談相手には事欠かない，と強がって見せる。時勢柄，若い女性はブラックベリーほどもいるが，結婚できる農夫はおそろしく少ない，とデズモンド夫人が懸念を示すと，まだトムとの縁談を諦めた訳ではなく，心変わりもあるかも知れないからマイクにもう一度会って確かめてみるつもりだ，とマカーシー夫人は答える。デズモンド夫人も夫ジョニーの食事の買い物があるから，と二人は連れ立って出かけようとする。

ドアにノックがあり，ダブリンからブライアン・コナーが来訪。エレンは留守だとマカーシー夫人から聞かされるが，コナーを見つけて必死に追いかけてきたエレンがまもなく息を切らして登場する。挨拶のあと，マカーシー夫人とデズモンド夫人は退場。

お茶とソーダ・ブレッドを支度して，エレンはブライアンにダブリンでの近況を尋ねるが，逆にブライアンの方がエレンの近況を知りたがる。慣れた都会生活との違いに帰省当初は戸惑ったものの，誰とでも顔馴染の親密な農村生活にすぐに溶けこみ，村で家禽講習会が催されれば<論より証拠>とばかりに，講習内容を実践に移す運動を推進して，冬場の鶏卵産卵記録を更新——そのため価格は下落したが——し，ダブリンやイングランドに産直鶏卵購入客を開拓しつつあるし，上質な子豚の飼育にも成功している，と屈託のない様子でエレンは答える。鶏や豚の飼育のほかにもっと適した立派な仕事が君にはあるはずだ，とブライアンが不満をぶつけると，今日，残念なことに縁談が破談になった，とエレンは打ち明ける。2マイルほど西に，立派なノックロビン農場とお屋敷を所有する男性がいて，自分を結婚候補に考えてくれていたが，多額の持参金を持つ別の

女性になびいてしまったのだという。

その男をとても愛しているのか，とブライアンが嫉妬を押さえて尋ねると，エレンは明るく笑って，田舎での結婚は愛情と無関係に，財産によってなされるもので，ブライアンがかつて貸してくれた恋愛小説でも，恋愛結婚は結局喧嘩別れに終わるのが常であり，この教区で唯一，恋愛結婚した夫婦がいるが，夫が妻に暴力をふるう悲惨な状態を迎えている，いずれにせよ，いま話した男性との結婚の見込みはなくなった，と微笑んで語る。

ブライアンはすっかり安堵して，実はダブリンで年収100ポンド（不定期収入と合わせると150ポンド）の秘書職を得たことを打ち明け，意を決してエレンに結婚を申し込む。

しかし，このプロポーズにエレンは驚きと困惑を示し，農夫の妻になる決意を固めたいきさつを話し始める——＜アイルランドはいまや岐路(cross-roads)にあり，正しい道を進む手助けをするのが国民一人一人の務めである＞と訴えていた講師の話を聞いたことを覚えているが，一種の農民組合を結成して高価な市場へ農産物を出荷したり，牧畜・農業指導員を招聘することが，地方にいてできる自分なりの国家への貢献策だと思うようになり，破談になった男性との結婚を望んだのも，先祖代々の農法を墨守しているこの農夫に，農業指導員の指導どおりの新機軸を実践させるという野心的な目論見があるからだ，と熱く訴え，ダブリンに行ったところで，弁論部で不毛な議論[99]をするのが落ちだ，と申し出を退ける。

しかも，ブライアンの就職先がアイルランド国内産業の発展とは無関係の，イングランド企業であり，愛国心の表明のために，国産衣料品を購入して着ること程度しかブライアンには思い浮かばない。エレンは，縁談相手の農場が手に入れば，荒地を灌漑してさらに農地を拡大するのが自分の務めであるように思われること，自分は粗野な田舎娘に過ぎない，と繰り返す。

ブライアンはエレンの腕に手を乗せ，君を愛する僕の気持ちよりも愛国心や政治を優先するのか，と優しく説得を続ける。ダブリン生活に戻ることは大きな変化だから，熟考期間としてプロポーズの最終回答は1，2週間待ってほしい，とエレンは答える。母親が誰かと話す声が聞こえ，エレンは家畜を見せにブライアンを誘って，二人は退場。

反対側からマカーシー夫人と老農夫マイク・デンプスィーが登場。朗報を早く伝えたいが，肝心のエレンの姿が見えないので，夫人はまずお茶をマイクに勧め，気に召さない様子なので，ウィスキーの水割りを出す。夫人はエレンとトムの結婚の日取りは「告解(シュ)の3(ロ)が日(ヴ)[100]」(Shrove) 以前にすべきだ，と提案し，結婚持参金を当てにしているマイクも異存はない。息子のトムが結婚したあとは，すでに息子に権利譲渡した農場を離れてカラ通り (Caragh road) の農家に移り住み，息子からの週2シリングの小遣いと老齢年金を頼りに暮すのだとマイクは言う。(相続税法上の問題があるかも知れないが) 役所の老齢年金委員会に甥っ子が2人勤務しているから，うまく処理してもらえるだろう，とご機嫌である。

エレンとブライアンが戸外から戻る。早速夫人は朗報——ジュリア宅を今日訪ねたトムは，ジュリアが癇癪持ちなのに気がつき，あっさりと婚約を解消，エレンと結婚することに決めたこと——を伝える。エレンは思わぬ展開に当惑しつつも，マイクに謝意を述べる。治まらないブライアンは小声でエレンに抗議していたが，

夫人に声をかけられると，この縁談への反対意見を切り出そうとするので，エレンは思いとどまらせる。

エレンは母親とマイクに中座を願い出て，二人はまもなく到着予定のトムを出迎えがてら，退席する(もちろん，マイクは失敬な態度のブライアンにご立腹だが)。

ブライアンは，まるで牝牛のように人身売買されて平気なエレンの自尊心のなさをなじり，結婚する気はないとトムに言ってくれ，と懇願するが，見合い結婚は田舎の流儀だとエレンは反論し，自分が結婚を断ればトムはジュリアとよりを戻し，数年のうちに彼の農地は愚妻のせいで荒れ放題になる，問題はその農地にとどまらず，バリガーティーン全体の繁栄や住民たちの将来に影響を与える，アイルランドが岐路にあるように自分もまた人生の岐路にあり，ブライアンとの結婚を選べば幸福ではあっても「空疎な」(*empty*) 人生を，一方，農場主トムとの結婚を選べば，農場での労働と計画と成功の大きな機会に恵まれた，すばらしい人生が送れるような気がする，とエレンは真剣な口調で心のうちを明かす。

農地所有という好条件に引き寄せられているエレンの勘定高さをブライアンが辛辣に責めると，エレンは我が身のためではなく，アイルランドのための決断なのよ，と言葉をつまらせ，頭を抱えて涙ぐむ。ブライアンは言葉がすぎたことを詫び，エレンの意思が不動であることを確認すると，求愛を打ち切る。しかし，年に一度は様子を見に会いたい，となおも未練を見せるブライアンに，田舎では人妻が独身男性と会えばあらぬ噂が立つし，自分の心の平安のためにも，今後は面会も文通も一切なしにしてほしい，と訴えるが，もうこれっきりなのかい，という問いにほだされて，7年後の今日の再会をエレンは約束する。

マカーシー夫人が戸口に現れ，トムの到着を告げて，立ち去る。自分のことなどすっかり忘れ去ってダブリンで活躍してほしい，とエレンは別れの言葉を述べるが，ダブリン市長になるよりもいっそのこと，このコーク州で農場を購入して僕も農夫になる，とブライアンは訴えるが，エレンは微笑んで受け流す。

戸外からトムの呼ぶ声がして，エレンは7年後の再会を繰り返し，握手する。ブライアンは握った手を離さずに目で訴えるが，エレンは必死にこらえる。駅への近道を教えるエレンに，戸外から苛立ったトムの声が響く。「さよなら」を2度繰り返して慌てて飛び出すエレンは，入ってきかけたトムに待たせたことを謝り，押し返すようにして出て行く。残されたブライアンは，エレンの名を叫ぶ。幕。

第2幕　7年後。トム・デンプスィーの農家。桶類や鶏餌用の皿，乳脂分離機，牛乳鍋が床に散乱している。食器棚には陶器の代わりに空の薬瓶，洗羊液缶，エリマンの塗擦液瓶 (Elliman's Embrocation) が鎮座している。煤けたランプがこの汚れて乱雑な部屋に薄暗く灯っている夕暮れ時。みすぼらしい服装で，早くも白髪混じりの汚れたぼさぼさ髪のエレン・デンプスィー (旧姓マカーシー) が跪いて暖炉の火を起こそうとしているところに，夫のトムが入ってきて食卓につく。

泥炭が湿っているため，なかなか火が起こせないでいるエレンに，牝羊と仔羊2頭が死んだ，とトムは不機嫌に告げる。厳寒な天候のためやむをえないけれど，次第に天気も持ち直してきた，とエレンはつとめて明るく振る舞い，キルカスカン (Kilcascan) に住むマイク・ファレル (Mike Farrell) に羊の病状について相談に行くようにトムに勧める。しかし，トムは，死んでいくのは彼の育てている羊ばかりであり，死因は肝蛭(かんてつ)病 (rot) でもなければ，特効薬のある他の病気でもなく，邪悪な祟り (curse) のせいなのだからどうしようも

ない，と怒鳴る。祟りなど信じないエレンは，寒冷な高地に羊を放牧しているのが原因だとして低地に降ろすように忠告するが，7年前にはカーベリー郡（barony of Carbery）随一の沃土だった農地がエレンとの結婚後ずっと災厄続きなのは，その祟りのもとがエレン自身であるからだ，とトムは逆に非難する。さらに，暖炉の火が消えたことにも腹を立て，お料理教室やら指導員やらでご多忙かも知れないが，一日の仕事を終えて帰宅した亭主にお茶の一杯もすぐに出せないのか，とトムは嫌味を言う。急いで用意するから仔牛に餌をやっておいで，とやり返すエレンに，もう給金が払えないから使用人のマギー（Maggie）に暇を出すように言い渡し，去年の収穫期のように病気で倒れたりせずに，ひとりで過酷な労働に耐えて働けよ，と捨て台詞を吐いて，トムは退場。

暖炉に火が熾(おこ)る。物憂げにお茶の支度をしていると，ドアにノックがあり，ブライアン・コナーが来訪。二人はともに相手を一瞬，認識できないが，すぐに了解して，握手を交わして久闊を叙する。もっともエレンの方は，羊の病気やらなにやらで駆けずり回って（I'm run off me feet）掃除の暇がないと言い訳して，部屋が乱雑なのを恥じる。。

エレンの問いかけに答えて，ブライアンは現在，まだ独身の身で，（ダブリン市内南部）ラスガー（Rathgar）に住んで小説を執筆中であること，ダブリン市内の＜バリガーティーン農産物倉庫＞（"Ballygurteen Produce Depot"）とペンキで書かれた大店舗を通りかかるたびに我がことのように誇らしく思うこと，愛蘭(エリン)弁論部からも祝意を寄せるメッセージを預かっていることなどを述べたあと，いま執筆中の小説――アイルランド農民の地位向上のために人生を捧げた女性が主人公――において，荒廃と汚物と浪費に特徴づけられた農地を，科学的手段を用いていかに効率的計画的に高品質高収穫の模範農場に変貌させたか，その過程を直接，当事者であるエレンから教示して貰い，小説の素材として取り込みたい，と語る。この小説が，たとえばアメリカ移住を思案している女性を思いとどまらせ，アイルランドの希望を鼓舞するような福音書となること，楽天的すぎると批判されても「実話に基づくのですよ」と反論できる内容にしたい，ということをブライアンは熱っぽく語りかけるのだが，やがてエレンの長い沈黙に気がつく。

エレンは，朝になって目で確かめ，噂に聞けば分かる話だから隠しても始まらない，と頭を抱えて泣き出しそうになりながらも，重い口を開く。

7年前に農夫トムと結婚してから，農夫組合の結成や指導員・検査官の招聘，アメリカ移住者の呼び戻しなどの運動を推進してたしかに順調な船出を切ったのだが，他ならぬ自分の農場において，農業専門書通りの飼育法を実践するや，鶏が全滅し，仔牛が死亡するなどの災厄に見舞われてばかり。結婚当初，何の干渉もせずに自由に任せてくれていた夫トムの言葉どおり，自分には祟りがあると思わずにはいられない，とエレンは絶望的な口調で告白する。

7年の結婚生活においてエレンは息子2人の子宝に恵まれたが，4歳前と2歳の二人はともに熱病に罹って1週間ももたずに亡くなったこともエレンは打ち明け，農地ばかりか子どもまでも失っては夫トムが頑なになるのは止むを得ない，もし小説を執筆するなら，祟りと恥辱をもたらした女について書いてほしい，と自虐気味に申し出る。しかし，すぐにそれを撤回して，結果はどうであれ，自分の歩んだ道は正しかったと確信

しているから，落伍の事実だけは伏せて，私が最初に目指した通りにことが運んだサクセス・ストーリーに潤色して書き上げてほしい，と訴え，アイルランドを離れるのは辛いし，農地はまだ改良の余地があるから，売却して移住することなどは考えていない，と語る。

ブライアンは，かつて弁論部仲間のブレイクが唱えていた「天賦の伴侶」説を思い出し，もしかすると「伴侶」である自分を拒んだがために祟りに見舞われているのかもしれない，と言及しつつも，自分からナンセンスな話だと，打ち消す。自分が挫折した分，他者の成功に役立っていると思えばせめてもの慰めにならないだろうか，とも持ちかけるが，農業刷新事業の発案・創始者たる自らが一人だけ挫折した皮肉な事実はエレンの心に陰鬱にのしかかっている。ダブリンから読書用の本を送ろうというブライアンの気休めの提案も，彼女は断る。子どもたちの死後，本を読んでいると，夫が苛立って暖炉に放り捨てて燃やされたことがあるから，と。

ブライアンは7年前の訣別後，エレンの顰に倣う形で，就職内定先のイングランド企業を辞退し，運良くその後アイルランドの新聞社に職を得て，アイルランド関係の仕事に専念してきたことを語って聞かせるが，日々の労働に疲れ果てているエレンには，もはやアイルランドへの想いは希薄になってしまっているようで，関心を示さない。

夫トムの戻る気配にエレンは立ち上がり，穏やかな対応をブライアンに求める。入ってきたトムは無愛想にブライアンを見つめる。エレンは両人を引き合わせたあと，二人にお茶を淹れ，雛(ひよこ)たちが庭に迷い出ているぞ，というトムの注意を受けて，世話をしに寒い戸外へ出て行く。

ブライアンは天気やお茶の話をして親しげにトムに話しかけるが，妻のダブリン時代の知人と聞いて，ダブリンに行ったことはないが，少しいるだけで馬鹿げた考えで頭が一杯になるところだ，と腐して，純朴な田舎娘だったエレンがダブリン滞在を契機に，衛生やら新種の鶏餌やら土地灌漑といったくだらない考えに染まってしまった，と不満をもらす。新式農法の擁護をブライアンが始めるや，牛乳やバターを店で買っている奴に牛の飼育や乳搾りの苦労が分かってたまるか，と激昂し，エレンの祟りのせいで農場や我が子たちまでひどい目にあった，とトムは息巻く。新式農法が他の農夫の間では成果を挙げている事実や，エレンに悪意は毛頭なかったことなどを，怒りを懸命に押さえて指摘してきたトムだが，エレンへの悪罵に我慢がならなくなって立ち上がり，エレンを「よく知っている」者として彼女を擁護する。トムはその表現に性的ニュアンスを読み込んで曲解してみせ，逆上したブライアンは跳びかかってトムの喉を締める。揉み合いになり，トムが椅子に押しつけられたところへ，エレンが戸外から戻り，ブライアンをトムから引き離す。

このまま奴を殺させてくれ，自分は縛り首になってもかまわない，と興奮するブライアンと，殺人未遂でこの男を警察に訴えてやる，とあえぐトムの双方をエレンはなだめる。ブライアンはエレンに，今の暮らしや夫を捨てて自分との新しい生活をダブリンで始めよう，と駆け落ちを懇願する。しばらくためらっていたエレンだが，たしかに自分の人生は地獄だった，とこれを受け入れ，トムの威嚇にも怯(ひる)むことなく，自分がいなくなれば祟りも去って農場が元通りになるかもしれない，とやり返す。トムは打擲(ちょうちゃく)のための杖を探しに奥の部屋に消える。

ブライアンは戸口に立って待っているが，エレンは土壇場になって躊躇を見せ，激しく泣きじゃくりながら，やっぱり駄目だわ，と叫ぶ。ブライアンは真剣な口調で，7年前にも同じような岐路に立っていたが，君は間違った道を選んでしまった，今度こそ正しい道を選ぶんだ，と説得する。この言葉にいったんは体をブライアンに委ねたエレンだが，すぐに身を離して，駆け落ちは罪であり間違っている，辛くて暗い道でも最後の最後まで歩き通さねばならない，もし駆け落ちすれば，アイルランドについて自分が唱えてきた立派な御託と矛盾してしまう，また7年後，いいえ70年後に再会しましょう，あなたの道と私の道は二度と交差してはならないのだから，と拒絶する。最後通告を聞き届けたブライアンは，苦しみながらも別れを告げて立ち去る。

トムはゆっくりとエレンに歩み寄り，ブライアンを引き離したのは俺を助けるためだったのか，それとも絞首刑にならないように奴を助けるためだったのか，とエレンに問いただすが，彼女は答えない。トムは，エレンが逃げ出せないようにドアに施錠して酒を飲みに出かける，と言う。帰ってきたら農場への祟りとブライアンとの浮気の件で，死ぬほどひどい目に会わせてやる，と脅し文句を残して。エレンは哀しい絶望的な目で正面を見据えて，座ったまま。鍵が恐ろしい音を立てて閉められる。幕。

いささか感傷過多な悲恋劇との批判は当然あるだろうし，評論家マロウンなどはこの「作品は説得力を持たない」「最悪の形の古い「問題劇」[101]」と酷評しているほどだが，筆者にはそれほどひどい作品だとは思われない。むしろ，都会と農村，個人と家族，理念と実践などの明確な対立軸をめぐる社会劇の要素も濃い秀作である。とくにエレンの愛国心は，行動を伴う愛国心であり，たんに美辞麗句を駆使した机上の空論とは別個のものである。国家を愛するのならば，それは行動で示さねばならない，と考えるエレンは農業改善運動に挺身する。その彼女の農場にだけ災厄が襲ったのは宿命としか言いようがない不幸である。(もちろん，突出した活動家の彼女を陥れようとする何者かの謀略によって，たとえば病原菌が撒布されたという人為的策略の可能性も否定できないが，テキストにはその種の暗示はない。)言葉ではなく行動で，肥沃な土壌に注ぎ込んだ日々の労働の成果としての目に見える農作物や畜産品によって，自分の信念や理論の正しさを実証し，郷土の自然や人々への愛情を表現しようとしていたエレンには，度重なる疫病や子どもたちの死は，耐えがたくも理不尽な運命の為せる業である。運命にはなんぴとも抗うことはできない。しかしながら，エレンの生き方には，不幸な運命を我が身に引き寄せるような，自然の摂理に背くような一面があったのかもしれない。すくなくとも，エレンは自分の感情の＜自然な＞動きを無意識のうちに封殺している。序幕でブレイクがいみじくも見抜いたように，エレンはやせ我慢をして飢えていく子どものように，本能的な欲望や情感を圧殺し，偏頗で畸形な考え方に傾斜していたように思われる。彼女は意固地になって自分の当初の信念を貫こうとしている。ブライアンの求愛に応じるのが自然な感情の流れであることは承知

していながら，いまここで方針転換することは，これまでの人生の軌跡を全否定することにつながると彼女は考えるからである。この先，運命がどのように変転するかは誰にも分からない。農場経営が好転してトムとの生活に雪解けが訪れないとは断言できない。しかし，仮に光明が差したとしても，エレンは何を得るのだろうか。我執に絡み取られた人生ほど無残なものはない。

農業改革を夢みて挫折する理想化肌の若者の悲劇を描いた点では，アルスター文芸劇場創始者パーセルの『熱狂者』（*The Enthusiast*, 1906）に通じるものがこの作品にはある。1901年のアイルランド農業共同組合の設立に刺激された「熱狂者」ジェイムズ・マキンストリー（James McKinstry）は，プロテスタントとカトリックの共同農業を大胆にも提唱するのだが，両陣営の暴動に終わってしまう。『岐路』のエレンが唱導した農業改革運動は，新旧両派の連携といった施策には踏み込んでいないものの，20世紀初頭のアイルランド農業に新しい理想を体現させる試みの困難さを二つの戯曲は描いている。

③『彼の人生の教訓』（*The Lesson of His Life*, 1909）　1幕

1909年12月2日，コークのダン劇場（Dun Theatre）において地元劇団のコーク演劇協会（Cork Dramatic Society）によって初演され，好評を得た。

舞台はアイルランド南部のコーク州（Co. Cork）のある農家の室内。オドノヒュー家の未亡人（Mrs. Timothy O'Donoghue）が悲嘆に暮れて食卓に座っている。友人のジェリー・バーク（Jerry Burke）がカンティヨン巡査部長（Sergeant Cantillon）とともに現れるが，ジェリーは巡査部長と示し合わせて，まず自分が先に入って夫人に声をかける。

オドノヒュー夫人には16歳になる一人息子バーティ（Barty）がいるが，どうやらなにか犯罪をしでかして警察に追われているらしい。息子にはなにひとつ不自由な思いもさせず，きつくあたったりもしなかったのに，と嘆く夫人に，学校をサボらずにオブライエン先生からもっと分別と知識を叩き込まれていれば，こんな悲しい目には会わずに済んだだろう，気の毒だけれども，警察に逮捕されて1，2ヶ月刑務所暮らしを経験するのが本人のためになる，とジェリーは話しかけ，たとえ地区警部（District Inspector）率いる多数の警官が押し寄せても，息子を助けてやろうとはしないつもりだ，と夫人も同意する。

ジェリーは，証拠調べにカンティヨン巡査部長が来たことを夫人に知らせる。登場した巡査部長は気詰まりな様子で，職務は職務ですが，バーティは悪い子ではなく，彼の穏やかな口調に周囲の者も態度を和らげていた，と少年を弁護するが，夫人の方は息子の不祥事を恥じ，手錠を掛けられた息子の姿を他界した夫が見ずに済むのがせめてもの慰めであり，逮捕後は東方のコーク刑務所[102]（Cork gaol）に収監して，盗みが嫌になるくらいに「人生の教訓」を教わるがいい，と厳しい応対を見せる。

巡査部長は実務的な事情聴取を開始し，犯行前の少年の様子や最後に会った時の話を夫人に尋ねる。夫人の

説明によれば，少年は昨日の昼間，昼食のために自宅へ戻ってきている。勤務先の地元のダン商店でも昼食は支給されるのだが，食べ盛りの少年には始末屋のマギー・ダン（Maggie Dunne）夫人の賄いは物足りなかったらしい。コーク刑務所で病気になってお腹を空かせる息子の哀れな姿を早くも想像して心配する夫人に，刑務所では最高の食事がたっぷり提供され，病気の際には熟練看護士が対応する，と巡査部長は不安を解消しようとするが，ホームシックに駆られた少年には看護士など役立たない，と夫人は答える。

昨日の少年の挙動に関する質問には，雇用主のパトリック・ダンにこき使われていることや，虫の居所が悪い時にはそのパトリックを鼠のように右往左往させるマギーの口汚さに息子が愚痴をこぼしていたことを夫人は伝える。その情報から巡査部長は，商店のレジから10ポンド[103]を少年が盗んだのは，たんなる金目当てというよりも雇用主への仕返しが動機なのではないか，と推論する。なぜなら，第1に少年はダン夫婦に関して愚痴をこぼしており――夫人の証言にはまったくないのだが――二人に仕返ししてやると言って狂暴な様子で振舞っていたこと，第2に昨夜7時半，レジを閉めようとしたパトリックが10ポンドの紛失を発見し，少年を問いただしたところ，少年は無言でその場から逃走した，という完璧な状況証拠が揃っているからである。

事件発生から一夜が経過しており，逃走した息子はさらに殺人とかの凶悪犯罪に走るのではと心配する夫人に，警察を欺けるほど頭の良くない子だからそれほど遠くに行ってはいないだろう，と巡査部長は推測する。バーティ少年は商店の裏口から森のある西方向に逃走したが，森の向こう側で終日働いていた男の証言では，誰も森から出てこなかったという。デブのパトリックが途中まで懸命に追いかけたが，細い鞭のようにガリガリの悪ガキに叶うわけもなく，あいにく昨日は巡査部長もバリニーン（Ballineen）の小治安裁判（Petty Sessions）に出廷証言しており，署に帰ったのは夜更けだった。

夫のいない私に悲しみと恥をもたらした馬鹿息子を，コーク中の岩をひっくり返してでも探し出して下さい，と夫人は懇願して泣きじゃくる。ジェリーは傍に腰をおろして夫人をなだめ，少年の捜索と逮捕に協力して，コーク刑務所で「人生の教訓」を学ばせるのが彼のためになる，煮え湯を浴びせるような仕打ちを母親である夫人に対してしてきた以上，強硬な態度で臨むべきだ，と諭す。

巡査部長は，可能性は低いけれど念のために外庭を巡回捜査に，ジェリーはダン商店へと，別方向に退場。

夫人は朝食の後片付けをしながら，2人目の子が生まれないのを嘆いた時期もあったが，いまでは1人でも多すぎるぐらいだ，と息子への愚痴をこぼす。

下手のドアが開き，バーティが登場。ちんちくりんの服や帽子には麦藁がついている。振り返って息子に気づいて驚く夫人に，フラーの鳩小屋で一夜を明かし，匿って貰おうと自宅に帰ってきたが，いま道端でジェリーに目撃された，と打ち明ける。夫人は応急の措置として部屋の隅に息子を連れて行き，自分の外套をすっぽりとかぶせて，戸外を捜索している巡査部長がもういなくなったかどうか，確かめに出て行く。

入れ違いにジェリーがそっと入ってきて，外套からはみ出しているバーティ少年の長靴に気がつき，近づいて小声で呼びかける。その瞬間にオドノヒュー夫人が戻って来る。ジェリーは慌てて口実を繕い，夫人がバーティの帰宅に気づいていない風であるのを探り出すと，近所のカリナン夫人（Sarah Cullinane）が話したいことがあると呼んでいた，と嘘をついて，夫人を家から出そうと試みる。用事があるのならカリナンの方から

訪ねてくればいい，と夫人は相手にせず，バーティの近くの椅子に座ろうとするジェリーを制して，自分が隅の椅子に腰を降ろす。

気まずい沈黙のあと，ジェリーは朝の爽やかな空気を吸いに戸外を散歩してはどうか，と夫人に提案し，まだ若くて器量良しの夫人がひきこもっているのは良くない，なんなら自分といっしょに散歩を楽しまないか，と誘惑する。朝のこんな時刻に連れ立って歩いているのを見られたら，再婚する気かと噂が立つわよ，夫人が脅しても，ジェリーは譲らず，先に夫人が出かけて十字路で待っていてくれれば，数分後に遅れて自分も落ち合うという方法で，偶然の出会いのように傍目には装える，と再提案する。夫人はこの申し出を受け入れかかるが，自分のいない間にジェリーが家捜しすることを恐れて，先にジェリーが出かけて自分は後から行く，と断る。ジェリーも，自分はこの家の物にはなにひとつ手を触れない，と頑張る。

巡査部長が戻る。庭には少年の足がかりはなにも見つからなかったから，家の中を調べてから辞去する，と申し出る。夫人は，家の中のことを隅々まで分かっているのは自分だけだから，自分が調べると言い，ジェリーは巡査の意向に沿うように自分が代わって家捜しをする，と提案する。巡査は納得しかけるが，少年の長靴が目にとまり，はっと驚く。巡査は息子が縛り首になっても構わない，と夫人が憤懣やるかたない様子であるのを聞き出し，自分ひとりで家捜しをするから，と夫人とジェリーに外へ出るように命じる。

3人はそれぞれ，家捜しは自分が担当すると言い張るが，ジェリーが思わず，こんな「殺風景でしがない家（なにもないちっぽけな家）」（A plain little house）と口を滑らした言葉尻をとらえて，ジェリーがダンマンウェイの救貧院（Workhouse in Dunmanway）生まれのくせに，と夫人は当てこする。ジェリーは腹を立て，実父はダンマンウェイで店を経営している，と反論するが，夫人も後には引かない。巡査部長は喧嘩なら外でやるように二人に促し，もし公務執行を妨害するならばそれは法律違反である，として自分独りで家捜しに着手すると宣言する。しかし夫人は，捜索令状なしの捜索こそ違反であると鋭く指摘して，強行侵入，暴行や虐待で訴えるわよ，と巡査部長相手に声を張り上げる。ジェリーはそれなら自分が留守番をするから，捜査令状請求に治安判事のもとへ二人して行けばいい，と勧めるが，夫人はジェリーに対しても同様の訴えを起こすと威嚇する。

裏口が開いて，ずんぐりとして赤らんだ肌のパトリック・ダンが駆け込んでくる。彼は，例の10ポンドの金を何の断りも言わずにとったのは実は自分の女房であり，バンドン（Bandon）の町で帽子や服を買い込んで帰宅したのでそのことが分かった，と打ち明ける。それを聞いて，思わずしゃがみこむ夫人。濡れ衣を着せられた無実のバーティが逃走犯のように山中を放浪し，悲しみの余りアメリカへ渡ったり，自殺をしはしないか，心配だとパトリックは続けるが，警察がちゃんと追跡中，と巡査部長は威張って答える。警察は迷子の雌牛も探し出せないくせに，とパトリックが挑発するので，巡査部長は部屋の隅まで歩いて行き，外套の下に隠れていたバーティを引きずり出して，立たせる。彼は怯えた表情で巡査とパトリックを交互に見つめる。

隅に隠れているとは夢にも思わなかったでしょうな，と巡査部長が夫人に切り出すと，足を隠してやるチャンスがあったらあなたこそ分からなかったでしょうね，と息子の存在を熟知していたことを暴露し，巡査部長にしろジェリーにしろ，なぜ気づかないふりをして嘘をついていたのか，と憤慨する。嘘つきは夫人も同じで

あり，犯人蔵匿(ぞうとく)による公務執行妨害で訴追する，と巡査部長が責めると，巡査部長の方こそ犯人隠避行為で訴追される，と夫人は逆襲に出る。夫人の面前で手錠を掛けるのに忍びなかった温情だと，巡査部長は言い訳する。

夫人の鉾先はジェリーにも向けられ，一緒に散歩する誘惑に応じそうになったのは，ジェリーを家から追い払う方法に困ったからにすぎず，そんな笑い者になるような真似はする訳がない，ダンマンウェイ救貧院のご同輩ではないから，と侮辱する。ジェリーも，死んだ亭主ティモシーの後釜に座ろうなんて誰も考えやしない，あんたと関わりを持ったのが残念だ，と激しくやり返す。

両者をなだめようとパトリックが仲裁に入り，バーティのことをめいめいが見逃してやろうとしてついた善意の＜嘘も方便＞だから，なにも恥じることはない，と取り成すと，オドノヒュー夫人は，元はといえば，現金紛失の件を口に出来ないほど，女房の尻に敷かれているパトリックとドケチの女房のせいでこんな騒動が起きたのだ，と食ってかかる。

パトリックはバーティに，なぜ金を盗んだ犯人ではないと言わずに逃走したのか，と尋ねると，彼はパトリックの問いただし方が怖かったから，と答える。なぜ戻ってきた時に無実だと言わなかったのかと，夫人が尋ねると，信じて貰えないだろうと思ったから，と答える。

少年のあまりの意気地のなさ，優柔不断さに巡査部長，ジェリー，パトリック，夫人は堪忍袋の緒を切り，口々に少年を罵倒し始めるので，犯人と思われていた時の方がみんな優しかった，これなら金を盗んだのが自分だった方がいい，と彼は大泣きする。4人は少年を車座に取り囲んでなおも執拗に責め立て，少年は激しく嗚咽する。幕。

陰鬱な前2作と比べれば愉快な内容になっているが，それでもやはりシニカルな結末を迎えている。この後味の苦さは，筆者にはエイクボーン(Alan Ayckbourn, 1939-)の喜劇を思わせる。窃盗犯の少年を救いたいと願う母親，隣人，警官の3者の思惑がそれぞれに交差・牽制し合い，さながら（蛇・蛙・なめくじの）三竦(さんすく)み状態がもたらす中盤の滑稽な緊張関係は，観客にとっては三重にも楽しめる劇的アイロニーでもあり，秀抜である。頭隠して＜靴＞隠さず，の間抜けな少年の行為はいかにも「ベタな」設定にも思えるが，終盤の彼の告白に見える，拍子抜けするほど情けない弁明の信憑性をかえって高める仕掛けになっている。(雇い主の余りの剣幕に無実の主張ができないほど怯えた，とか，犯人だと決めつけて追われている以上，否定しても信じては貰えないだろう，という気弱な諦めは，16歳の年齢を考えれば，同情できなくもないにせよ。)

少年の冤罪が判明した後の展開は，人間心理の機微を見事に表している。濡れ衣をきせられた少年を慰め，あらぬ誤解をして済まなかった，と詫びるのではなく，それまでの親切心や善意を仇で返されたような成り行きに対する当惑や失望感・徒労感が

やがて憎悪に形を変え，堰を切ったように一挙に弱者の少年に向かう様は，苛める者の心理を，薄ら寒さを覚えるほど冷酷に描き出している。

この作品では，‘hard’（「厳格な」）と‘soft’（「柔弱（にゅうじゃく）な」）が対比的に用いられている。学校教師オブライエンは誰もが認める非常に「厳しい」先生であり，その教えに背いて盗みを働いたバーティは牢屋に入れられるべきだと説く隣人ジェリーも「厳しい」人と評されている。一方，巡査部長は「口調の柔らかな」（soft-spoken）バーティに好感を示し，実の母親なら息子に「優しく」してやるのでは期待し，母親の前で息子に手錠を掛けるに忍びない，「なんとも情にもろい」（how soft）人物として描かれている。すなわち，この芝居では，厳格さは恐ろしいながらも権威ある秩序として肯定され，温情は甘やかしや優柔不断として否定されている。標題にも採られた「彼の人生の教訓」を監獄で味わうべきだという台詞は母親とジェリーによって１度ずつ発せられるが，温情派の巡査部長がこの懲戒的台詞を使っていないのも示唆的である。

この作品は処女作『クランシーの家名』と好個の比較対象になるだろう。共通点としては(i)父親と死別[104]の母子家庭，(ii)導入部での第三者２名の来訪，(iii)一人息子の犯行(疑惑)，(iv)世間体に執着する母親，(v)終盤のどんでん返し，などが容易に指摘できる。しかしながら，息子の生命よりも家名を守ることを重視する『クランシーの家名』ほどの深刻な陰鬱さは，『彼の人生の教訓』には込められていない。殺人と窃盗(嫌疑)の重みの違いはあるにせよ，息子が帰ってきたときにすぐに匿おうとするオドノヒュー夫人の行動は，母親らしい本能的衝動であり，後者にはまだまだ救いがあるからである。

(3) レノックス・ロビンソンの初期演劇のまとめ

以上，わずか３作品のみの考察であるが，ロビンソンがコーク時代に書いた初期作品の特色を簡単に指摘しておこう。３作品の中心的人物はいずれも女性であり，クランシー夫人とオドノヒュー夫人は世間体への強いこだわりの点で共通点がある。どちらも夫の死後，女手一つで一人息子を育ててきた苦労人であり，それだけにその息子が殺人犯，窃盗犯と聞かされたときの驚愕と失望は大きい。世間様から後ろ指を指されないようにと刻苦奮励してきた二人の未亡人は，自分たちが世間にどう見られているかに価値基準を置き，「恥さらし」とならないよう，本来の生き方や欲望を強く自制している。同様のことは，形を変えて，『岐路』の若いエレンの生き方にも窺える。農業改善運動に自分だけが挫折したことを彼女は受け入れることができない。暴君と化した夫を捨ててかつての男友達と逃避行することを世間がどう見るか，農村運動に着手しながら都会へ逃げ出す節操のなさを世間がどう非難するか，と想像し，目の前に

ある幸福さえ拒絶してしまう我執に彼女はとらわれている。アイルランド南部のコーク州という農村社会に根付く保守的風土を背景に，家名の尊厳や愛国心，社会的評判，人生への信念などの問題をロビンソンの初期3作品は鋭く追及している。マクナマラ演劇には諧謔に満ちた哄笑が含まれているが，『彼の人生の教訓』の中盤を除けば，ロビンソン3作品に笑いは希薄である。陰鬱な気候の北部・ベルファースト出身の作家マクナマラが笑いをふんだんにちりばめ，温和な気候の南部・コーク出身作家ロビンソンの作風が陰鬱なほど深刻なのも奇妙な話だが，案外に作家というものは気候に逆らうような作風になるのかも知れない。

テキスト

マクナマラ5作品に関しては，以下の雑誌特集号に所収のテキストを使用した。
The Journal of Irish Literature, Vol. XVII, Nos. 2 & 3, May-September 1988.
また，マクナマラの作品③については以下のテキストも参照した。
Hugh Odling-Smee(ed.), *'Its Own Way of Things': A Celebration of the Ulster Literary Theatre* (Belfast: Lagan Press/Linen Hall Library, 2004).

ロビンソン作品に関しては以下のテキストを使用した。
Lennox Robinson, *Two Plays: Harvest: The Clancy Name* (Dublin: Maunsel & Company, 1911).
S. L. Robinson, *The Cross-roads: a play in a prologue and two acts* (Dublin: Maunsel & Co., n.d. [1909]).
Richard Burnham and Robert Hogan(eds.), *Lost Plays of the Irish Renaissance Volume III : The Cork Dramatic Society* (Newark, Del: Proscenium Press, 1984).

謝辞

今回に限ったことではありませんが，九州産業大学図書館のレファレンス業務担当のみなさまがたには大変にお世話になりました。とくに，マクナマラの雑誌特集号のBLからの取り寄せでは，宮丸由美子さんに，ロビンソンのテキストの調達では紫垣美佐緒さんにお世話になりました。感謝申し上げます。

註

1　古いところでは矢野禾積（かづみ）『アイルランド文藝復興』（弘文堂書房，1940年）にはマクナマラやロビンソンの言及は見当たらない。アーネスト・ボイド（向山泰子　訳）『アイルランドの文藝復興』（新樹社，1973年）ではそれぞれ数行程度の言及（p.419, p.405.）がある。アンドリュー・イー・マローン（久保田重芳訳）『アイルランドの演劇』（箕面市：創文社，1989年）では，マクナマラの『沼地にかかる靄』が文藝復興の「運動全体を戯画化しようとした」（p.323.）という意図に触れ，ロビンソンの初期2作については比

較的紙幅を割いて解説している。同様に，杉山寿美子『アベイ・シアター　1904－2004　アイルランド演劇運動』（研究社，2004年）でも，アビー劇場の動きが叙述の中心になるために，アイルランド文藝復興の「運動が産み落とした申し子」(p.251.）としてアルスター文芸劇場について言及されているのみで，マクナマラは取り上げられていないが，ロビンソンの２作品は論じられている。

2 Robert Welch (ed.), *The Oxford Companion to Irish Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1996); Rutherford Mayne, 'Gerald MacNamara', in *Dublin Magazine*, 12, New Series, 1938, p.53.では生年を1866年と記述しているが，日付まで明記している点で信頼度の高いRobert Hogan(ed.), *Dictionary of Irish Literature: Revised and Expanded Edition M-Z* (Westport, Connecticut; London: Greenwood Press, 1996) の記載を採用した。

3 Mary Burgess, 'Belfast carnivalesque: the satires of Gerald MacNamara,' in Nicholas Allen and Aaron Kelly (eds.), *The Cities of Belfast* (Dublin: Four Courts Press, 2003), p.79.

4 Karen Vandevelde, 'An open national identity: Rutherford Mayne, Gerald MacNamara, and the plays of the Ulster Literary Theatre,' in *Eire-Ireland: Journal of Irish Studies*, Spring-Summer, 2004,; on-line edition:
http://www.findarticles.com/p/articles/mi_m0FKX/is_1-2_39/ai_n6150062/pg_6

5 「スーザン」の方が日本人の耳に通りがよいことは承知しているが，辞書の発音記号に従えばSusanneは「スザン」，Susanなら「スーザン・スーズン」という発音になるとのこと。

6 この他に，ラジオ放送劇として『常識』(*Horse Sense*) が1925年４月８日にベルファーストで放送されたことが『タイムズ』紙などで確認できるという。登場人物は「馬」(The Horse)「男」(The Man)「警官」(The Policeman) の３者で，「男」の役をマクナマラ本人が演じている。「いささか空想的な風刺劇」だったらしい。以下のサイト（2006年11月19日取得）の情報による。http://www.kent.ac.ul/sdfva/invisibleplay/Names/ayrecharlesk.html

7 パークヒルの経歴については建築技師だったこと以外，ほとんど知られていない。アルスター文芸劇場に４つの作品―『改革者たち』(*The Reformers*, 1905)，『熱狂者』(*The Enthusiast*, 1906)，『異教徒』(*The Pagan*, 1906)，『友達(ダチ)は割り勘』(*Cobbers Go Halves*, 1931) ―を提供してはいるが，1907年以降は運動から離れて南洋で暮らしていたようで，生没年すら不詳である。

8 Robert Hogan and James Kilroy, *Laying the Foundations 1902-1904: The Modern Irish Drama, a documentary history* (Dublin: Dolmen Press, 1976), p.122.

9 ベルファーストの詩人で，アビー劇場の俳優でもあった。演劇作品を中心とする出版社マウンセル社（Maunsel & Company, 1905-23）の創設メンバーの一員。マウンセルの名前は，2000ポンドを出資したJoseph Maunsel Honeにちなむ。

10 わが国を「豊葦原の中つ国」「豊葦原の瑞穂の国」「豊秋津洲(とよあきつしま)」などと呼ぶように，アイルランドを詩的に呼ぶ美称・古称には「バンバ」(Banba)「フォードラ」(Fodla)「エール」(Eire)がある。バンバは，Tuatha De Danannの女王である三神一体の女神の２番目の名前で，フォードラが１番目，３番目はエリウ(Eriu)である。

11 Margaret Kelleher & Philip O'Leary (eds.), *The Cambridge History of Irish Literature Volume 2: 1890-2000* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), p.204.

12 的場淳子「アイルランドの演劇概観」，松村賢一（編）『アイルランド文学小事典』（研究社，1999年），p. 98.

13 W. G. Fay & Catherine Carswell, *The Fays of the Abbey Theatre: An Autobiographical Record* (New York: Harcourt, Brace and Company, 1935), p.192.

14 1907年当時はスケート場（のちに病院に改装）で，会場としては広すぎると思われたため，初演日は舞台を中央に設置した。しかし，観客の入りは良く，翌公演では少し奥にずらし，その後はホールの端に舞台を移すほどの盛況だったという。*The Journal of Irish Literature*, pp.21-22.

15 Sam Hanna Bell, *The Theatre in Ulster* (Totowa, New Jersey: Rowman and Littlefield, 1972), pp. 29-39.

16 ピーター（Peter）にあたるオランダ語は'Piet'で，普通名詞には「男，奴」（fellow, chap）の意味がある。『講談社　オランダ語辞典』（講談社，1994/95年）を参照。

17 「アムステルダム」の末尾の「ダム」と考えられるが，ジョウゼフ卿が「あなたの言葉遣いは衝撃的です」と反応しているところをみると，同音異綴の「忌まわしい」（damn [ed]），あるいは卑語としての「女，メス」（dam）が響いているのかも知れない。

18 1689年4月18日から7月31日まで105日間に渡って続いたジェイムズ軍による「デリー攻囲戦」（siege of Derry）では，城門内部に3万人の難民と7千人の兵士が兵糧攻めに会い，半数近くの1万5千人が病気や栄養失調で死亡したとされる。

19 「ケリー中尉」であれば，ウィンドミル・ヒル（Windmill Hill）で戦死したジェイムズ軍の兵士がいるとのこと。*The Journal of Irish Literature*, p.54.

20 英国の主教Thomas Percy（1729-1811）の『古英詩拾遺』*Reliques of Ancient English Poetry*（1765）に所収のイングランドの古いバラッド。父親の死後，遺産相続人の幼い男の子と女の子が，強欲なおじに雇われた男によって森の中に置き去りにされて死に，おじも悪行の報いでのちに獄死するという話で，パントマイムでお馴染みである。

21 1715年，ジャコバイトによる15年反乱の直後に制定された法律で，12人以上の不穏な集会に対して国王布告を読み上げることで解散を命じたもの。

22 テキストの話者表示はマッキャン（MC CANN）で，第1幕と統一がとれているが，なぜだかこの第4幕のト書きにおいて2度Demという名前が用いられている。さしあたり，Dem McCannなる人名だと理解しておく。

23 まるでクリケット競技並みの点数だが，史実の軍勢比（ウィリアム軍36,000，ジェイムズ軍25,000）や戦歿者比（ウィリアム軍約500，ジェイムズ軍約1,000）よりも拮抗したスコアと，ジェイムズ2世がフランスへ敗走せずに戦場に残っていた結末は，どちらかと言えばジェイムズ側に同情的な評価であろう。

24 S. J. Connolly (ed.), *The Oxford Companion to Irish History* (Oxford: Oxford University Press, 1998), p.415.

25 佐久間康夫・中野葉子・太田雅孝『概説　イギリス文化史』（京都：ミネルヴァ書房，2002・2003年），p. 37.

26 Jack Santino, *Signs of War and Peace: Social Conflict and the Use of Public Symbols in Northern Ireland* (New York: Palgrave, 2001), p.51.

27 この標題は“the mist that is on the bog”の強調表現のように思われるのだが，アングロ・アイリッシュ語法では「after ～ing の形と共にdo (does) beという形で完了時制を表わ」し，does beという表現に対応するアイルランド語の「bionnは現在習慣時制3人称単数形で」「このdoesは英語における強調用法の*do*の変化形でなく」「現在完了進行形の意味である」という解説が後記の研究書にある。従って，強調ではなく完了の意味合いをこめて「沼地にすっかりかかってしまっている霞」というニュアンスになるのだろう。――三橋敦子・田代幸造・前田真利子・船橋茂那子・醍醐文子『アングリ・アイリッシュ語法　解明へのアプローチ』（大学書林，1986年），p.209.

28 Claudeの女性形で，ウェールズ語風の名前とされる。

29 Ceciliaの愛称。

30 筆者の個人的好みで言うと，『男はつらいよ』の車寅次郎，人呼んで「フーテンの寅」さんの自由奔放な語感が気に入っていて，'tramp'には「瘋癲（フウテン）」の訳語をあてたいところ。

31 1907年の初演時に劇場で暴動を招いたシングの『西の国の伊達男』（*The Playboy of the Western World*）を諷刺した標題であることは言うまでもない。

32 この戯曲でマクナマラが諷刺の間接的対象としたシングは，モリーとの結婚に備えて1908年２月２日にラスマインズのヨーク通り47番地に部屋を借りている。ラスマインズは筆者が留学生時代に暮したことのある閑静な住宅地である。

33 この作品はシングや彼の戯曲を直接に諷刺しているのではなく，シングを安直に模倣してシング流文体で書こうとした多くの追随者たちを諷刺するものであることは押さえておかねばならない。Christopher Fitz-Simon, *The Irish Theatre* (London: Thames and Hudson, 1983), p.159.

34 Kathleen Danaher, "Preface", *The Journal of Irish Literature*, Vol. XVII, pp.12-13.

35 1895年12月16日にウォーデン（J.F.Warden）によって創設され，客席数1050席（1983年）ないし1001席（1998年）を誇るヴィクトリア様式の建築物。アルスター文芸劇場が本拠地とするにはあまりに壮麗で大規模すぎる劇場であり，おそらく施設使用料も本来なら相当に高額なはず。それでもアルスター文芸劇場の作品は1910年以降（1914年と1920年代前半を除き）1934年の終焉までほとんどの初演（全部で32作品）がこのロイヤル・オペラ・ハウスで行なわれた。それは，『スザンと君主たち』の大成功の煽りを受けて観客が激減したオペラ・ハウスの支配人が，この芝居を１週間だけオペラ・ハウスで再演することを依頼し，その縁でその後も利用できるようになったのだという。

36 ダウン州の港町。鰊（にしん）や車海老の水揚げで有名。アイルランド語（Ard Glas）で「緑が丘」を意味する。

37 敵を威嚇するために「細葉大青（ホソバタイセイ）」（woad）という染料で体を青く塗る習慣がローマ支配以前のイングランドにはあったが，赤と白を追加したのはこの３色の英国国旗をもじったマクナマラのジョークだろう。現代のサッカーのサポーターにはありがちなボディ・ペインティングだろうが。

38 英訳では"A hundred thousand welcomes"，すなわち「１万回の歓迎」の意味。

39 コナンという名の人物は，極悪人から改心してフィンに仕える忠実な部下となったコナン・マク・リアと，禿げ頭の巨漢で武芸にうとく臆病者のモーナー一族のコナン・マウルがいる。ここでのコナンは後者である。詳しくは――ローズマリー・サトクリフ（金原瑞人（かねはらみずひと）　訳）『ケルト神話　黄金の騎士フィン・マックール』（ほるぷ出版，2003・2004年），pp.40-43.，およびシブサワ・コウ（編）『爆笑　ケルト神話』（横浜：光栄，1996年），p.132.を参照。

40 フォモール族（Formorians）の戦士。

41 散文物語の『クーリーの牛追い』（*Tain Bo Cuainge*, or *The Cattle Raid of Cooley*）に登場するアルスター王で，クーフリンの養い親の一人。彼は約束を守り，クーフリンとは対戦しなかった。メイヴ王女と水浴中，メイヴの夫アリル（Ailill）によって殺害される。

42 グラーニアはフィンの妻。もっとも，フィンと結ばれる前にはディアムードとの逃避行があったのだが。グラーニアもフィンも芝居の後半は台詞がめっきり少なくなり，二人が夫婦であることを実感させるようなやりとりもない。

43 ダウン州とアーマー州の境界（区分としてはダウン州に属す）にある地名で，1690年のボインの戦いに行軍する前にウィリアム３世の軍勢が集結し，出陣前の訓練に励んだ地である。ウィリアム３世が野営したとされる巨大な栗の木（周囲７m超）がこんにちも残っている。2001年の人口調査ではわずかに219人の住民しかいないが，毎年７月13日にオレンジ団関連組織の「王立黒騎士団」（Royal Black Preceptory）のメンバーによってボインの戦いを再現する模擬戦（Sham Fight）が実施され，多くの観光客を引き付

けている。(http://en.wikipedia.org/wiki/Scarva) [2006/10/22取得]

44 地図で確認する限りでは，ポータダウン駅 (Portadown) とダンドーク (Dundalk) 駅の間にスカーヴァの村があり，線路は真上を通っている。しかし，現在スカーヴァ駅はないようで，トンプソンが言うように臨時列車が運行したとすれば，駅でもないところで降車させたのだろうか。

45 英国の児童文学者サトクリフの物語では，フィアナ騎士団入団試験要領は次の通り。①地面の穴に下半身を埋めた状態で，槍を投げる９人の男の攻撃を盾とハシバミの枝のみで無傷でかわすこと。②毛髪を20束の三つ編みにくくり，森の中を追っ手から捕まらずに無傷で逃げ，三つ編みも整然としていること。③自分の身長と同じ高さをハイ・ジャンプできる。④膝の高さをリンボーダンス風にくぐる。⑤走る速度を落とさずに，足の茨の刺を抜く。⑥『詩篇』12冊，エリン（アイルランド）史書や物語本20点以上の暗記。——以上のような文武両道の過酷な試験が課されるのだという。——『ケルト神話　黄金の騎士フィン・マックール』，pp.46-47.

46 冒頭の略歴にも記したように，マクナマラ自身は異なる宗派間の結婚によって生まれている。プロテスタント，カトリック双方を諷刺し，どちらにも偏らない目配りが出来たのは，こうした家庭背景ゆえかも知れない。マクナマラ家そのものが，新旧両派の和睦の象徴であったといえる。

47 キリスト教化される前の伝統的なアイルランド社会の日常生活や政治を規定した法律で，紀元600－900年頃の古アイルランド語時代に成文化された。「ブレホン」(Brehon) はアイルランド語で「裁判官」を意味するbreitheamh (古形brithem) の英語表記。1171年のノルマン人の侵攻以降は実効力を失い，1650年頃からイングランド法に取って代わられた。刑罰を科する刑法的な性格は弱く，むしろ損害賠償，財産・相続・契約などに関する諸権利・義務，主従関係などを規定した民法的な性格の法律である。女性の妻としての地位は基本的には夫に従属するものであったが，ブレホン法によって，当時の他の欧州諸国と比べれば，自由や独立性，財産権が保証された。例えば，家財の処分に関しては夫婦双方の合意を必要とし，夫の側に性的不能や同性愛などの事由があれば離婚が可能で，財産分与は家計への貢献度によって行なわれたし，傷の残るような暴力を夫から振るわれた場合にも損害賠償と離婚請求ができた。しかしながら，裁判において女性が証人として立つことは，女性は偏見に満ち不正直との理由で，通常は認められなかった。テキストにおいて，ブレホン法に則って裁きを行なう，と宣言した上王が，王女とはいえ，女性のメイヴに真っ先に証言を求めるのは，従ってブレホン法では異例のことであり，マクナマラが諧謔をこめて意図的に設けたものと思われる。ブレホン法は極刑を回避する傾向があり，トンプソンが火炙りに処されるのも違和感がある。この項は以下のサイト (2006年11月19日取得) を参照した。http://en.wikipedia.org/wiki/Brehon_Laws

48 アンガスが夢の中で出会った美しい乙女の居場所について，アンガスに助言したマンスター王。幻の乙女はベル・ドラゴン（竜の口）という湖で発見され，ボヴはその乙女はコナハトのエタルの娘カーだと教えたという。『爆笑　ケルト神話』，p.14.

49 「善き神」を意味し，アイルランドの部族の父なる神，ダーナ神族の首長。ボイン川の女神ボアンの連れ合いとされる。巨大な棍棒（片方の端で命を奪い，他方で甦らせる）と大釜（たえず食物がある）を持つ。癒し・智慧・金工の女神ブリードや，テキストでこの質問を発している愛の神アンガスの父親でもある。[ミランダ・J・グリーン（井村君江　監訳）『ケルト神話・伝説事典』(東京書籍，2006年)，pp.151-152.；原著はMiranda J. Green, *Dictionary of Celtic Myth and Legend* (London: Thames and Hudson, 1992)]

50 ノイシュ (Naoise) とも表記される。ウシュネの３人息子の一人で，黒髪・白肌・赤頬を持ち，デアドラに言い寄られて駆け落ちするが，やがて姦計にあって兄弟皆殺しの目に会う。『ケルト神話・伝説事典』，pp.191-192.

51 ベルファーストはリネン（亜麻布）産業が盛んな土地であり，リネン製造工場に勤務する労働者であることが分かる。

52 警官を'peeler'と呼ぶのは，英国の警察制度を整備したロバート・ピール卿（Sir Robert Peel, 1788-1850）にちなむ命名で，'bobby'という別の呼び方もロバートの愛称に由来する。

53 プロテスタント側の愛唱歌で，北アイルランド，ダウン州にある険しい峠道を指す。1848年７月12日に，カトリック系住民の多い近傍のカースルウェラン（Castlewellan）の町をオレンジ団員たちが行進しようとしたのに対して，カトリック系のリボンメンが反対集会を開いた。このときオレンジ団員が襲撃を受けて数人が殺された，という説もあれば，この年は行進を回避してカトリック側から臆病を揶揄されたという説もある。いずれにせよ，翌年の1849年に，厳戒警備にも関わらず，ここで両陣営の衝突が起き，民家が焼き討ちにあうなどの惨事を招いた。これが「ドリーの丘の戦い」と呼ばれる事件で，翌1850年に「党派行進法」（Party Processions Act）が施行され，プロテスタント系の集会が規制されたが，1872年に撤廃された。この記述に関しては以下の２つのサイト（2006年10月22日取得）に負う。
http://www.vincentpeters.nl/triskelle/lyrics/dollysbrae01.php?index＝080.010.020.0…
http://www.musicanet.org/robokopp/eire/dollbrae.htm

54 『ケルト神話・伝説事典』，p.167.

55 この他にもリアの子どもたちが白鳥の姿で過ごした300年×３，ベオウルフの龍が眠っていた300年，リーバン（Liban）が人魚として海中で暮した300年など，長い時間を表わすのに300年がよく使われるが，これはもしかすると，彗星の軌道によって300年ごとに大事件が引き起こされていたからかも知れないという仮説が化学エンジニアと年輪年代学者による次の共著において出されている。[Patrick McCafferty and Mike Baille, *The Celtic Gods: Comets in Irish Mythology* (Stroud, Gloucestershire [UK]: Tempus, 2005), p.123.

56 「幸多い来世を夢みた民族は数多いが，ケルト民族ほど魔術的美の魅惑でそれを粉飾した民族は他に例がないし，また彼らほど強い執着心をそこに示した民族もほかにはない。」「ケルト民族の異界は…幸せな者の島々，波の下の国，空洞のある丘，霧の彼方の国，あるいはこれらを種々に複合した国，というような諸種の形態をとる。したがって名称も多岐にわたり，マグ・モール（大平原），マグ・メル（歓喜の平原），ティール・ナ・ノーグ（青春の国），アンウヴン（深淵），ティール・ナム・ベーオ（生命（いのち）の国）などのような呼称がある。死すべき者は，あるいは神に召され，あるいは厳（いか）めしい異界の住人に召されて，この国に到る。」――ハワード・ロリン・パッチ（黒瀬保・池上忠弘・小田卓爾・迫和子　訳）『異界―中世ヨーロッパの夢と幻想』（三省堂，1983年），p.30.

57 松村賢一「巨人，この異様なるもの」，中央大学人文科学研究所（編）『ケルト　口承文化の水脈』（中央大学出版部，2006年），pp.13-15.

58 ベルンハルト・マイヤー（鶴岡真弓　監修，平島直一郎　訳）『ケルト事典』（創元社，2001年），p.17.

59 上掲書，p.186.

60 上掲書，p.17.

61 佐藤成基（しげき）「ウォーカー・コンナー（ママ）『エスノナショナリズム』」，大澤真幸（編）『ナショナリズム論の名著50』（平凡社，2002年），p.457.

62 やや古い統計だが，1971年調査でアイルランド語を「話せる」人口は79万人，日常的にアイルランド語を話す人口は12万人，このうち「ゲールタハト」人口２万人のうち17,000人がアイルランド語使用者とされる。[アンリエット・ヴァルテール（平野和彦　訳）『西欧言語の歴史』（藤原書店，2006年），pp.97-98.　原著はHenriette Walter, *L'Aventure des langues en Occident: Leur origine, leur histoire, leur geographie* (Paris: Robert Laffont, 1994)]　2002年の国勢調査では「ゲールタハト」全域でアイルランド語を

使える人は約6万人で，うち半数の3万人が母語としての使用者と推定される。アイルランド語が「話せる」と答えた人口は160万人に達している。[「憲法考　くにとひと――アイルランド　母語復活」，『西日本新聞』，2006年9月9日（夕刊）]

63 拙著「アイルランド語は呪われているか――ダグラス・ハイド『泡(あぶく)の破裂』論」，『国際文化学部紀要』第23号，2002年12月，pp.43-54.

64 *The Theatre in Ulster*, p.43.

65 Ophelia Byrne (ed.), *State of Play ? The Theatre and Cultural Identity in 20th Century Ulster* (Belfast: The Linen Hall Library, 2001), p.19.

66 1873年8月下旬から9月上旬の2週間，ベルファーストとダブリンを家族旅行している。
R. Kent Rasmussen, *Mark Twain A to Z: The Essential Reference to His Life and Writings* (New York: Oxford University Press, 1995), p.247.

67 マーク・トゥウェイン（小倉多加志　訳）『アーサー王宮廷のヤンキー』（ハヤカワ文庫，1976・80年），p.357.

68 鈴木道雄「マーク・トウェイン――アメリカ的知性」，マーク・トウェイン（龍口(たつのくち)直太郎 訳）『アーサー王宮廷のヤンキー』（創元推理文庫，1976・93年），p.557.

69 Rutherford Mayne, 'Gerald MacNamara', *The Dublin Magazine*, p.55.

70 デリー攻囲戦の功績を称えてデリー主教（Bishop of Derry）に任命されるが，ボインの戦いで戦死している。Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography* (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), p.437.

71 北アイルランド自治政府再開交渉の期限とされていた2006年11月24日は，ペイズリー民主ユニオニスト党首の入閣拒絶によって頓挫して経過したが，この日ストーモント議会に乱入を試み，ジェリー・アダムズやマーティン・マギネスらシン・フェイン党指導者の殺人未遂罪で逮捕された51歳のプロテスタント過激派マイケル・ストウン（Michael Stone）は，アダムズらを戦犯呼ばわりし，「アルスターは売り物ではない！ 降参はせんぞ！（No Surrender!）」と叫んだという。（*The Japan Times*, November 27, 2006, p.6.）

72 霊が憑依した形で口を借りる日本の「口寄せ」「神子(みこ)寄せ」とは異なり，彼は自分の意識を維持したまま，霊と対等に話をしているらしい。

73 ここでの意味はおそらく「（サルサ根のエキスで味付けをした）炭酸飲料」のこと。

74 ベルファーストのダンケアン地区選出の国会議員カースン（Edward Carson）を示唆する。

75 ディオン・ブーシコー（Dion Lardner Boucicault, 1820/22-90）の戯曲『放浪者(シャフラーン)』（*The Shaughraun*, 1874）に登場する警察の邪悪な手先であり，「愛国者」とは呼べない人物。

76 これもブーシコーの戯曲『美少女』（*The Coleen Bawn*, 1860）に登場する傴僂(せむし)の召使であり，「愛国者」ではない。

77 もちろん，③『常若(ティル・ナ・ノウグ)の国のトンプソン』の主人公を指すものと考えられる。

78 鏡を利用した幻灯装置により舞台上に人物の姿を消したり，現したりしたするマジック。実際の考案者は英国の技術者・発明家ダークス（Henry Dircks, 1806-73）だが，英国の発明家ペパー（John Henry Pepper, 1821-1900）が1862年にこれをショーにして実演し，フランスやアメリカ巡業をするほどの人気を呼んだ。

79 英国の殉教史研究家フォックス（John Foxe, 1516-87）の著書*History of the Acts and Monuments of the Church*（1563）の異名として*Foxe's Book of Martyrs*が一般に用いられた。メアリー・チューダー（Mary Tudor, 1496-1533）治世下のロンドンのスミスフィールド（Smithfield）でプロテスタントの人々が異端として火炙りに処せられた事実などを生々しく描写し，17世紀においてはプロテスタントの若者

の間では聖書に次いで愛読された書物。

80 バリーキルベッグは明らかに地名であり，少年の名前は文脈から判断してアルバート・トンプソンであるから，辻褄の合わない返事である。なお，バリーキルベッグ出身のウィリアム・ジョンストンは，1867年7月12日に禁止された行進（2万人）を率いた罪で投獄されたが，のちに国会議員に選出され，行進を制限する法律の撤廃に尽力したという。

81 荒田茂夫「たばこ規制　加速」，『朝日新聞』2004年12月16日，p.6.

82 初出は1843年4月の週刊文芸誌『ネイション』（*The Nation*）誌で，イングラム20歳のときの投稿。1900年に『ソネットと他の詩』（*Sonnets and Other Poems*）に収録。

83 トリニティ大学の弁論術・ギリシア語教授を経て1898年には副学長，1892年には王立アイルランド学士院（RIA: Royal Irish Academy）院長の要職に就く。標題の詩に込められた感情とはうらはらに，その後アイルランド自治法に反対の立場をとったのは，年齢と職位のなせる業だろうか。

84 マクナマラも1890年代にパリで画業に励んだことがあり，この戯曲の画家ニューウェルや『スザンと君主たち』の宮廷画家ヴィルヘルム・ヴァン・トオティルには，作家の体験が投影されている。パリでは，『シラノ・ドゥ・ベルジュラック』（*Cyrano de Bergerac*, 1897）で絶賛された喜劇俳優コクラン（Benoît-Constant Coquelin, 1841-1909）に深く影響を受けた。

85 1761年にヨーマン（ジェントルマンよりは下位に属するが，年収40シリングの自由土地保有農で国会議員選出権も有した）の子弟により組織された祖国防衛団。

86 英国の劇作家・桂冠詩人ニコラス・ロウ（Nicholas Rowe, 1674-1718）の『美しき悔悟者』（*The Fair Penitent*, 1703）において，高慢な人妻カリスタ（Calista）を誘惑して，自殺に追い込む愛人で，'haughty, gallant, gay Lothario'は「女たらし」の代名詞となっている。

87 フランスが英国に侵攻する先兵として，1798年にドネゴールを攻撃するが失敗する。死刑宣告を受けたが，ナポレオンに助命される。愛国歌「緑をまとうこと」（'The Wearing of the Green'）にその名を歌い継がれている。

88 Brian Lalor (ed.), *The Encyclopaedia of Ireland* (Dublin: Gill & Macmillan, 2003), p.679.（項目執筆者はTess Maginess）

89 コークの人々の性質や訛りについて文芸評論家イーグルトンは冗談めかして次のように綴っている。「コーク生まれの人間はダブリンの名前など聞いたことがなく…自分たちの町がこの地上で唯一の都市だと信じていて…その言葉はイヤホーンで同時通訳が必要で」「自慢話ばかりが際限なく続く」［テリー・イーグルトン（小林章夫　訳）『とびきり可笑しなアイルランド百科』（筑摩書房，2002年），p.135，157.；原著はTerry Eagleton, *The Truth about the Irish* (New York: St. Marin's Griffin, 1999), p.105, p.121.］ケン・ロウチ（Ken Loach, 1936-）監督映画『麦の穂をゆらす風』（*The Wind That Shakes the Barley*, 2006）で描かれていたのは1920年代初期のコーク州であり，主人公のコーク大学医学生デイミアン（Damien）を演じたキリアン・マーフィ（Cillian Murphy, 1976-）自身，コーク生まれでコーク大学（法学部中退）で学んでいる。（映画パンフレット，シネカノン発行，2006年，p.26.）コークの自然や民家の佇まい，コーク・アクセントを知るには最適の教材でもある。

90 拙著『周縁からの挑発—現代アイルランド文学論考』（広島：溪水社，2001年），pp.176-177.

91 久保田重芳（訳）『アイルランド演劇選集』（青山社，1994年）の「訳者あとがき」において，1922年初演の*Crabbed Youth and Age*をロビンソンが「初めて書いた一幕物」（p.289）としているのは，誤解のように思われる。

92 この日は偶然にもロビンソンの兄がダブリンで結婚式を挙げる日にあたっており，コークから一家総出で出かけて二つの慶事を祝うことができたが，アビー劇場の怠慢で劇作家に招待席が用意されておらず，

一家は安い料金の二階バルコニー席から観劇したのだという。Michael J. O'Neill, *Lennox Robinson* (New York: Grosset & Dunlap, 1964), p.44.

93 *Ibid*., p.47.

94 クランシー (Clancy) という姓名はアイルランド語'Fhlannchaidh'に由来し，「赤毛の戦士」(red-haired warrior) を意味し，クレア州のソモンド (Thomond) のクランシー一族は代々，裁判官 (ブレホン) の名門だったという。Ida Grehan, *The Dictionary of Irish Family Names* (Dublin; Boulder, Colorado: Roberts Rinehart, 1997), p.54.

95 テキストの表紙はハイフン抜きで "THE CROSS ROADS" であるが，タイトル頁を含む3ヶ所でハイフンが入れられているので，ここではハイフン付きで表記する。

96 Michael J. O'Neill, *Lennox Robinson*, p.48.

97 同名の団体が実在して名誉毀損で訴えられることのないよう，念のためにダブリンの住所氏名録 (directory) で確認することを，ロビンソンはアビー劇場に手紙で打診している。

98 アイルランドを表す詩的表現で，16世紀のジェイムズ2世支持者 (ジャコバイト) の神話に関係するという。

99 先述の映画『麦の穂をゆらす風』でも，主人公デイミアンがコノリーの演説のさわりを暗誦し，「大学で弁論のときに一度その引用を使った…僕は話だけの男だった…(間) いざというときにはいつも言い訳を見つけていた」と語り，実践行動よりも理論が先行していたことを恥じる場面がある。[*The Wind That Shakes the Barley* (Ardfield, Co. Cork: Gallery Head Press, 2006), p.74.]

100 「四旬節」(Lent) の初日にあたる「灰の水曜日」(Ash Wednesday) に先立つ日曜から火曜の3日間。復活祭の43〜41日前であるから，2月から3月頃にあたる。

101 アンドリュー・イー・マローン (久保田重芳　訳)『アイルランドの演劇』，p.221.

102 直木賞作家の角田光代さんは，コークの「町のはずれにある刑務所あとの博物館」を訪ねて，女性館長から幽霊が出るという話を聞かされたという。[角田光代『恋愛旅人』(求龍堂，2001・2005年)，p.156.] 旅行案内書によると，1824年から1923年まで——戯曲の初演は1909年——実際に刑務所として使用されていたが，1923年の閉鎖後は独特な音響効果のためにラジオ局として使われた時期もあり，現在1階は蠟人形の囚人を配した独房見学ができ，2，3階にはラジオの歴史や骨董ラジオを展示する「コーク刑務所&ラジオ博物館」になっているそうである。[『地球の歩き方　A05　アイルランド　2006〜2007年版』(ダイヤモンド・ビッグ社，2005年)，p.137.]

103 B.R.ミッチェルの『イギリス歴史統計』(原書房，1995年) 所載の＜イングランド・ウェールズにおける名目年間賃金表＞ (p.153.) によれば，1911年には，農業労働者46.98ポンド，一般労働者74.04ポンド，上級公務員161.61ポンド，教員176.15ポンド等となっている。＜1909年のアイルランドの商店主＞であるダンの年収を1911年のイングランド・ウェールズの上級公務員並みと仮定すると，紛失した現金10ポンドは年収の約6％，月収の4分の3に相当し，けっして端(はした)金ではない。むしろ，数十万円の感覚で受け止めるべきであり，そうでなければダンの妻が帽子や衣服に散財することもかなわないだろう。

104 劇作家の経歴に見る限り，ロビンソンは父親と若くして死別はしていない(父親の79歳での逝去は1921年12月31日で，ロビンソンはこのとき35歳)。ロビンソンの父は株式仲買人から転身してイングランド教会の牧師になっており，厳格なプロテスタントの教えを説く父親との葛藤から，無意識的に父親を作品から排除したのかも知れない。経歴年譜はMichael J. O'Neill, *Lennox Robinson*を参照。